
大魔術師と助手

沢凪 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔術師と助手

【Zコード】

Z0876Y

【作者名】

沢凪 炯

【あらすじ】

弓術師で賞金稼ぎ、男と間違えられること多々ありのフィフィは、ふいに安定した高収入を求めて城の大魔術師助手の面接を受ける事に。

さくっと面接に受かったものの、その大魔術師アシュリーに会ってみれば「要らない」と言われる始末。負ければ即・クビの御前試合でなんとか残り、正式に助手（何故か兼護衛）となつたものの、一向に「要らない」と言われ放置されるのは変わらず・・・。

そんなアシュリーに勝手についていく彼女と、彼女を面白がって

応援する城の住人達。徐々に距離の近づいて行くアシュリーとフイ
フイの物語。

プロローグ

孤島の王国があつた。

大昔には誰も知らなかつた王国。

外界となんの接触もなく時を過ごしたその国は
何時でも花が咲き乱れており、とても美しく、平和で、穏やかな
国だつた。

治めるのは代々女王。

優雅で美しく、聰明で、誰からも好かれていた。

？？時代が移り変わり

やがて一隻の船がこの孤島を見つけると、瞬く間に外界との交流
が始まつた。

文化、物資、様々なものが行き来し
いつしか王国に、外界の血が混じるようになつていつた。

それは、王家にも言える事。

しかしその頃から、王国の花々は枯れていつた。
憂えた誰もが親身になつて世話をしても
それを拒絶するかのように、花は枯れていつた。

そして、花が枯れるにつれ、孤島を囲む海が荒れていった。

徐々に外界は孤島に近付くのを止め、遂には誰も近寄らなくなつた。

海は荒れ、花は枯れ、人も病に倒れるものが多くなつていった。

それでも、王家だけは病に倒れなかつた。

けれどもいつも悲しみが付き纏い、次第に莊嚴な城から出る事は

無くなつた。

失意の底で、女王は祈る。

どうかこの海が静まるよう。

どうかこの花々が咲き乱れるよう。

どうか病が無くなるよう。

どうか、どうか？？

この王国が、かつての美しい姿を取り戻すよう。

そして？？

願わくば、哀れな私の娘が、愛するの方と共にいれるよう。

その晩、女王は眠りについた。

眠りは夢を誘い、彼女を虜にする。

咲き乱れる花々。楽しそうな人々。静かに波打つ海。の方と幸せそうにする娘。

全てが望むもの。
全てが憧れるもの。

そんな夢を毎晩見るようになつっていた。
そんな夢にずっといたいと思つ様になつっていた。
それが現実ならいいのにと願つようになつっていた。

ある朝、姿を見せない母を不思議に思つた王女は、そつと母の寝室を覗いた。

眠つてゐる母の顔を見て、王女は少し微笑んだ。

その顔が、あまりに幸せそうに満ち足りていたから。

しかし、そつと頬を撫でて凍り付いた。

女王はもう、冷たくなつていた。
それなのにどうだろ？

その肌は柔らかく、まるで生きているかのよう。
鼓動も止まり、息もしていない。

それなのに、女王は眠っているようだ。みえる。

その肌は、冷たく。

しかし、生きてはいない。

いつの間にか、母の周りには、失われた花々が芽吹き始めていた。

時は流れ？？

「」はクライスト帝国。

大陸の中心を統べる大国であり、その中心である王族、軍人のみならず国民さえもが国を考え、国を作っている。絶対的な信頼でこの国は成り立っていた。

その帝国一のギルドで今、運命の歯車が廻り始める？？。

「高収入？そんなのいくらでもあるだろ？が。ほれ、」いつなんか生け捕りにしたらかなりの大金だぞ？」

そう言つて、ギルドの男が指名手配書をひらひらと振る。それをうつとおしそうに見やり、相手は言葉を続けた。

「そうじやなくて、持続出来るものないか？」

ギルドの男はびくつと眉を跳ね上げ、訊ねた相手を睨んだ。

「だったら城にでも行け！」「」は安定職の仲介所じゃねえ。

「じゃあ城関連のないのかよ。」

「城に行きやあ分かる事だろ？が！」

はあ、と相手は大仰に溜め息を吐く。わざとらしく落胆して見せた。

「帝国一のギルドだつていうから、期待してきたのに残念だな。結局他廻るしかないのかー。無駄足だつたな。」

相手はまだ二十歳前後だろう。細身の体は鍛えてありそだが、別段熟練した風でもない。そんな青一才に馬鹿にされるわけにはいかなかつた。

「無駄足だと！？」

「だつてないんだろ？城の仕事は城に行かなきゃ分かんないんだろ？なら無駄足じゃねーか。」

「おい…ナメた事言つてんじゃねえぞ。」

そう言つと、ギルドの男は何かを思い出したよつて、忙しくリストをめぐると、一枚の紙を嫌味な笑顔とともに突き出してきた。

「月収200万イルだ！文句ねえだろ？が！」

返事はせず、相手は紙をひつたぐると内容を確認し始めた。

「……大魔術師の助手？該当者も内容も、全部わからんねえじゃねえかよ！」

「面接で話すつて書いてあんだけどうが？ビツすんだ。」

「……仕方ねーな。受理しな。」

「偉そうに言つんじゃねえよー。」

ギルドの男は荒々しく書類に判を押し、相手に押し付ける様にして渡した。こんな生意氣なガキの相手などしていたくはない。

「せつせと失せやがれ！」

そう怒鳴つたものの、身体に触れて違和感を感じた。男の顔色が変わると、相手は舌打ちとともに紙を奪い取り、一步離れてから不遜に笑つ。

「礼は盡つとこでやるよ。」

捨て台詞とともにひそかに出口へ向かつ。

男は何も言えなこまま、扉が閉まるのを見ていた。

クリエストの城では、一つの魔法陣の前で思い悩む女性がいた。
名はニールヴァ？ナ。

呼び名はニール。

儂気だが芯の強そうな瞳は赤みを帯びた紫。端麗な容姿を飾る真つ直ぐで長い髪は艶めく銀色。少し突き放した物言いをするが、困つてこる者を放つておけない性格から、男女から好かれる大魔術師だ。

「さて…なんて説得しようかしら…」

今も放つて置けない事態をなんとかしようと、思い悩んでいる。すると廊下から声をかけられた。

「ニールヴァ？ナ様！ いらっしゃいますでしょつか？」

兵士だろ？

ニールは魔法陣を諦め、扉を開けた。

「なに？」

「はつ！ギルドから、助手の希望者が来ておりますー。」

「助手…？ああ、あれね！どこにいるの？」

「はつ！検問室で待機しておりますー。」

「そ、ありがとうございます。」

それだけ言ってニールは歩き出す。兵士は数秒見送っていた。

「ニルヴァニア様…お綺麗だ…！」

検問室に入ると、すぐに希望者が目に入った。厚手のマントを羽織り、緊張した様子もなく椅子に座っている。その様に、思わず笑ってしまった。すると希望者がこちらを見て立ち上がった。

「私は大魔術師のニルヴァニアよ。」

「…弓術士のフィフィです。助手を探してるのは貴方ですか？」

「……貴方、女性？」

「はい。よく間違えられますが、女です。」

ニールはまじまじとフィフィを見てしまった。

薄茶の髪は肩につくかつかないかくらいで、背も女性にしては高め、男性にしては低めといったところ。顔立ちも中性的で、男だと判断されるのは、少し低めの声と、落ち着いた、少し堂々とした態度からだろう。

「…男名を下さると便利なんですが。」

その台詞で、今度は嘔吐してしまった。

「面白い人ねー…そ、座つて。話をするわ。」

言われてフイフイが腰を下ろすと、ニルは少し樂しそうに話しかけた。

「いじへ来る前は何を?」

「ギルで色々と。主に賞金稼ぎです。」

「そり。いつこの仕事は?」

「した事はありません。」

「魔術に興味があるの?」

「いえ、特にね…」

「家事は出来る?」

「……はあ、一通りは…。自分が生活出来る程度には出来ますが…」

「やう。男は嫌い?」

「……特には…」

「他国には行つてみたいと思つ?」

「……まあ、多少は…」

「面倒見はいい?」

「……面倒見た事ないのでなんとも…」

「やう。素直なのね。」

「… そうですか？」

ニルは何やら頷くと、にっこりとフィフィに微笑んだ。

「では試用期間を設けましょう。3週間頑張ってみて。」

そう言つてニルは席を立つ。すると、フィフィが慌てて呼びかけてきた。

「え！？ ちよつ… 今ので終わり？」

「あら、終わり。充分よ？」

「いやいやいや、仕事内容は？」

「ああ… 本人に聞いて頂戴。」

「ん…？」

フィフィはまじまじとニルを見た。

「貴方の助手じゃないんですか…？」

「あら… 私の助手じゃないわよ？ 私にはもういるもの。助手が必要なのはもう一人の方なの。あ、これ書類ね。持つて行つて。」

「もう一人…？」

そうそう、とニルは頷く。

「あ、あと男名ね。フィニアースと名乗つてもいいわ。好きな様に使つて。ただし王家の方々には女名でね。」

「もう一人つて？」

フィフィは今にも去りそうなニルに懸命に言葉を投げる。対してニルはにっこりと笑つて言った。

「部屋の外にいる兵士が案内するから、ついて行きなさい。じゃあね。」

そつ言つてニールが手を振つて部屋を出ると、入れ替わりに兵士が入つてきた。

「『案内致します、ファース様！』

「……

置いて行かれたフィフィは、仕方なしに少々疲れた思考を切り替えた。

（もう男の設定でいいんだな？）

取りあえず面接は通つたようだ。

今からその大魔術師の元へ案内してくれるようだし、それなら言われた通り、本人に色々訊くのが得策だろう。

そう考えて、フィフィは兵士に向き直つて頷いた。

「頼む。」

取りあえずは、ついていく他ないだろう。

城の長い廊下を淡々と歩く。

無機質なところもあり、中庭に面した暖かいところもあり、長くいたらおかしくなりそうだと、フイフイは兵士に視線を移した。

「あ…俺がつく大魔術師ってどんな人?」

あたし、と言いかけて慌てて直す。兵士は気付いた様子もなくフイフイの話に答えた。

「アシュリー様ですね! あの方は、大陸屈指の大魔術師です!!」「ふーん。で、性格は?」

得意げな様子をさらりと流し、フイフイは気になるところを訊いてみた。
しかし兵士は、途端に勢いを失つ。

「性格は…」

嫌な予感がする。

「なに?」
「…いえ… そうですね… 非常に関心が薄いといいますか…」
「何に。」
「その… 色々なものに…」

何と言つたらいいのか、と兵士は考へ始めてしまつた。

(とんでもないナルシストじゃねーよな…?)

不安に思つて聞いてみる。

「自分にしか興味がないとか?」

「いえ! そのような事はござりません!」

即答だ。

「ならその曖昧な言い方はどうから来るんだよ。」

「はあ…申し訳ございません…何分色々と難しい方でして…」

「難しいって…頑固親父かよ。」

「いえいえ! あの方はまだお若いですよ。フイアース様と同じ年頃ではないかと。」

「んじゃ 気難しいんだな。」

「気難しい… そうですねえ… そういうところもお持ちですね…」

「はつきりしねーなあ。」

「はあ…申し訳ござりません…」

すまなそつにする兵士を一瞥し、フイフイは話を止めた。一体どんな人物なのか、非常に不安がある。

(いくら城の人間だつて言つても、変人だつたらさつととんずらするか。安定収入は諦めるしかねえな。)

そんな事を思つてみると、目的の場所についたようだ。兵士が廊下の端へ避け、姿勢正しく直立していた。

「「こちらがアシュリー様の回廊になつております！」

「くー。」

兵士が指示した方を見て、フイフィは戸惑つた。そして、先程の兵士の台詞を思い出す。

「……ん？……回廊？」

「はい！大魔術師様お一人には、皇帝陛下より、回廊が与えられております！そして、こちらがアシュリー様の回廊になります！」

「……は？」

フイフィはもう一度その“回廊”を見る。廊下から続く扉を少し開けると、中にはまだ通路が続いており、今まで歩いてきた廊下から少し外を覗くと、その“回廊”とやらが「」字型にまだ続いているのが容易に分かつた。

「……で？案内はここまでつてか？」

若干威圧的なフイフィの言葉に少し気圧されつつも、兵士ははつきりとした口調で答えた。

「は、はい！お一人の回廊には、それぞれに属する者しか立ち入る事を許されておりません！」

「あた…俺も属してねえだろ！？」

「はつ！ニルヴァア？ナ様に渡された書類をお持ちですから、危険はありません！」

「危険つてなんだよ！」

物騒な言葉に慌てて食い付くと、兵士はそれを聞かなかつた事にし

て続けた。

「ともかく、お進み下さい！私はニルヴァニア様より、ここまでの案内を任されております故、これにて失礼させて頂きますー。」

言ひだけ言ひて兵士はぐるりと踵を返し、逃げるよひに離れて行く。

「おいお前！」

怒鳴るよひに呼ばれて兵士はさつと振り返り、敬礼した。

「御武運を！」

「はーい？」

そのまま急ぎ足で逃げて行ってしまった。

「つ…………」

脱力してそれを見送る形となつたフイフイは、ニルヴァニアから手渡された書類をまじまじと見つめた。

（ほんとにコレがあれば大丈夫なんだろうな……見ても分かんねえ。）

書類と睨み合つ事、数分。

（行くしかねえー！）

ぐつと拳を握りしめ、フイフイは回廊の扉を開けた。

ギイイ????、と嫌な音がする。

(うわっ、幽霊でも棲んでそうだな!)

若干ビビってしまう。だが、顔も見ずに帰るわけにいかない。それに上手く行けば安定した高収入が待っているのだ。

「アシュリー様!! ギルドから、助手として来ました、ファニアースです!!」

これでもかという程の大声でアシュリーなる人物を呼ぶ。

こんな広そうな回廊、隅々まで探す気は毛頭ない。大体、あまり人は入れないようだから、これだけ騒げばきっと出てくるだろう。

「アシュリー様!!」

肝を据えて、出来るだけ大股で歩いていく。

「アシュリー様!! 助手のファニアースです!!」

何度も叫んで自分でも煩いと思い始めた頃、通路に並んでいる扉の中に、少し大きなものを見つけた。

「.....?」

明らかに他とは違つ。とこりよつは、石の壁に扉のよつに切り込みが入つていて、中央に光る石が埋めてあつた。

(怪しいよなあ…。ここにこんのか?)

じつくりと観察し、その割りにはあまり考へずこ、その石に手を当ててみると、

(……)

「何も……つ…?」

何も起こらないと思った矢先、石は眩しく瞬き、扉がすうっと消え去つた。

その先は、真つ暗で何も見えない。

「……へえー……すげえ…」

しげしげと消えた所を観察し、そつと足を踏み入れた。

真つ暗だつたそこは、フィフィが踏み入れた瞬間、左右の壁に次々と火が灯つていき、下へ続く階段をはつきりと見せた。

「……アシュリー様ー!…」

階段の奥へと叫ぶ。しばらく待つと、微かに何か音がした。

(…変な実験とかしてて突然化け物とか出てきたらどうしようかな…)

(…)

なんて事を思いつつ、ゆっくりと警戒しながら石段を降りてゆく。

「アシュリー様ー？ いますかー？」

声のボリュームを落とし、慎重に足を進める。

「アシュリー様ー？」

階段は長いようで短く、簡単に突き当たりへ行き着いてしまった。目の前には、木製の扉。

（… じれ… 開けるんだよな…）

不安を抱えながらも、この向こうに何かいる、という確信があった。

（よじつ…）

意を決して、扉を押した。

こちらは、回廊の入り口の扉が嘘に思える程軽く、滑らかに動いた。それに感心しつつもフィフィは中を伺い見る。

「…アシュリー様ー？」

部屋は薄暗かつたが、からうじて部屋の様子は分かつた。どうやらいくつか大きな本棚があり、本は床に散らかっているようだ。中央には大きな机があるのが分かった。

（ようするに散らかしつ放しなんだな、アシュリーとやらね。）

「……う……」

(ーーー?)

部屋の中央からうめき声が聞こえた気がした。人の気配もする。お目当ての人物かと思い、そうと無造作に散らばる本を避けつつ机によると、誰かが机に突っ伏しているようだつた。

(んーー?)

その“誰か”の耳元が、弱々しく光つてゐる。興味を惹かれて覗き込んでみると、耳飾りの宝石が、僅かに光を放つてゐるようだつた。

(すげえ……光る石なんてあるんだなーー?)

その幻想的な光景を思わず観察してしまつ。その視線に気付いたかのように、光がこちらを“見た”気がした。

(んーーー?)

まさか、と思つた瞬間だつた。

「ーーー?」

飾りの宝石から眩いばかりの光りが飛び出したかと思つと、凄い早さでフイフイの周りを飛び出したのだ。

「なーーーーーー?」

とつさに逃げようとするが動きが早過ぎて進路が見えない。光はフイフィの眼前を眩しい光で埋め尽くす。

おまけに鈴を振るような音が、どんどん大きくなつていつて、ひどい耳鳴りがしてきた。

(眩し…それに、耳が…！…)

眩しさのあまり視界を奪われ、耳を塞ぐ為に身体を動かせば、それにする耐えられず、バランスを崩した。

まばゆい光。

ひどい耳鳴り。

フイフィは完全に目を閉じ、耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んで動けなくなつた。

その時、積み上げられた本の山を崩してしまつたのだが、フイフィはまったく気付けない。だが机に突つ伏していた人物は、その大きな音で目を覚ました。

(！？…人？)

「ウェスペル止める！」

明らかに侵入者を威嚇している使い魔に命令を下すと、光は一瞬驚いて固まり、ちらりとふてくされたようにして耳飾りの宝石に戻つた。

「ああ、ありがとうな。お陰で安心して寝れたよ。」

そう言って機嫌をとると、嬉しそうに、可愛らしい鈴の音で答えた。
光りも大人しくなっている。

そして、部屋の灯りが瞬時に灯った。

（で、この人は…？）

侵入者と言えど、城からなんらかの許可が出ている筈だ。でなければこの回廊へ入る事すら出来ないのだから。

しかしウェスペルの事を知らないとなると、王家からの許可を受けた者ではないだろう。
つまり“賓客”ではない。

（可哀想に。もう一度ウェスペルの攻撃を受けてるとなると、二ルの仕業か…？）

・02・（後書き）

「」意見、「」感想をいただけすると舞い上がります

話しかけても今は音が聞こえないだろ？

そう思つて、そつと瞼を手で覆つ。

一瞬びくりとしたが、眩しさを軽減出来る事に安心したのだろ？
しばらくそのまま大人しくしていた。

そして、そつと手を外してやると、ゆっくりと瞼を上げた。

（……なんか…ぼんやりしててよく見えねえな。）

目の前に誰かいるのは分かる。先程机に突つ伏していた人物だろ？
か。

それと、部屋の灯りがついていた。

（あ、見えてきた…）

だんだんと目に映る風景が鮮明に見えてくる。すると、目の前にいる人物が男だと分かつた。

若い。歳は同じくらいか、もしかすると下かも知れない。

明るい灰色の髪は肩くらいで、首の後ろで一つに纏めているものの、纏めきれない髪が両頬にかかっている。瞳は深い群青色だった。顔立ちは若干幼く見える。

その人物は、瞼からだけた手を、耳を塞いでいるフィフィの手に重ねてきた。

その行動に戸惑つたが、任せた方がいい気がした。

しばらくそのままで、やがてそつと手を離す。つらわれるように「
フイも耳から手を離した。

「……聞…る?」

聴覚もやられていたらしい。フイフイが困った様に眉根を寄せると、
その人物は大きな声で話した。そうすると丁度よく聞こえる。

「しばらくすれば戻るから。」

聞こえた言葉によくよく頷いた。それを確認すると、その人物は立
ち上がり、奥の扉へ向かった。

（まだ奥があつたのか…あいつがアシュリー様か？わつかないなあ…
さつきのニルヴァ？ナ様も若かつたけど…）

そんな事を思つていると、アシュリーと思われる人物が戻ってきた。
手にはポットとカップだ。足音がさつきよりも鮮明に聞こえた。

（耳も戻ってきたかな…）

そう思い、ゆっくりと立ち上がりつてみた。よろめく事もなかつたの
でもう大丈夫だと思われる。

試しに口を開くと、しつかりと自分の声が聞こえた。

「アシュリー様ですか？」

そう声をかけると、アシュリーと思われる人物は一瞬フィフィを見て固まり、続いて何も聞こえなかつたかのよつに椅子を勧めてきた。

「まあ座つて。お茶煎れたから。」

「…………」

言つた本人はすでに座つてカップに口をつけていた。

「失礼します。」

腰掛け、有り難くお茶を頂く。

「書類は？」

言われて一瞬なんの事かと思ったが、慌ててニールに渡された書類を差し出す。

アシュリーと思われる人物はそれを受け取つて、書類をじっくり眺めた。

「…………助手？」

書類を見たまま、訝し気にそう言つ。ファイファイはギルドで見た紹介状を思い出して頷いた。

「それで来た筈です。」

「…………」

「で、アシュリー様ですか？」

そう言つと、アシュリーと思われる人物はしばらく悩んだ。

(何悩んでんだよ。二者択一じゃねえか。)

大丈夫だろうか。ちょっと不安だ。

「俺がアシュリーだけど…」

(やつぱりだよな? 何悩んでたんだ?)

そんな様子には気付かず、アシュリーは怪訝そうにフイフイを見た。

「なんだって、助手?」

「俺に聞かれても…そういう紹介だったんで。」

(なんで本人が分かんないんだ?)

「二ルヴァ? ナ様には、試用期間三ヶ月と言われました。」

「二ル…!」

驚いた次には、頭を抱えてしまった。ちょっと心配になつてくる。

(もしかして助手って、頭のか?)

と、勝手に失礼な事を考へる。すると、はつと顔を上げてフイフイを見た。慌てて姿勢を正す。

「…なんで希望したの?」

「…安定した高収入の為です。」

言われてアシュリーは慌てて書類を見直した。

「“月給200万ソル”？」

「…アシュリー様は御存知なかつたんですか？」

「……」

（冷や汗でてんぞ。大丈夫か？）

口を開けたままわなわなしているアシュリーを見て、フイフイは丁寧に頭を下げた。

「でもまあ取り合えず助手なんで。よろしくお願ひします。」

ペコリ、と頭を下げる。アシュリーはそれを呆然と見ていた。が。

「……要らない。」

「は？」

まさかと思つて聞き返すと、さつきとは打つて変わつて、驚愕する様子も戸惑いもなく、迷惑そつた顔をしていた。

（…なんだコイツ）

思わずぴくりと口の端が動く。

「助手は要らない。俺には必要ない。」

「…そう言われても。」

言い返すのだが、ずい、と書類を押し付けられる。

「ニルにセウ言つて。」

一方的なアシュリーを無視して、フイフイは拒む。

「困ります。書類にはもう契約済みになつてゐるじゃないですか。」

「でも要らないんだ。帰つて。」

「帰りません。せめて三ヶ用は。」

睨み合つ事しばし。アシュリーは何かに気が付いて押し付けていた手を引つ込め、責めた。

「あ、君……！」

（あ、セウ言えさせうだつた……。）

失念していた自分を少し恥じる。だが、済んでしまつた事態は仕方がない。それよりもこの仕事を白紙にされては困る。

「なんと言われても帰りません。書類上では契約は済んでるし、せめて三ヶ用の試用期間は認めて下さい。」

フイフイが女である事に気が付き一瞬怯んだアシュリーだったが、直ぐに体勢を立て直した。

「……ニルと話してくる。」

セウ言つて出入り口へ向かつてしまつ。

「ちよつとー俺ほんとうすれば？」

「そこに座つてて。」

思い切り睨みつけられた様な氣がするのは氣のせいだらうか。

「あつ」

わつと書類をかすめ取つて、奪えないよつて上へ掲げる。

「書類は預かります。話し合いに必要ないでしょ？」

「……」

（このやうつ、つてか？思つてゐる事顔にでてんぞ、アシュリー様。怖かねえけどな。）

「ね？」

にっこり笑つてやると、アシュリーは一瞬目を丸くした。が、ちやつかり書類を奪還だつかんしたかと思つとぱつと身を翻して部屋を出て行つた。

（……なんか、ガキみてえ。）

小さな子供が急ぎ足で駆けて行く。周りの大人達は微笑んで、いつも通り道を開けてやる。

子供は大魔術師の回廊へやつてくると躊躇い無くその扉を開き、入

る。そのままの軽い足取りで奥へと進み、絵が沢山飾られた部屋へ入ると、田畠での絵を見つけて駆け寄り話しかけた。

「“しるべ”よ。主のもとへしもべをいざなえ。」

すると絵の人物は子供に手を差し伸べる。子供は素直に手を差し出し、絵は子供の手を取り、回廊の主の元へと誘つた。

「ニルわまー。」

幼い声が主を呼ぶと、ニルは愛おしそうに声の主を迎えた。

「お帰り、コンファ。」

「ただいまもどりました！」

コンファと呼ばれた子供が駆け寄れば、ニルは優しく抱きとめた。

「あの、アスさまが来るみたいですね。」

困った顔でコンファが言つと、ニルは笑つた。

「やつぱりね。あの男の事だから、絶対文句言つこいくると思ったわ。

」

やつ。予期していた事なのだ。

氣難しくて面倒くさがりの彼の事だ。助手なんて要らないと、それはもう不機嫌な顔をしてやつてくるだろう。

「ニルー。」

ほい。

噂をすればなんとやらだ。コンファがさつとニールの後ろへ隠れた。

「あら、なあに？ すゞい顔ね。」

ニルは笑いを堪えながらぬけぬけと聞いた。

「なにじゃない。これはどうこう事？」

転移方陣から現れたアシュリーは、予想に違わず思い切り不機嫌な顔をしていて、ニルは大笑いしそうになるのを堪えた。差し出された書類の内容を分かつていながら見直してみる。

「…貴方の助手の契約書よね。これがどうかした？」

「どうかしたじゃない。なんで勝手にギルドに依頼なんかするんだ。」

「今更どんな文句言つたつて無駄よ？ もう契約済みなんだから。」
「俺は同意してない！」

ぐつと拳を握りしめてアシュリーは怒鳴った。ニルは慣れたものだ。

「忙しそうだから気使つてあげたんじゃない。それに助手でもいなくちゃ、貴方の回廊つて足の踏み場もないじゃないの。」

「気使つただって？ 有り難迷惑つて言葉知つてる？ それに君は転移方陣で来るんだからあんなところは通らないだろ？」

「貴方に用があるのは私だけじゃないでしょ？ それに貴方の部屋ときたら、キノコでも生えそうよ。あれは衛生上良くないわ。」

「君が助手になるわけじゃないんだから関係ないだろ！」

「怒鳴るものじゃないわ。コンが怖がってるじゃないの。」

わざと大きな溜め息を吐き、わざとコンファを優しく撫でる。それを見て予想通り少し勢いが落ちたものの、アシュリーはしつこく抗議する。

「とにかく助手は要らない。君の書術なんだから君が破棄させて。もう契約成立なのよ。陛下も了承済みなのよねえ。破棄させるなら貴方が陛下に申告してくれない？貴方の助手の事なんだし。」

「俺は同意しない。なのに君が勝手にやつたんだ。君が破棄させるのが当然だろ？」

「私が言つたところで陛下は本人を連れて来いとおつしやる筈よ。どうせ貴方も行く事になるの。」

「どうして俺が！悪いけど君が引き起^ハした事態に俺が付き合^ハの義理はないだろ？あの助手を連れてわざと破棄してきて。」

強情なアシュリーらしい。これしきでは引き下がらないか…そう考えて、二ルは大仰に呆れてみせた。

「貴方つて人は…可愛い女の子を路頭に迷わせるの？」

その台詞に、一瞬固まるアシュリー。

「な、し、知つてて…？…いや、そんなの関係ない…とにかく俺には要らないんだから…」

「女の子がギルドで指名手配者を追つのは普通だつて言つの？」

「そ、そんな事言つてないだろ？俺は」

「そうやって生きてきたんだから死ぬまでそうじゅつて言つつもつ

？」

「だからそうは言つてないだろ！」

「じゃあ助手くらい認めなきことよ。」

「いや、だから…だつたら君の助手にすればいいじゃないか。」「私にはコンファつていう助手がいるもの、ねえ？」

にこりとコンファに微笑みかけると、心底嬉しそうに微笑み返してくれる。この無邪気な笑顔が、ニルには必要なのだ。そんなコンファを、アシュリーは複雑そうに見つめた。

「助手つていうより…」

「だからね、彼女は貴方の助手なの。ね？ 分かるでしょう？ 何も四六時中一緒にいるとは言わないわ。普段はあの回廊で、お互に好きに過ごしていればいいのよ。ね？ そして、仕事へ行く時は連れて行くだけでいいのよ。ね？ これだけの事よ。」

「…………

悩み始めたアシュリーに、決め手とばかりに笑んだ。

「それに彼女は『術士よ。賞金稼ぎしていた期間も長いし、貴方の苦手な体術を補ってくれるわよ。もう不意打ちで情けない姿を晒さずに済むじゃない？』

「…………！」

羞恥と怒りで言葉をなくすアシュリー。身体がぶるぶると震える。

「ね？ 分かつたら早く戻つて契約書の書術を完成させないと、確実に陛下からお呼びがかかるわよ？」

「……っー。」

契約の書術は、一番最後の段階を残している。それを長く放つておくと、城の魔力に歪みが生じて守りに影響を及ぼしかねないのだ。悔しさも加わってニールを直視出来ないアシュリーは、やがて黙つたまま、足音荒くニールの部屋を後にした。

「……」
「……ニールさまあ……」
「な、なあに?」
「……ゴンファは」わかつたんですけど……ニールさまはたのしかつたんですか?」
「す」く!—」

言つたかと思つと、ニールは声を上げて笑い出した。

「あ、アシュリーったら、本当に、面白じわーー!あんな屁理屈で、一生懸命考えるんですけどのーー。」

しばらく不安げにニールを見ていたゴンファだが、やがてつられて笑い出した。

「…ニールさまがたのしかつたなら、ゴンファもたのしいですっー。」
「いこ子ね、ゴン」

抱きしめると、小さな手が懸命に抱き返してくれる。その仕草が愛おしくて、ニールは切ないくらいに寂しさを感じていた。

「納得いかない！」

ばん、ヒアショウニーは机にハツ当たりをする。フィフィはそれを黙つて見やる。

この大魔術師、戻ってきたと思つたら、むつ二十分くらいこはじりにて考えてはハツ当たり、を繰り返していく。

最初は適當な所で諦めさせようと思つていたフィフィだが、アショリーの行動がどうにも子供っぽく、呆れてしまった。

（これでも大魔術師だもんない。あんまり早く才能が認められたから甘やかされたんだもんない、きっと。）

勝手にそんな事を思つて眺めている。

あぐいをかみ殺し、部屋を眺める。

アショリーをまた見る。

あぐいをする。

部屋を眺める。

それにも飽きてくると、やる事はひとつだらう。

そうよつやく決意して振り返ると。

（ん？）

「……はあ……もつこいつなつたら、なんとか契約破棄の条件を満たすよつこしないといけない。」

穏やかな寝息をたてるフィフィの姿がそこにあつた。いつの間にか
ウェスペルが、好奇心も露にフィフィの寝顔を覗き込んでいる。

「…………」

穏やかな光景だ。こうしてみると、さすがに女に見える気がする。

「…………」

（なんだって、ギルドなんかに？）

大きな屋敷の奉公くらいは、大抵の娘ならやっているの。

（そして、どうして助手なんか？）

本当に安定した高収入の為だけなのだろうか。怒りや不満をひと時
忘れ、アシュリーは珍しい来訪者に思いを巡らせた。

くすくす、と笑い声が聞こえた。眠っていた自分に気付き、重い瞼
を無理矢理開ける。

「…………ん」

（あれ？…ああ、…城か。いくら敵がないからって、熟睡し
過ぎたな。）

んー、と思い切り伸びをして、部屋を見回す。部屋の灯りは灯つた
まだ。

（…ほんと、本が多いな…本棚があるのに殆ど外に積んであるし…）

そう言えば、と思つてアシュリーを探すが、あいにくこの部屋にはいないようだつた。

（もう一つ部屋があるみたいだつたよな…）

その扉を探す際、ふと気付く。

「あれ？」

（そういうや、ここって地下だつけ。）

窓がないのだ。

（これじゃ時間がわからんねえな…ここへ来たのが昼間だつたから…夕方が夜か…）

窓がないと分かつていても、ついつい見回して探してしまつ。だが、無いものは無いのだ。

フィフィは立ち上がりつて部屋の探索を始めた。主がないのだから、暇な事この上ない。それに、仕事内容がはつきり分からぬのだから、何もしようがない。

「どれどれ…」

まずは机の上を調べる。大きめの木の机だ。その上には灯りを灯す不思議な球体。ペンと、インク壺。元は立派な机なのだろうが、ここにも本が散乱していてアシュリーが突つ伏していた辺り、そしてフィフィが寝ていた辺りしか片付けられていない。

「…………」

そのままにしておく。

部屋は広く、天井はとても高く、そこへ伸びるように背の高い本棚が並んでいる。

（あんなに高い所にあつて……あいつに本が取れるのか？）

考えてみて、軽く頷く。

（大魔術師なんだから、取れるか。）

取り合えず部屋中を見て回るつと思い……本で身動きが取りづらい事この上ない。という事態に気付く。

「……まあ、仮にも助手なんだし。片付けても文句言つなよ。」

今まだいな主に言い捨て、フィフィは片付けを開始した。

その頃、アシュリーは回廊を出て、城の廊下を考え事をしながら歩いていた。

（契約破棄の条件は……身元、仕事の態度、人格、これらに著しく問題がある場合……それから……王族の不満を買つ……あとは……くそ、俺が面接すれば済んだじやないか！……二ルのやつ……！）

そんなアシュリーを人々は避けて歩く。中には物珍しげに見る者も

いるが、それもその筈、アシュリーはあまり回廊から外に出ない。それに加え、城に上がったのはわずか十歳の時。わざわざ王が隊を組んで迎えに行つたのだ。この国のみならず、他国でも噂となり、この世界でアシュリーを知らない者はいない。

そんなアシュリーだが、魔術を使う時以外は至つて普通の若者であり、魔術以外の事には疎い。今も考え事に熱中している為、足下すらも見えていない。

この状況で真正面から来る人を避ける事は不可能だった。

「うう…！？」

顔から見事に激突し、ついでにぶつかった人物にがしつと抱きとめられた。

「なつ…？ぐ、苦しつ…」

「なにをやつてるんだお前は。」

体躯の良い身体を無理矢理引き剥がし、アシュリーは慌てて顔を上げた。

「……なんだお前か…」

げんなりして言つと、相手は眉根を寄せて言い返す。

「なんだとはなんだ。友が悩んでるよつだつたから声をかけてやつたのに。」

「いつでも上から物を言つよなお前は。」

アシュリーの目の前にいるのは黒須くめの男だった。長身の体に黒

い服を纏い、黒いマントを羽織り、腰に下げた剣の鞘も黒ければ、髪も目も黒い。黒という色彩は近寄り難い雰囲気を作るものだが、加えてこの男は目つきが鋭く、自分が気に入った相手にしか口を開かない。ついでに言つと、無表情。

近寄り難い事この上ない。

「リティ。突然、お前に助手をつけるって言われたらどうする？」

アシュリーがそう訊ねると、リティことリティオスは顎に指をあて、しばし考えた。

「…そうだな…追い返す。」

なんとも簡潔だ。

「じゃあオルクスあたりが勝手にお前と契約させてたら？」

オルクスというのはリティオスの親友で戦友で上司である。

「……殴る。」

「俺の場合、それは二ルだから出来ない。」

「なんだ。二ルヴァ？ナにそんな事をされたのか。」

「勝手にギルドに申請して、勝手に面接して、勝手に契約したんだよ…。」

怒りに両手を握りしめ、力説するアシュリー。リティオスはそれを興味深そうに眺める。

「それで、助手を追い返したくて考えている訳か。」

「そうだよ！お前も考えてくれ！」

「殴り倒して放り出せばいいだろ。」

「…出来ない。」

「ああ、武術は駄目だつたな。俺がやつてやるつか。」

「いや！それは駄目だ！」

物騒な発言に慌てて止めに入る。

「…何故。」

「いや…その…あつ…」

慌てた次は考え込み、何やら閃いたようだ。

「そうか…！その手があつた！」

そのままアシュリーは走り去つて行つた。

「…………唐突だな…」

残されたり、ティオスは一人ぼやき、何事もなかつたかのようにまた歩き出した。

-04- (後書き)

書術……文字に魔力を込める呪術。書いてあるものには出来ない。魔力を込めて書かれた文字は”書かれた場所、もの”に効力を発揮する。

例えば壁に書かれればベニヤでも鉄のような強度をもたせたり、重要書類に書き加えれば、特定の人物しか見れないようになり出来る。

片付け（とは言つても散乱していた本を、本棚に沿つて積んだだけ）が終わったファイファイは地下の部屋にいるのも飽きて、ここへ来た時に降りてきた階段を、今度は上がる。

消えていた階段の灯りは、ファイファイが一段田に足をかけると再び灯つた。

「IJの仕組みすげーよなあ……」

昇りきり扉を開けると、背後で一瞬にして灯りが消えた。

「すげー……」

感動しつつも地下を出る。そして、来た時に見かけた通路の扉を、一つ一つ開けてみる事にした。念の為にあの書類は持つている。

一つ田の扉を開ける。

「……本棚？」

本棚が並ぶ部屋だった。

一つ田の扉を開ける。

「……台所？……埃だらけじゃねーか……」

もう何年も使っていない感じの台所だった。

一つ田の扉を開ける。

「…あいつ地下しか使ってないのか？」

またも埃だらけの部屋。小さな机と、椅子が数個置いてあった。

四つ目。

「わあ、廊下かよ…」

取り合えず閉める。

五つ目。

「…ただのだだつ広い部屋か？」

かなり大きな部屋だ。しかし調度品は何もない。ここも埃が積もっていた。

その次はもう、回廊を出る扉だったので、先程の廊下へ続く扉へ戻る。興味本位で廊下を進んでみる事にしたが、若干不安に思つて扉は大きく開け放つておく。

廊下は必要性を疑うくらい短く、すぐに突き当たりの扉に行き当たつた。

「また扉…」

ちらりと入つてきた扉を確認する。開いているのをしつかり見ると、目の前の扉の取つ手に手をかけた。

「つー？」

まるで触れたのが分かつたかの様に扉がひとりでに開いた。音もなく。開ききるとぴたりと止まつた。扉から見える部屋は、いたつて普通に見える。

「…………」

もう一度、最初の扉を確認した。

「…………どうするかな……」

「ここを止めたとして、あの地下へ戻つてもする事がない。かと言つて先程の道筋にある部屋は埃だらけ。もう日も暮れるだろうから、回廊の外へ出ても兵士に不審がられるだらう。よつて。

「行くか。暇だし。」

フィフィは未知の扉からの誘いを受け入れた。

部屋は大きめで、壁には大きな絵が沢山飾られていた。どれも風景画のようだが、あいにくフィフィは芸術に興味はない。部屋を見回すと、奥へ続くアーチがあつた。扉はついておらず、閉じ込められる心配も無さそうだ。アーチから覗くと、そこはこぢんまりとした部屋であり、大きな扉の様な窓と、大きめの寝台が置かれていた。他には何もない。

窓へ寄つて扉を開けた。

「…………へえ……」

視界いっぱいに広がるのは窓の空。藍色の空の下、地平線の際は暁色と水色の空がまだ残つている。そこだけ見ているとまだ明るさを感じるが、天を見上げればもう星が瞬いている。フィフィはこの、不思議な窓の空が大好きだつた。

「良い場所だな……」

思わず頬が緩む。窓の外は充分な広さに張り出しており、フィフィはそこから下の様子を確認した。この部屋の外はどうやら中庭になっているようだ。今も見周りの兵士が見えた。

「…気に入った！文句言われる迄はここに腰座つてやる！」

満面の笑みで一人頷き、良く整えられた寝台へ倒れ込む。寝台はフィフィを優しく受け止め、やがてその重さを受け入れる。

「あー…すっげえ良い気持ち…」

田を閉じれば仄かに…植物だろうか。良い香りがする。手探りで自身の装備を確認した後、フィフィは速やかに睡魔に身を委ねたのだった。

その頃、またも城内を小さな子供が走っていた。しかしこの時のコンファの表情はとても慌てていた。行き交う大人達も少し心配そうだ。コンファとすれ違つたりディオスは、たつた今自分の主から聞いた事を思い出し、密かに溜め息をついた。

「まったく…我が主は物好きだな…」

「“ しるべ ” よ…主のもとへしもべをいざなえ！」

慌てて人物画に叫ぶと、絵の人物も少し心配そうに手を差し出し、道を通した。コンファは道から走り出て主を探す。

「ニルさま、たいへんです！」

セツと見渡すが主の姿は見えない。どうして主の就寝時間だと気が付き、それでもたつた今聞いた事を伝えなければと思い、コンファは寝室の扉に駆け寄つてそつと叩く。

「ニルさま、おやすみじてのじめんなさい。じつかおきてください……」

縋る様な声に反応したのか、又はまだ眠りが浅かったのか、ニルはすぐに扉を開けてくれた。昼間は結わえていた髪を下ろしていく、そつするともまるで女神のように見えた。

「…ゴン…じつかしたの？ 転ばなかつた？」

ふわりと顔を包まれて思わずうつとつしそうになるが、コンファは一生懸命気を引き締めた。

「はい！ 大丈夫でした。それよりニルさま、たいへんです…」

幼い助手の切迫ぶりに、ニルは微笑みそうになるのを我慢する。

「一体何？ 落ち着いて話してじらんなさい？」

「は、はい…」

言われた通り、コンファは落ち着きを取り戻す為に深く呼吸をした。

「…たつた今へいかからの使いが来て… 明日のアーリ、アスさまのじ

「お、おじねえですか？」

（…やつきたのね…）

一ルは思わず舌打ちする。

（即刻解雇出来ないからって、もつともらじこ理由を付けたのだわ…）

驚きと同時に怒りも湧いてくる。

（アシュリーの我が似た悪のつしてゐんだわ、あの方は…一ルわせ…）

はつと戸に返るとコンフアが怯えた顔で見てくる。

「あ…」めさね…コン。貴女に怒つてこるんじやないのよ…」

せつまつて抱きしめると、幼い手が縋り付いてくる。

「ちよつと…アシュリーにお仕置をつけてやらないことね…」

物騒な言葉にコンフアは慌てて主を見上げる。

「お、おじねえですか？」

「ええ、そうよ。あの馬鹿にはお仕置きとこつものが必要なのよ。

誰もが甘やかすものだから、ああいうひねくれた性格になるのだわ

言しながら小さな頭を抱しめる。その時の一ルがつとも笑つていなかつたのを、コンフアは見る事が出来なかつた。

…

そんな事も知らず、フィフィは朝の眩しい光に目を覚ました。

「…まぶし……」

ぼそりと眩いで布団の中に潜り込む。そうすると完全に日の光が入らないので、安眠出来ると喜つものだ。実に心地良い眠り。フィフィは満足そうに溜め息を吐くと、再び睡魔の誘いに応じた。

そんなフィフィが見当たらぬ事を、アシュリーは喜んでいた。

（宣告は必須だけど…御前試合までに見つかれば問題無し。慌てふためいてボロ負けしてくれれば文句無しだ！）

上出来、と眩いてつきつきと書類を進める。大魔術師といえど、仕事は魔術での応戦だけではない。國中の魔術に関わる問題と向き合わなくてはならないのだ。ペンを持つ手元にはウェスペルがいて、楽しそうに書類と主を見比べていた。が。

「…？」

急に部屋の温度が下がったような気がして、アシュリーは慌てて部屋を見渡した。

「あつ…」

あるものを見つけ、途端に責めるアシュリー。ウロスペルまで
もがさうと耳飾りに逃げ込み、震えている。

「な……なに……？」

必死に平静を装おうとするアシュリー。だがそれも氷の女神には通用しない。

「一体どうこいつもりなの？」

腕組みをして冷氣を発するのは一ル。穏やかな口調がさらに冷氣を呼んでいる。そんな威圧感に、アシュリーの虚勢はあつと壊つ間にひびが入った。

「ど、どうこいつもり、何が？」

田を見れず、しかしかろうじて椅子から立ち上がる。

「シラを切るつもり？ 貴方が彼女にしようとしている仕打ちよ。」「仕打ちなんて……必要な事だろ？」

そんなに必要だとは思っていないのが、田を合わせず縮こまつている事でバレバレだ。

「助手がどうして御前試合をしなくてはいけないの？ それも、負けたら即刻クビだなんて……」

「俺の助手が、ただのぼんくらじや困る。足手まといになるだけだし、迷惑なだけだ。そ娘娘？」

「あら、じゃあ彼女が勝つたら助手は決定つてわけね？」

「そんなの、勝てるわけない。」

「……へえ？」

しまった、とアシュリーは口を覆つたがもう遅い。ニルの目はひたとアシュリーを見据え、ちっぽけな罪悪感にぐさりと深く突き刺さつた。

「勝てないって決まってるわけね。それをあの方に唆したわけ！」

そう言われ、アシュリーは必死に言い返した。

「ニルが言つたんじやないか！体術を補うだろつて。だからそれぐらいの実力がなきや、絶対に認めないからな！」

意外な事にニルは反論しなかつた。だが、次にした深呼吸がアシュリーの不安を煽る。

そして。

「…………分かつたわ」

低く唸る様な台詞。思わずごくりと唾を飲む。

ニルの抑えた態度に膨れ上がる不安。だが、それが分から焦燥。

アシュリーは知らず、ニルを不安げに見つめていた。それを受け止めたニルが不敵な笑みを浮かべる。

「…今更そんな顔をしたつて駄目。」

むつとして反論しようとしたが、先程とは違つニルの微笑に凍り

付いた。

「節度が分からぬ悪い人には“お仕置き”よ。アシュリー」

？？過去この言葉を聞いて、いい思い出になつた試しがない。

ールは凍り付いたアシュリーに一警をくれると、転移方陣を使わず、地下からの階段をずんずん昇つて行つた。

フイフイは心地良い微睡みの中にいた。ふかふかの寝台に、ふわふわの布団。静かな空間。しかしそんな空間に何かが侵入してきたのを感じて、若干不機嫌になる。

（一体なんだよ？）

そう思つただけで、特に警戒はしなかつた。

「起きなさい。ファニアス！」

（ん？）

凛とした強い口調。フイフイは僅かに瞼を持ち上げたものの、暗闇が現実へ向かう事を拒む。

（まあいいか。）

そんなフイフイに、女神の逆鱗が落ちたのは言ひ間でもない。

「起きたと書かせるのよー。」

布団をはぎ取られただけならまだしも、身も凍るような冷気が一気に襲いかかってきたのだ。

「なつ……！？」

驚きに田を田黒をせるフイフイに、二郎は容赦なく言い放つた。

「午後から貴方は御前試合をしなければならないわ。そして勝たなければ駄目よ。」

- 10 -

返事は“はい”よ。何か何で

認めさせないといいわね

「待て、ひ下れい！なんの話ですか？」

一
御前
記

「勝つって…あー、御前試合?って、俺が勝てるよ!」
「…」

一瞬止まつた。

「ほんと待つて下さい。大体何の為に?」

嫌な予感がする。

「貴方の主の我が儘よ。後はそれを面白がつておる方々の要求よ。」
「俺は恰好の暇つぶしですか。」

「自覚したなら良い事だわ。もつ時間がないの。それそくわたしの回廊へ来なさい。」

「いやいやいやー俺はしませんよー?要するにたかがギルドの賞金稼ぎじゃ勝てない試合なんですね?」

やう言つたフィフィに、ニルは真剣な面持ちで近付いた。そして、やつくりと言葉を発する。

「……いい?これはもつ、決定事項なの。勝つ覚悟を決めなさい。勝てなければ貴方は、即刻クビよ。」

「…………は?」

「さ、行くわよ。」

「はー?」

「??アシュリー＝ウイルレイユの力場において、我、ニルヴァ?ナ＝ハティエスが道を紡ぐ。我是主の友なりて、誓いを共にするものなり。その誓約において我が力を許し給え??」

歌う様な魔術の聲音。それに誘われて視界は揺らいでいく。

事をしつかりと噛み碎いている暇もなく、フィフィは強制的に移動させられたのだった。

太陽が空高く昇り、闘技場を明るく照らす。観客席にはすでに沢山の人が集まつてきていて、城の関係者その他に、貴族、そしてわずかに庶民の姿もあった。クライスト帝国では全ての民に平等に機会を与える？？例えそれが貴族でなくとも。

さて、今回の御前試合は少し様子が違うようだと、人々は興味深々に時を待つた。どうも“あの” ウィルレイコに何者が付くらしい、と。

？？公に御前試合をするとなると…かなりの腕前と考えていいだろうな。
？？いやいや、噂ではどこの出かも分からぬ者を叩き出す為らしいで。

？？そんな事より、運が良ければ滅多に公衆へ姿を見せないウィルレイコ様を拝見出来るのよ。

観客がそんな話に盛り上がりがつてゐる中、王族の付近にいる者達は複雑な面持ちをしていた。ひそひそと話をしているのは、リディオスとオルクスだ。

「この御前試合の理由を聞いたか？」

リディオスが闘技場を見ながら話しかけると、オルクスも闘技場から目を逸らさずに答えた。

「ああ。」

「アシュリーが強行したから、ニルが裏で何か仕掛けてくるだろうな。」

「そうだな。」

「肝心の弓術……今朝ニルが連れて行つたそうだ。」

「……条件が変わつたな？」

「ああ。ニルが陛下に進言したらしい。」

負けたら即クビ。という条件だったのが、負けても王族やリディオス達が充分な実力であると判断すれば、フィフィは助手として認められるのだ。

「認めるか、否か？」

「……」

オルクスの問いに、リディオスは妖しく笑う。

「それは、あの者次第だな。」

その頃、闘技場の裏では？？。

「本当にでこれで大丈夫なんですか？俺、勝てる気がしないんですが……」

「私が受けたのよ。失敗はあり得ないわ。」

「いや、勝てるか聞いたんですが……」

「いい？負ければ即刻クビなのよ。何度も言つてるでしょ？」「いやだけど……」

「つべこべ言つてないでしゃんとなさい！注意する所をしつかり抑

えておけば大怪我はしないわよ。」

「本気でやらなきやいけないんじゃないですか！何が“儀礼的な試合だから怪我の心配はない”ですか！」

と、フィフィーとニールが騒いでいた。

闘技場にファンファーレが鳴り響く。白鳩が晴天の空に舞い、観客席から歓喜の声が上がる。

「ああ…始まつたよ…」

フィフィーが情けない顔でそういうと、傍らのコンファアがにこっと笑つた。

「大丈夫ですよ！全力でにげつつ、やる氣でいってください！」
「…お前の“やる”って言葉が物騒に聞こえるのは気のせいだよな

きつと。」

小さなコンファアはニールの助手らしい。見た目に違わず中身も幼いと思うが…しかし、聞いた限りでは、戦闘ではそうとう強いらしいのだ。

(こんなちつこくても強いんだもんなあ…。俺、思いつきり場違いな気がしてきた)

溜め息をつくと、小さなコンファアが心配そうに覗き込んでくる。そうされると、思わず安心させようと笑顔を向けてしまったのだった。

『では、弓術士ファニアース！御前へ！…』

「え、もつー？」

慌てるファイフイにユンファは精一杯応援する。

「さあいってくださいー！アシュリーさまにおしおきですー！」

「この相手はアシュリーじゃないだろ…」

げんなりしつつ、大歓声の中に足を進める。

一歩白煉瓦の上へ足を踏み出すと、闘技場に集まつたかなりの数の観客を確認できる。

（まじでやるんだよな… 一試合限り。…で、誰だ？）

闘技場の舞台へ上がり、試合相手を探すファイフイ。だが誰も上がつてくる様子はない。

（あれ？）

そう思った直後、信じられない言葉が聞こえた。

『この度の御前試合、太子たつての願い入れにより、太子自らが弓術士の実力を測る事となりました！』

どつと蜂の巣を突いたようなどよめきが広がる。それは王席の周りでも変わらない事だった。

「えつ…？殿下がお出になる…？」

驚くニル。横を見るとアシュリーまで驚いていた。

（殿下直々…？まざいわ。の方は“戦神”だもの…もう一公平な条件をと進言しただけなのに…）

ちらりとオルクスとリティオスを見ると、視線を闘技場から逸らさない様にしているのが分かつた。ニルは確信を持つて問う。

「…お一人とも…御存知でしたね？」

「…我々は主に忠実だ。他言無用。」

「…………」

オルクスの若干楽し気な声に、無表情で頷くリティオス。ニルは複雑な思いで闘技場のフィフィを見つめる。

（……殿下直々にお相手下さるなら、わざわざ派手な戦い方をして興味を引かせる必要は無くなつたわけだけど…大丈夫かしら…瞬殺されるような事はないわよね。まあ…どうやら度胸は座つているし、大丈夫よね？）

一抹の不安を覚えるニルをよそに…。

（は…？太子つて…ジーすんだよニル様…！…）

フイフイはもう動搖しきっていた。そんなフイフイの前、対面する舞台に一人の青年が上がる。すると割れんばかりの歓声が上がり、思わず耳を塞いだ。

（すつげ…王太子は人気者だな…）

顔を若干顰めつつ相手を見やる。そして、その手に持つ、あまりにも不釣り合いな武器に目を止めた。

（まじ…？）

太子の噂は聞いていた。外貌は白い肌に黄金色の短く波打つ髪。切れ長の瞳は豊かな大地の色。そんな外貌とは裏腹に、太子でありながらオルクス、リディオスにも引けを取らない腕を持つ。戦う姿は戦神と例えられる程だという。

（それにしたって、あれは…ちょっと無理があるんじゃ…）

美しき戦神の手には、巨大な斧。身の丈程の。肩に担いでいるとこうを見ると、見た目と違いあまり重量はないのだろうか。太子の足取りも重さを感じない。

（もし見た目通りの重量なら、あの細腕じゃ満足に扱えないだろうし、見た目程の重量がないなら威力は小さい。ああいう類いは振りかざして使うから…まだ勝機はあるか…？）

そう吟味していると、前の太子から声がかかる。

「先手をやるわ。」

「え？」

「言つたきり、太子はフィフィを見据えて笑んでさえいる。

（なめられたもんだな…。実力は否定しねーけど、腹立つ。）
「じゃあお言葉に甘えて。」

そう返すと、太子は軽く頷いた。それを受けた闘技場の銅鑼が鳴り響く。フィフィは迷わず床を蹴つた。

思い切り床を蹴り、低く跳躍しながらフィフィは行動を決めていた。

（…見た目がどうだろ？と“戦神”と異名を持つ程だ。様子見なんしてたら負けるのは確定。なら？？？）

床を再度蹴り、太子の懷に転がり込む。フィフィが銅鑼の合図とともに床を蹴つてから太子へ一撃を繰り出すのに、一秒もからなかつただろう。その早さに闘技場全体が息を呑んだ。しかし、驚愕したのはフィフィの方。

（まさか…）

太子の鳩尾を狙つて繰り出された右足は、当たるどころか掠りもしない。冷や汗を感じつつ気配を追つて視線を動かせば、太子は舞台の中心に降り立つたところだった。？？軽やかに。

（あんな大斧持つて、こんなに早く動けるもんなのか！？）

フィフィの動きを予測していたから動けたのだろうか。なんにし

ても最初の一撃が外れたからといつて次の手を考える余裕などあつてはいけない相手だろう。ファイフイは困惑しつつも気を引き締め、直ぐ様太子を狙つて弓をつがえて矢を放つた。

僅かに動いてそれを交わした太子は、ファイフイに笑う。

「弓術士が始めに蹴りでくるとはな。一人で戦う事に慣れているとみえる。」

その間にもファイフイは近付いて、確実に太子を倒そうと攻撃を繰り出す。

「当たり前だ！」

近付いては体術を仕掛け、距離を取つては、弓をつがえる姿がはつきりと確認出来ない程の早さで矢を放つ。

（ちつ…隙がねえし、何より…）

太子は避けるばかりで一向に反撃の素振りがない。その顔に笑みが浮かんでいなければまだ、勝機を感じられたかも知れないが。あいにく太子は不敵な笑みを浮かべていた。

（油断ならねえな…余裕なのが見て取れる。）

背後に回つて蹴りを繰り出すも、また避けられる。

再び距離を取ろうと後方に跳躍した、その時だった。

（なつ…！）

一瞬前までなんの素振りもなかつた太子が、フイフイを追つてきていた。その、激しい程の気迫。強い眼光。振り上げた斧の柄がフイフイを狙う。

？？捉えた。

そう、田が言つてゐる。

（油断してた…！）

繰り返される単調な攻防に、知らず慣らされていたのだ。迫る、衝撃の時。フイフイは渾身の力で斧の柄を捉え、自らの体を、その軌道から逃す。

舞台の床、岩を碎く音。と同時に体が床に投げ出され、勢いで床を転がつた。急いで身を起こせば、少し先に大きく碎けた床と、大斧を肩に担いでこちらを見つける太子が見えた。

「…はは、見た田通りの斧じゃねーか…」

思わず口をついて出た言葉に、太子は軽く笑つた。

「油断していた割にはよくやる。だが、その程度では認められんぞ。

「……」

太子は沈黙するフイフイをじばし見やり、すぐに動いた。はつとした瞬間には頭上で斧を振りかぶつている。

（くそ…）

体勢を立て直す暇もなくその場を逃れる。しかし先程までとは打つて変わり、太子はフイフイを追い立て始めた。

（まざいわ…）

一ルははらはらしながら試合を見守る。

（忘れてこぬんぢやないでしょ？この私がわざわざ指導したところのこ。コンにも手を貸してもらつてこりのよ…）

焦りで頭が回らないのだろうか。だとしたら。

（……その程度だとしたら、私の田は衰えたのだわ。）

ニルは複雑な思いで舞台を見つめる。

思い切り水平に振りかぶられる斧。ファイファイは屈んでそれを避け、太子の腕を掛けて蹴りを繰り出す。斧を持つ手元を狙つたそれは、半回転して避けられ、逆に太子の蹴りをくらつ。からくも両腕でそれを受け、ファイファイは後方に吹き飛ばされた。身を捻つて無事に着地したものの、太子はもう走り出している。

（あたしは獲物か…）

爛々と輝く田がそつまつしている。

（まさに戦神か。あんな大斧持つて軽々と動き回られちゃ あな…）

離れた距離から一足飛びで接近してくる。それを見ながら、フイ
フイは行動を決める。

（持久戦はあんまり得意じゃねーんだよな……やつてみるか。）

その為に女神にしごかれたのだから。

頭上から降り立つ戦神に片手を向ける。くすり、と笑ったのが分
かつた。

？？やつてみる。

そう、言つている。

（やつてやるよー。）

「エウニアの加護を！」

そう叫んだと同時に斧が振りかぶられる。僅かな距離と時間を稼
ぐ為にかがみ込み、万ーの為に弓をつがえた。
？？その時。

「…………まさか……魔術……？」

呴いて、アシュリーはもう一人の大魔術師を見た。彼女は満足そ
うに舞台を見ている。

（まだ人を見る目は衰えていないのだわ……）

頭上から助手候補者を追撃していた太子は、降り立つ直前に体勢を崩した。観衆があつと思つた次の瞬間、着地場所にいたファイファイは大きく後方へよろめいた。

（いつて…）

着地体勢を崩した太子が、構えていたファイファイに蹴りをくらわせたのだ。それを受けた左腕を気にしつつも、太子へ向けて矢は思い切りつがえてある。対する太子も、大斧を構えていた。しかし、お互いにぴたりと狙いを定めたまま動かない。

「…………一体どうなつてるんだ…？」

咳くアシュリーに、友は囁く。

「二人共相手の間合いにいるのだ。あれでは動けん。」

動けない、という言葉に訝し気な様子のアシュリー。太子は”戦神”だ。間合いなどあまり意味を為さない筈。するとリディオスは戯けたように肩をすくめた。

「普通なら。」
「じゃあ……」

言葉の意味を察したアシュリーは若干嬉しそうに言うが、リディオスははつきりと言い切った。

「それをしないのは、これが”御前試合”だから。ここは戦場ではないからな。」

「…………！」

絶句するアシュリーの横で、ニルがさも嬉しそうに笑っていたのは言ひ間でもない。

（くつ……いてえ……もつもたねーかも…）

先程から左腕が震え始めている。今はまだ狙いを定めていられるものの、あと数分したらぶれてくるに違いない。どうしようかと考え始めた時？？

（ん……？）

太子が笑んだ。

今までとは違う雰囲気に、フイフイは注意深く相手を観察する。すると相手は戦闘態勢を解き、フイフイに背を向け、王席へ向けて歩き出したのだ。

「は…？」

戸惑いつつもしばらく太子の背に狙いをつけていたフイフイだが、次に太子が行つた行動に啞然とした。太子はいきなり立ち止まると、王席へ向けて声を張り上げたのだ。

「国王陛下。ただ今の手合わせにおいて、私ヴィルジウスは、弓術士ファニアースは大魔術師アシュリー＝ウイルレイユの助手兼護衛として、充分な実力があると判断致しました。我が名を持つてこれを誓います。」

言い終えると優美な礼をとる。観客席からほびよめきと拍手が送られているが、フィフィは啞然としていた。

(クビはなしか……?)

本当なら嬉しい筈だが、あの太子自らがそう宣言する事に、なんとも言えない不安が沸き上がった。たった今数分戦つただけだが、相手の性格はなんとなく分かるものだ。

そんなフィフィには目もくれず、太子は舞台を下りて行く。どよめきは拍手に変わつており、太子に認められたフィフィには割れんばかりの拍手と喝采が注がれている。

いつまで立つてもぼうつとしているフィフィを見兼ね、兵士が退場を促した。舞台の裏で待つていたのは、大魔術師の幼い助手と、屈託ない笑顔の女神だった。

「よく頑張つたわね。これで貴方のクビは守られたわ!」

「はあ……」

「でんかのたいせいをくずすなんて、そつ出来ることじやないですよ!」

「はあ……」

二ルとコソファは一齊にフィフィに抱きつくり、じやあ一度城へ戻つて支度なさい、と言つて去つて行つた。

まだ不安は拭えない。本当にこれで危機は去つたのだろうか。そう考えていると、またも見兼ねた兵士が闘技場の外へフィフィを誘

導した。そこで数人の女性に引き渡され、促されるまま城へ戻ったのだった。

城へ戻り、回廊に戻るのか思いきや、フイフイは女性達に連れられて城の一室に来ていた。城内の構造が分かっていないのだから、城の一室、としかいじようがない。

「さあ、では本田は二〇九の部屋をお使い下さい。」「え、二〇九へ？」

思わず問い合わせたフイフイに、女性達は田配せして笑う。

「フイアース様が女性だと云つ事は聞き及んでおりますわ。ですかり、そう仰る気持ちも分かりますけれども、男性に不用意に近付く事は本来はしてはならない事です。特にこの、城の中では。」「は？」

なんでフイフイの性別を知つてゐんだと想つたが、それよりも台詞の内容が氣になる。

「ですから、正式なお言葉を頂くまでは二〇九の部屋をお使い下さいませ。」「いや、何が不用意なわけ？ここにいろと云われたらここに居るけど、変に勘違いされちゃ困る。俺があいつの側にいたいとか思うわけないだろ？」「

まあ、と女性達は笑つてしまつへりこ同じ動きをする。

「あら、アシュリー様に憧れる女性は多いんですね?」

「何もお感じにならない?」

「呆れはしたけど。」

「呆れるですって! 一体何に?」

「まさかアシュリー様から何か言われたんですね?」

「いや、行動が…」

「行動! ?」

「…」

明らかに言葉を都合良く解釈している女性達に、フイフイは若干怒りをもつて言い置いた。

「ちょっとと聞け! 俺はそういう話に興味ねーから、騒ぎたいだけなら俺がいない所でやつてくれ!!」

「…」

「…」

唖然として見つめる女性達。ちょっとと言い過ぎたかと思ったが、女性達は声をあげて笑い出した。

「なんだ、そうでしたの!」

「フィニアース様が女性だと知らされた時はもう、アシュリー様が婚約相手を留め置くのだと思いましたわ!」

「なんでそうなる! ?」

「だってアシュリー様ったら女性に興味がない…というか、もしかしたらお嫌いなよつでしたので、そんな方が女性を側に置くとなれば…ねえ?」

「…極端だな…」

「ともあれ、フィニアース様が恋愛に興味のない方で安心致しました。」

「

心から嬉しそうにそう言わると、ファニアースは居心地の悪さを感じた。そんな事で嬉しそうにされても。

「あ、申し遅れました。わたくし達は明後日までファニアース様のお世話を命じられております。どうぞよしなに。」

そう言つた女性達はみな楽しそうに笑いあい、その純粹さからか、表情が幼く見える。

（可愛いなあ……）

ファイフイは彼女達に強く好感を持つたのだった。

「ところで、先程の試合で殿下に何をなさいましたの？」「何つて？」

聞いた所で侍女達はファイフイに詰め寄る。

「殿下の体勢を崩した時ですわ！」
「戦神とも呼ばれる御方に何をしたんですの？」
「もしかして魔術をお使いになるんですの？」

畳み掛ける彼女達に、苦笑いで答える。

「いや……一ル様に教えて貰つたんだよ。それで、この図形をくれて

「……」

手を差し出すと「…」とばかりに覗き込んでくる。

「まあ…これは…」

「あら…一ル様がこれを…」

「良いものを頂きましたわね」

微笑む侍女達に、今度はフイフィイが問いかけた。

「知ってるのか？これがなにか」

「まあ。御存知ありませんでしたの？」

「フィニアース様はこちらの生まれではありませんの？」

「これは大魔女“エウェラ”を繋ぐ図形ですね。」

？？クリスト王国ウル暦53年。公式には発表されていないが、王国の誇るもう一人の大魔術師に付き人が付いた。大魔術師の名はアシュリー＝ウイルレイユ。付き人は助手兼護衛を任じられた、フィニアースことフィフィイ＝ルセ。
『術を操り、後にエウェラの絶対的な加護を受けたと語られている。

・06・（後書き）

フイフイ、ようやく助手になれました…！

主人は認めてないけど（笑）

アシュリーの元へと戻ったフイフイに、正式に主人となつたアシュリーはさも面倒臭そうに言い渡した。

「…主に関わる人達に紹介するから。」

「……はあ…」

表情から口調から雰囲気から、体全体以上のものから嫌がつてゐる気配が感じられる。元から歓迎されてはいなが、こうもあからさまだと、怒りを通り越して呆れてくる。

一言伝えたアシュリーは、そのまま黙つて地下からの階段に足をかける。ちらりと振り返る動作から、付いて来いといつ意味だと悟つたフイフイも黙つてついて行く。

（観念してくんねーかなー…）

そう思うも、アシュリー相手ではなかなか難しそうだ。

アシュリーは地下を出てからは一度も振り返る事なく、（といふか存在を忘れないだろうか？）廊下をすたすたと歩いて行く。

歩いているうちにフイフイはある事に気付いた。

（…すっげえ視線。）

侍女らしき人達から官吏のような人達まで、誰もがアシュリーに叩頭しつつ、物珍しげにアシュリーとフイフイを見ているのだ。

（あたしは分かるけどなんでアシュリー様まで？）

一步、いや、五歩程前をゆくアシュリー本人は全く気に留めてい

ない… というよりも目に入っていないようだ。
(この人… 目の前しか見えないタイプか… ?)

「の予想は、アシュリーが2つ目の角を曲がる時に確信に変わった。

壁に激突しそうになつたのだ。

激突しなかつたのはアシュリーが珍しく我に返つたからだが、まだ出会つて間もないフィフィにはそれが珍しい事だとは分からない。(どんくさ…)

大魔術師として城に召し抱えられているアシュリーだが、レザという時役に立つんだろうかと、フィフィはぼんやりと思つた。

アシュリーがフィフィを紹介する為に一番始めて訪れたのは、鍛錬場だつた。夜が開けくる前にも関わらず、とフィフィが訝しんでいると、鍛錬場に人影があるのに気付いたのだ。
(こんな朝早く… 打ち合い?)

人影は一つ。激しい打ち合いの音が聞こえている。近付くアシュリーは足を止めず、何事が呴くとウイスペルが鈴を鳴らすように身を振るわせた。その音が届いたのか、人影達は打ち合いをやめ、こちらを向いた。

(あ……)

弱い日の光に照らされ、その二人の正体が分かつた。闘技場で見た二んだ。

二ルの教えでは、上から下まで黒尽くめの男がリディオス。淡い金髪に濃い肌の色、紺青色の耳飾りをしているのがオルクスだった筈だ。

「お前が早起きとはな。」

少し意地悪く笑つたのはオルクスだろつ。王師軍隊長だと聞いて、勝手に初老だと思っていたが、若い。それになんだか剣士という気がしない。魔術師のような雰囲気を持つ男だ。

「仕方ないだろ…」

不服そうに返すアシュリーに、リティオスだりつと思われる男が無表情に言う。

「ニルにしてやられたな。」

「……！」

その言葉にショックを受けるアシュリー。それを見てオルクスは可笑しそうに笑う。

「やつぱり…ニルがあの方に出来るよつたんだな！」

「それは違うぞ。殿下が出ると仰られたのだ。…それにしても、やり過ぎたのだ、お前は。あのままやれば陛下からお叱りを受けていふところだつたぞ。ニルヴァーナに感謝するが道理。」

諭すオルクスに反論出来ないアシュリー。

しばらくそれを眺めていたリティオスは、飽きたように先を促した。

「それで？」

「え？」

「後ろの『』術士は連れて歩いていいだけか？」

「あ……」

「おいおい、とフイフイは呆れる。本気で忘れられたのか。

「…俺の助手になつたフイアースだ。」

「よ、よろしくお願ひします。」

(そんだけか！-)

という突つ込みが入れられないのが歯がゆい。すると、オルクスが苦笑しながら付け足した。

「ファニアースは弓術士で、護衛も兼ねると聞いているが？」

「…そう。」

「そう言えばニルからヒューラの加護を授かったようだな。リティオスが言つと、アシュリーは思い出したようにはつとファイを振り返つた。

「そうだ！」

驚くファイファイの手首を掴むと、その手の平を覗き込む。

「なん…ですか？」

するとあとの二人も覗き込んで来た。

「あのー？」

若干冷や汗混じりに問つファイファイ。

「正式な図形だな。」

「樹力が混ぜてあるな。」

「ニルはどういうつもりなんだ…？」

「どういう事になつてるんですかね。」

ファイファイのやや強めの口調に、オルクスは下から覗き込むようにして言った。

「ヒューラの加護を受けている、といつ事だ。」「は？」

全く分からず問い合わせ返すファイファイに、オルクスは楽しげな笑みで答える。

そして、ファイファイから離れて本来の目的に戻つた。

「挨拶が遅れたな。私は王師軍隊長オルクス＝ファイセラ。頻繁には会わんだろうが、よろしく頼む。」

「ファニアース＝ルセです。こちらこそよろしくお願ひします。」

王師は、王直属の軍だと聞いている。それを、一見若く見えるオルクスが束ねているとは…ファイファイは失礼にならない様に気を付け

ながら、つい眺めてしまつ。口調や態度から充分な貴祿のよつなのを感じるのだが、しかし、若いと思う。

「俺は黒騎のリディオス＝ローグだ。」

「フィアース＝ルセです。よろしくお願ひします。」

黒騎とは、太子の騎士だ。クライストでは古くから、王位継承者の為の騎士がいる。

騎士は必ず王位継承者から色を授かり、それを名乗る。ヴィルジウスの騎士は、黒を授かつた。故に黒騎といつのだ。

リディオスはニルヴァーナの教え通り黒尽くめだった。黒い髪、黒い鎧、黒い服、黒い靴。腰に下げている剣の柄、鞘までが黒い。所々銀の飾りがあるが、ほとんど目立たないくらいのものだ。

表情は動かず、口調も淡々としている。馴染みにくく、近寄り難い雰囲気があつた。

「あとはルキセオードか？」

問いかけるオルクスにアシュリーはただ頷いた。それを見兼ねたようにリディオスが言う。

「改めてニルヴァーナとコンファにも紹介しておけ。」

「分かつてゐる！」

心底不服そうなアシュリー。リディオスとオルクスはそんなアシユリーを面白そうに眺める。

「ルキはどこにいる？」

「あいつならまだ部屋にいるだろ。」

「寝てるんなら後で……」

「お前と違つて我々は早起きが仕事だからな。まだ部屋にいると言つても、問題はなかつ。」

「……」

オルクスの言い草に、不機嫌に輪が架かるアシュリー。が、溜め

息を一つして、それを抑えた。

「じゃあ…」

「ああ、ではな。我々も戻るといよ。陛下がお田覓めになる頃だ。」

「

一人の元を去りながら、フイフイはアシュリーに言つてみた。

「…アシュリー様。」

「…なに「元」

思いつきり嫌そうだ。

「助手がそんなに嫌なんですか?」

「…いても仕方ない。」

「…ならニール様はなんで助手をつけたんでしょうね?」

「…そんなの、ニールが世話焼きだからに決まってる。」

（…もしかしてニール様…アシュリー様にお目付役が欲しかつただけか?）

そう考えて、フイフイはニールの不敵な笑みを思い出した。

（…あり得るかもな…）

「貴方の仕事内容を聞いても?」

するとアシュリーは若干驚いたよひにひひりを振り返つた。

「…聞いてどうするの。」

「自分の仕事の参考になります。」

「…

始めて会つた時からさうだが、フイフイにはアシュリーの反応するポイントが不思議だ。なんだか掴めない。

「…魔術に関する問題の処理。」

「ですよねそれは分かるんで詳しくお願ひします。」

「…小さな問題は書面で解決法を返す。事の重大さによつては

俺が直接行つたりする。呪薬を渡すだけの事もある。その場合は兵士に受け渡しを頼む。…くらいかな。」

「……なるほど、分かりました。ありがとうございます。」

「……それで？」

「はい？」

「それで、今言つた事に対して、何をするつもり？」

（…驚いた。意外としつかりしてそうだな…）

こんな形でも、アリュリーがフイフィに向き合つてくれるのが嬉しく思えた。

「そうですね…画面で解決出来る問題なら俺の出番はないでしょう。ですが貴方が出向く場合は…」

この城へ来てから初めて、アシュリーはまともにフイフィの顔を見ていた。それが嬉しく思えて、思わず頬が緩む。

「全力でお守りします。」

迷いのない言葉。真っ直ぐな視線。フイフィの強い意志を感じた気がした。

「…………そり…」

それだけ言つてまたさつさと歩き出す。だが、ウイスペルが驚いて耳飾りから飛び出してきた。

さかんに顔を覗き込まれ、アシュリーはウイスペルを睨む。

「……なに？」

そう言われると、ウイスペルは納得したように一人を見比べ、耳飾りへ戻つていった。

「どうかしましたか？」

「…………何も」

それだけ言つて、前を向いて歩き出す。フイフィは首を傾げつつもついて行つた。

階段を上がりつて城の一階となる部分へ行く。今度はしっかり周りを見て歩いている様子のアシュリーは、どこにもぶつかる事なく目的の部屋へ辿り着いた。

他の部屋の扉より少し立派な、しかし、どこかさつぱりとした装飾の扉を叩くと、中からはつきりと返事が返ってきた。

「ルキ、アシュリーだ。今いいか？」

「アシュリー様？ お珍しいですね。」

すると、扉がゆっくりと開かれ、一人の青年が姿を現した。濃い緑の瞳が印象的な、凛々しさを感じる青年だ。早朝にも関わらず、着替えは済んでいると見えて、ファイフイは先程のオルクスの言葉を思い出して関心した。武人は早起きなのだ。

「おや、そちらの方は……？」

穏やかだが意思の強そうな声音は耳通りが良い。

「今日から俺の助手になつたファイアニスだ。」

「ファイアニス＝ルセです。よろしくお願ひします。」

「そうでしたか……ああ、御前試合は拝見させていただきました。殿下相手にあれほどの戦いが出来るとは、なかなか出来る事ではありません。尊敬致します。」

「いえ……試合じゃなかつたら無事じゃ済まなかつたでしょうけど。」

ルキと呼ばれた青年は、あの試合だけでヴィルジウスの力量をほぼ正確に量つたファイフイを、驚きも露に見つめる。そうされると、ファイフイも驚いて言葉が出ない。

言葉が続かない二人に居心地が悪くなつたかの、はたまた部屋

に戻りたいだけか、アシュリーは踵を返そうとした。

「じゃあ、紹介しに来ただけだから…」

「……さようですか。… フィニアース様。名乗りが遅れて申し訳ありません。私は王師、黒騎を除く全軍の指揮を任されております、従騎のルキセオードと申します。以後、お見知りおき下さい。」

ルキセオードの礼に、こちらも深く礼をして返す。アシュリーはわざわざ踵を返して歩き出していくので、フィフィもそれに従つた。

「… オルクス様も、リディオス様も、ルキセオード様も若いですね。クライスト城には優秀な若者が集められてるとか？」

そう問うと、アシュリーはなんでももない顔でさらりと言つた。

「優秀だったのがたまたま若かつたってだけだろ。」

「そうですか。… 若いと言えば、ゴンファは最年少ですよねえ」

「…… そうだな…」

ふと、考え込むような声。しかし問い合わせるとすぐに元の調子に戻つた。

「ゴンファはどうしてニール様の助手に？」

「… 君は知りたがりだな。」

「知らない情報が多過ぎるので。」

「俺は騒がしいのは好きじゃないんだ。」

「騒いではいけないつもりですが。」

「……」

フィフィの存在を無視する事に決めたらしい。よつするに不毛な言い合いで苦手といつわけだ。

（苦手な事が多いよなあ…）

フィフィはちょっと心配になつた。

「アシュリー様！」

呼ばれてアシュリーは足を止め、声の主を探す。すると兵士がこちらへ小走りに駆けて来ていた。

「どうかした？」

「はつ。ニルヴァーナ様より、フイアース様を借り受けたいとの伝言でござります。」

……フイアースを？」

俺を？」

「問い合わせ返すアシリヤー達に若干戸惑いつつ、兵士は伝言を続けた。

アシュリーは一瞬フイフイと視線を合

「……行つてくれば？」

その言い方に反論しないと思ったが、先に兵士が声を上げた。

では、

「アシリ―」
アシリ―が何を言う間もなく走り去って行く兵士。

卷之三

思い切り投げやりな言葉をかけると、さすがにアシュリーが振り返るのが見えたが、フイフイはさっとその場を後にしてやった。

ところで、まだ数日間の付き合いだと言うのに、ニルヴァーナといふ大魔術師からの呼び出しには何かあるのではないか、という不安が沸き上がってくる。そして、それが確信に近いものだというのが怖い。

(そりだよな。まだ一週間も経つてねーじゃん…)

だとうのに。

ニルがどういう人間なのか、大体分かる気がする。先程の兵士に案内されてニルの回廊まで来ると、フイフイは目を閉じて出来るだけ深呼吸をした。

「あれ？」

見ると、回廊の扉の前にニルの小さな助手がいて、一いち方に手を振っていた。

「コンファ様。フイアース様をお連れ致しました！」

兵士が敬礼をする様が異様だ。だが、その顔には柔らかな表情が浮かんでいる。それに答えるように、コンファも笑顔を返す。

「ごくろう様でした！ありがとうございます。」

もう一度敬礼し、兵士が去っていくと、コンファは回廊の扉を開いてフイフイを招き入れた。

「さあ！ フイアース様、どうぞお入り下さい…」

「あ、ああ… ありがとうございます、コンファ。」

「あ、わたしのことはどうぞ、コンとよんで下さい…」

純粹な笑顔が愛らしい。答えてフイフイも笑った。

「じゃあ俺の事はフイーって呼んでいいぞ。それに、同じ助手同士なんだし、コンのが先輩なんだからさ。敬語なんて使う必要ないって。」

「せんぱいなんて… わたしはほんのこどもなんです…」

「歳は俺が上。助手歴はコンが上。ほら、同等だろ？」

そう言つと、コンファは嬉しさいっぱいの顔を上げた。

「……！ じゃあ、ともだちになつてくれますか？」

“友達”といつ言葉に面食らつフイフイだったが、すぐに頷いた。

「そりやもう、喜んで…」

「……ありがとう…！」

喜んではしゃぐ姿がまた、愛らしい。

（癒されるなー）

そんなコンファに手を引かれるのが、また癒されるのだった。

さて、そんなコンファの主が氷の女神（…）の一件からは俄然悪魔のように思うが（）なのだという事を、本人に会うまではつかの間忘れてしまっていた事が悔やまれる。すっかり油断していく、ついつい話に適当に相槌を打ってしまったのだから。

「いらっしゃいファース。無事にアシュリーの護衛になれて良かつたわ。」

穏やかな笑みに迎えられ、ファイフイは促されるまま椅子に腰かけた。

「お陰様で。ありがとうございます。でもあれ」

「殿下の体勢を崩す機会なんてそうそう出来ないのよ…とても良かつたわ。」

「それって俺の事を喜んでくれてるんじゃなくて殿下の」「そうそう、アシュリーにはきつーいお仕置きになつただろうから、今後は貴女の事を認めざるを得なくなるわね。無理矢理追い出そうなんて考えないでしようから、安心なさい。」

「…………ありがとうございます。」

ニールの笑顔と口調に完全に主導権を握られ、ファイフイは口を出すのを諦めた。ニールの隣でコンファがにこにこと笑つて話を聞いているのも、脱力を誇つ原因だ。

「それでね」

ニールが楽しそうに話を進める。なんだか無邪気に楽しんでいるように思えて、ついつい気が緩む。

何と言つても、まだ出合つて一週間も経っていないのだ。

「アシュリーの事だから、貴女に城内の事や仕事について、積極的に教育や指導をするとは思わないのよね。どう？」

これには素直に頷いた。

「はい。今日はオルクス様、リティオス様、それと、ルキセオード様に紹介して下さったんですけど、名前だけ言つてもうつて。助手は必要ないから要らないとか言つてますし。必要ないと思われてるなら教えようとか思わないでしょうね。」

ニルは気持ちよく相槌を打つ。

「ええ、そうでしょうね。どうせふてくされているんでしょうね。殿下やオルクス様にからかわれてるでしょうねから。けど、何も分からんじや、満足に助手も出来ないわね？」

何かひつかかりつつも、本当の事なので頷く。

「まあ、書類なんて分かりませんし、お出かけなら付いていくしかないですか……？」

「それじゃあ困るわよねえ。クライスト王国の大魔術師、その助手ともあろう者が、その恰好、その言動では、ね？」

ちょっとと腹の立つ言い方だが、まあ、そういう見られ方には慣れてい。だが確かに、フイフイがこれでは“どこにでもついていく”助手兼護衛という立場からは困るかも知れない。そう思い、フイフイは頷いた。

「はあ……どういう事があるのか分かりませんし。」

「もちろん大魔術師ともなれば、様々な式典にも出席しなければいけないし、そういう時は、例え隣にいる事が出来なくとも、側に控えていなければいけないわ。そう、衆田があるのだから、それ相応の身なりと言動を身につける必要があるわよね？」

ニルはウンファを見て微笑む。

「コンだつて正装をして場に出るものね？」

「はい！ニル様のおそばにいるのが、わたしのじいじですから！」
歓喜のオーラいっぱいのコンファを見て、思わず微笑む。すると
それを狙つたかのように、ニルはフイフイに微笑んだのだった。
「だから貴女も、大魔術師の助手に相応しいものを身につけなくて
は、ね？」

コンファの笑顔につられて頷く。

「……そうですね。それなりには努力しないと……」

ニルの笑みが変わつた。それに気付いた時には、もう、遅い。

「では、今日から始めましょう。貴女の教育に当たる人を紹介する
わ。」

和やかな会話に流されていた自分に気付く。ニルの勝ち誇つたよ
うな笑みに、一気に冷や汗が噴き出した。

「どうぞこちらにいらして。」

「え？」

ニル達がいる部屋の奥の扉が開くと、そこには、一目で上流階級
の育ちだと分かるような、上品で可憐で、凛とした雰囲気の女性が
立つていた。

「こちらは今日、今から、貴女の教育指導にあたる、ハンスファル
ク家の御息女で、クルステイユ嬢です。クルス嬢、この方がアシ
ユリーの助手兼護衛の、ファニアス・ルセです。」

紹介された女性は、きりりとした目でフイフイを見ると、優雅な
礼をしてみせた。

「クルステイユ＝ハンスファルクと申します。僭越ながらファイア

ニス様の教育指導をさせて頂く事になりました。ぜひ、よろしくお願い致します。」

突然の事態に対応出来ないフィフィ。しかしニールは、容赦なく言つた。

「名乗りを返すのが礼儀というものよ?」

「え? あ、でも…」

「ねえ?」

「……………フィニアース=ルセです……………よ、よろしくお願ひします」

「さ、ではさつそく始めましょうか。クルス嬢、頼みますね。」

「はい、ハディエス様。私にお任せ下さいませ。」

「は?え?」

ニールは戸惑うフィフィを無理矢理部屋から押し出し、クルスはフィフィの戸惑いに構わず、参りましょうとだけ言ってフィフィの前を歩き出す。フィフィはかるうづじてついて行くものの、事態を整理するのには数分かかった。

「随分急に決まつたんですねえ?」

フィフィはニールの顔を思い浮かべながら聞く。急ではないに違いないと確信しつつ、いやそこまで強引じゃないだろうと信じたい。

が、クルスはいたつて冷静沈着に答えた。

「いえ、フィニアース様がこちらへいらしてすぐに、ハディエス様からお話をありましたよ。」

「……………やっぱそうなんですね…」

(あの人は小悪魔だな…いや、本性が。)

「フィニアース様には」

「は?」

何故か若干語気が荒いクルスの台詞に、フィフィは小首を傾げた。

クルスはきつ、とこちらを見据えて（睨んで？）言つ。

「まず、言葉遣いを中心に学んで頂きます。歴史や情勢などは、後々やりましょ。」

「…………」

（なんか…初対面にも関わらず敵意を感じるな…）

フィフィは黙つて彼女の後について行く。こいつ理由の分からぬ怒りはつつかない方がいいのだ。

そうやって大人しくついて行つたのだが、アシュリーの回廊まで来ると、クルスはびたりと足を止め、フィフィに道を譲つた。

「ん？」

わけが分からず首を捻ると、若干苛立った様子で言われた。「フィニアース様が先にお入りになつて下さいませんと、私が侵入しましたと思われてしまいます。」

「そんな大袈裟な…俺が後ろにいるんだし。」

「な…まさか、本気で仰られているのですか？それとも、私がそんなにお嫌いですか？」

「え？」

（嫌つてんのはあんただろーに。）

ますますわけが分からぬ。さらに首を捻るフィフィに、クルスは何かを耐えるように一度目を伏せ、フィフィに言つた。

「…どうかお先にお入り下さいませんか？大魔術師の回廊に印だけで入るような権利は、私にはないのです。」

（印……？）

そう言われてフィフィは思い出した。ここへ初めて足を踏み入れる時、あの兵士は“書類を持っているから大丈夫だ”と言つた。そして、“だから危険はない”と。（そつか……なるほどな。）

「すいません。…けど、俺が先に入ればクルス嬢も入れるもんなんですか？」

え、とクルスの目が言つている。無知をこれ程驚かれる事に、フイフィは驚いていた。

「……フィニアース様には、まず回廊についての」説明が必要ですわね。」

「頼みます。なんせアシュリー様はかなりの面倒臭がり屋で、何も教える気がないもんですから。」

そう言つた途端、クルスはフィフィを睨みつけた。

「御自分の主をそのように言つものではありませんー貴方は、礼儀といふものを知らないのですか？」

「…………」

本氣で怒つている。フィフィは驚いて声も出ない。

「良いですか、フィニアース様。主を侮辱するような発言は、断じてはいけない事なのです。それに、貴方はギルドで働いていたようですがれど、そこでの常識は通用しないものと思つて下さい。ここはクライスト城。陛下の御元なのですよ！」

「…………はい…」

クルスは、フィフィを快く思つていない。それはフィフィの身元に關係していたのだ。

彼女はギルドの者を良く思つていない。本来ならば関わりたくないのだ。それがニルに頼まれ、受けるしかない悔しさと、フィフィの、忠誠心のかけらもない態度をプライドが許さないのだろう。（この人は、自分に誇りを持つてる。）

地位の高さや育ちの良さにではない。自分の身分と、その意味に。

「…すいません。クルス嬢。まず回廊について詳しく教えて貰えま

すか？」

そう言つと、クルスは憤りを抑える為に一呼吸おいてから、説明をしてくれた。

「……この回廊は、ウイルレイユ様ご本人が定めた方だけを受け入れます。王族の方はもちろん、同じく大魔術師であるハディエス様も受け入れられます。定めた方以外が、万一この回廊に入ろうとすれば、すぐに魔術が働きます。」

一旦言葉を切り、クルスは少し恐ろし気に回廊を見やつた。

「例外として、一時期のみこの回廊の出入りをされる方は、陛下を通じてウイルレイユ様に許可を伝えられ、印を渡されます。そして、その印を持っていなければ、回廊に入る事は出来ません。」

「助手は入れるつて事ですね？」

「もちろんです。常に大魔術師様のお側にいなければならぬのですから。」

「で、そういう人と一緒なら、誰でも入れるつて事ですか？」

クルスは少し考えながら言つた。

「……いいえ。誰でもというわけではありません。印を持つ者で、尚かつウイルレイユ様かファニアース様…その助手の方が一緒にあれば入る事が出来るのです。」

「結構厳重なんですね…」

「大魔術師は国の要。クライストの盾であり剣なのです。故にそれだけ、日々に危険が伴うのです。」

「」でフィフィは首を傾げた。

「…そんな大事な国の柱なのに、俺なんかが助手だからっていつも簡単に側にいれていいいんでしょうか？」

そう質問すると、クルス嬢は驚いたようにしばしフィフィを見つめ、若干微笑んだように見えた。

「…そうですね…それだけ御自分の立場に責任を感じて頂けるのは良い事ですね。…………もちろん、フィアニス様を信頼なさって、陛下も助手とお認めになつたのでしょうけれど、まだまだ心から信頼するには当たらないとお考えかと私は思います。」

「なら、俺がさつさと出入り出来ちゃつていいんでしょうか?なんか緩い気がするんですが…」

そう言つと、クルス嬢は深く頷きながら答えた。

「ええ、『安心下さい。大魔術師様には使い魔がいますから。』

「使い魔?」

言いながら思い当たり、ああ、と頷く。

「ウイスペルの事か!」

期待を込めてクルス嬢を見ると、若干困ったよつて眉根を寄せた。

「……?わたくしなどではウィルレイコ様の使い魔を拝見出来る機会はありませんから、ウィルレイコ様の使い魔がどのようなものなのかは、分かりませんわ。」

「あ、そうなのか…」

フィフィはアシュリーと会つ前に、まずウイスペルに会つてい

る。それに、ウイスペルはよく耳飾りから出でてはフイフイの周りをうるちょろしている。だから滅多に見れない存在だとは思いもしなかつた。

「ともかくも、例えばファニアース様が、万一一ウイルレイユ様に危害を加えようとした事があつても、使い魔がそれを防ぎます。」

「へえ……」

言われてフイフイは思い出した。出会った時、ウイスペルにはひどい目に会わされたのだ。思わず苦い顔でもしていたのだろう。クルス嬢は首を傾げて訊いてきた。

「……まさか、そのような経験がおありですか？」

「あ、いや……俺がこの城に来て初めてアシュリー様の回廊に入つた時ですね。その使い魔が威嚇してきたんですよ。こつちはアシュリー様探してただけなんですけどね……」

まあ、とクルス嬢は心底驚いたようだ。

「不思議な事もあるものですわね……。もちろん書状か何かお持ちだつたのでしょうか？それなのにそんな事が起るなんて……」

「アシュリー様が言うには、『城はない気配』だったからじやないかって言つてましたけど。」

「城はない気配……？ギルド特有の気配でもあるのでしょうか……？」

「俺にはさっぱり分かりませんけどね。」

おどけて見せると、クルス嬢はくすりと笑んだ。その様はとても愛らしく、先程からのあまり表情の浮かばない様子とはまったく違つた。思わず息を呑む程だ。

（……いつもああやつて笑うのか？…同性でも可愛いと思つよなー…）

「さあ、立ち話はこれくらいに致しましょ~フイアース様、お先にお入り下さい。」

「あ、はい。」

どうやらクルス嬢のフイフイに対する心構えは、若干柔らかくなつたようだ。

回廊に入り、アシュリーを探して奥の部屋へ向かう。石の壁に扉が現れたのを見てもクルス嬢はさほど驚いた様子はなかつた。おそらく魔術を見るのはそう珍しい事ではないのだろう。灯りの灯つた階段を降りていき、突き当たりの扉を開ける。

と、アシュリーの側をうろついていたウイスペルが、一瞬で耳飾りの中へ戻つていつた。ちらりとクルス嬢を伺つが、彼女は気付かなかつたようだ。机に向かい、本に没頭している主に、フイフイは声をかける。扉からだと机にいるアシュリーは背を向ける形となる。

「アシュリー様」

「何？」

見向きもしない。取り合はず用件を言つ。簡潔に。

「俺に先生が付きました。」

「は？」

耳慣れない言葉に、アシュリーは思いつきり迷惑そうな顔をして

振り返つた。

「クルステイーユ嬢です。今日から俺に色々教えて下さるやうです。」

「クルステイユ＝ハンスファルクと申します。以後、お見知り
「ちょっと待つて。なんですか？」

クルス嬢が丁寧に挨拶する中、アシュリーはクルス嬢の方を全く見ようともせずにそう問いかける。その様を覚悟していたとはいえ、クルス嬢はひどく悲しかった。だが、ファイファイはそれに気付けなかつた。

「ニルヴァーナ様からそう言われましたので。」

「…まさかその話だつたの！？」

その慌てようには、思わず思わずにならうになる。

「ええ、そのお話でした。アシュリー様のお側にいるからには、色々勉強しないといけませんから。」

「なつ…また、ニルのやつ…！」

「まさかアシュリー様が俺に礼儀作法など教えてくれるんですか？」

「なんで俺が？別に知る必要もないだろ？」

「必要だ重要なとニルヴァーナ様は仰つてましたよ？」

「ニルはそういうのが大好きなんだよ。礼儀作法とか行儀作法とか。ああいうの。」

「まあ俺も、お城にお世話になるわけですし、せめて最低限の作法は身に付けておいた方がいいのかなーと思いまして。そういうわけで教えて頂きますから。」

「ちょっと…」

言いかけ、アシュリーは少し考えて言つた。

「…一応訊くけど、どれくらいかかる？」

「さあ、どれくらいでしよう…？」

振り返つてクルス嬢に訊く。彼女は軽く頭を下げたままで答えた。

「…ファイアニス様にもよりますが、およそ三ヶ月、とハディエス様より仰せつかつております。」

「その間君の仕事はどうするつもり？」

答えたクルス嬢ではなく、あくまでファイファイに問いかける。

「あー…どうなんですかね。」

「またも振り返つて訊く。クルス嬢は若干困ったように答えた。
「詳しく述べつておりますが… 一日、数時間頂ければ幸いでござります。」

「言つとくけど、俺は君をいちいち呼んだりしない。いい?」
「じゃあ誰か呼びに寄越して下さい。」

「だから、そういう事はいちいちしな…?」

突然、可愛らしい音が聞こえた。まるで鈴を一振りしたかのよう
な。クルス嬢も思わず目で探しているが、おやらくウイスペルだ
う。その証拠にアシユリーは半眼で耳飾りの方を睨んで黙つて
いる。

「…………?」

ウイスペルと耳に聞こえない会話でもしているのだろうか。しば
らく黙つていたアシユリーは、何か嫌な事でもあったのか、顔をし
かめた。片手は腰、片手は顎に添え、何やら考えているようだ。

「あのー…?」

問いかけるファイファイに答えもせず、アシユリーはついには目を閉
じて考えている。

(ウイスペル：か？……どうしたんだろう。)

黙つて見守つていると、今度は目を開けてファイファイを見つめ出
した。

「え…なんですか？」

聞こえているのかいないのか。アシユリーは黙つてしまふ
ファイを眺めた後、しぶしぶといった様子で首を振り、深く溜め息を
ついた。そして、おもむろに耳飾りを外した。

「?」

ファイファイとクルス嬢が見つめる中、ウイスペル入りの耳飾りを、
アシユリーはファイファイに突き出した。

「これを身につける。」

(うわっ…めっちゃ嫌そつ! しかも命令口調…)

口の端が動きそうになるが、必死に押しとどめる。

「…なぜですか?」

「……いいから。」

(説明するの面倒臭いししたくないって、顔に出てますよー。)

思いながらもフィフィは取り合えず受け取った。

「……これ、どうやって付けるんですか?」

そう言つたフィフィを面倒臭そうに見やり、アシュリーはここで初めてクルスの方を見た。見たと言つても、ちらりと視線を送つただけ。クルスは即座に一礼し、部屋を出て行く。

「え、クルス嬢?」

「こっち向いて。」

アシュリーの命令に、多少腹立ちつつも向き直る。フィフィが何

か言つより先に、アシュリーはフィフィの手を掴み、動かす。

「ひひひやって抑えてて。」

「……」

耳飾りの石を下から持ち、耳朶に金属が当たるよつとさせん。支えたフィフィの手を支えつつ、アシュリーはもう片方の手で動かなによつにフィフィの頬を支えた。そして、目を閉じて囁く。

「??汝は我に住まう動かぬ時。我の吐息に道を繋ぎ、再び自由を
与えるまで離れる事を禁ず??」

言い終えると、耳飾りの付け根に口を寄せ、封印の魔力を吐息に込める。吐息はわずかあれば充分で、アシュリーは確かに封印されたのを確認した。

アシュリーが呪文を唱え、封印を行つた直後。フィフィはアシュ

リーを思い切り突き飛ばした。本当は殴り倒したかつたが、さすがにそれはまずいと思つて止めた。すぐに殴れば良かつたと考え直したが。

「何するんだよ！」

怒るアシュリーに怒鳴り返す。

「あんたこそ何してんだ!! 気色悪いだろーが!!」

は？

アシュリーが本気で分からぬいようなので、フイフイは教えてやつた。

「耳に息吹きかけられて氣色悪いいつつてんだよ！」

一瞬の沈黙の後、事態を理解したアシエは、

結果そ、うなつてんだよ!

「封印しただけだろ？」

「他にやり方なかつたのか！」

「ない！！」

せつぱりと言ひ放つアシュー

その様子を見て危険を感じたのか、アシュリーは一步下がった。

「何、殴る気?」

「俺が言うのもなんだけどな」

フィフィは本当になんだけど、と思つた。

何？

……ちよつとほんまを持てよ——

は？

田を丸くするアシユローを一瞥し、フイフイは足音も荒く部屋を出た。

クルス視点です。

アシュリー＝ウィルレイユ。

その名はすでに城へ上がつていた、十五の美しい大魔術師よりも有名になつた。彼が城へ上がつたのはわずか十の時。幼い少年を、国王陛下自ら隊を組んで迎えに行つたという。

クルスの祖母は、その様子を遠巻きに見たと話してくれた。

小さな家の前に皆が跪き、陛下が中から少年を連れて出てきた。少年は驚いた様子で隊を見ていたが、怖がる様子も、興奮する様子もなかつたという。陛下が何事か囁かれると、少し面倒くさそうに顔をしかめ、それを見て陛下は笑つていたらしい。隊は歓声を上げて小さな大魔術師を祝福した。

当時、アシュリー＝ウィルレイユという名は知られていなかつた。というか、誰も知らなかつたのだ。クルス達貴族でさえ聞いた事がなかつた。それくらい、無名だつたのだ。

だが、陛下自ら迎えに行つたことで、その名は大きく知れ渡つた。それならば、とどれだけ聞いて回つても、やはりアシュリー＝ウィルレイユを知る者には出会えなかつた。城の中でも不審がられていたと聞いている。それが神秘的だと貴族達は喜んでいた。滅多に人前に出ない事も、神秘性を高めていた。

そんな彼を、ヴィルジウス殿下がとても気に入つてゐる、という噂が流れた。どこへ行くにも連れいくのだとか。

殿下と行動するようになつてから、アシュリー＝ウィルレイユは

人間味が増した、と祖母は話していた。気難しく、何事にも興味が薄い。しかし殿下にだけは信頼を寄せている、と関係者は日々に言つた。

そんな彼を直に見たのは、殿下の二十歳の祝いの席だった。

殿下の側に控え、他の者のように浮かれた様子もなく、ただ静かに側にいた。あまり見た事のない、明るい灰色の髪。深い群青色の瞳。精靈か何かかと思った。ニル・ヴァーナ・ハーディエスを見た時も思つたが、こちらはまた違う性質の神秘さがあつた。何か、とても惹かれた。

その日から、クルスは他の貴族の娘達と遊ばなくなつた。お茶会も社交辞令。美容も最低限。他は全て勉強に費やした。別に、アシユリーの部下になりたいとは思つていない。ただ、同じところで働きたいと思っていた。の人と同じ場所で、生きていけたらと思った。だから、官になるうと思つていたのだ。

そうやつて勉学に勤しんでいたクルスに、ニルから声がかけられた。あのアシユリーに助手が出来、その人に色々な作法を教えろというのだ。これは、クルスにとつてとても嬉しい申し出だった。と同時に、何か物悲しかつた。嫉妬かも知れなかつた。けれど、あの人の役に少しでも立つならと思つて引き受けたのだ。

その助手はひどかつた。ニルから聞いてはいたのだが、男か女か分からぬような出で立ち、態度、言葉遣い。おまけに主人であるアシユリーにぞんざいな振る舞いをする。

始めは我慢していたのだが、すぐに堪忍袋の緒が切れた。元来、氣の長い方ではない。

怒ると、助手は一瞬きょとんとした後、意外にも素直に謝り、態度を改めた。そつぱいつても、とても礼儀にかなうものではなかつたけれど。

「人にその氣があるのなら、アシュリーの為に自分が教育しようと思えた。その後間近で見たアシュリーはとても冷たく思えたが、助手とのやりとりを聞いていると、案外子供みたいな人かも知れないと思つた。その直後、大声で怒鳴り合つ声が聞こえたけれど。

「これは後できつちりとお灸を据えてやらねばならない。

「一聞いていらっしゃいます? フィニアース様?」「んー…はつ。え、ええと、どこのでしたっけ?」

クルスは毎度の事だと思いながら睨みつけた。フィフィは肩を小さくしてお説教に備えている。

「わたくしは今、言葉遣いをお教えしたばかりですわね?」「あ……すみません、どこのまでやつたでしょ?」

フィフィは反省している。
が、何度も同じ事があつただろうか。クルスはにこっと笑みを貼付けて言つた。

「朝は苦手なようですね。」

そう言われて、フィフィはほつとしたよつこ首を縦に振つた。

「はい、苦手です。といつか頭使うの苦手なんですね。」「では時間帯を変えて頂きましょ?」

「え、いいんですか?」

期待している。こうした無邪気な様子を見ると、わずかに女性に見える。

「ええ、明日からは昼食の時にいたしましょう。ウイルレイコ様にそう伺つて頂けますか？」

「昼があ、いいですね！」

「こちらで昼食を取つて良ければ、こちらに連れて頂くようにもおせん元氣に伺いして下さいね」

優しく念を押すと、快く頷いた。それを見て苦笑してしまう。

やはり、これは嫉妬だと思つ。

だから、フィフィが気を抜いているといつて意地悪したくなつてしまふのだ。

（けれど、こちらが眞面目になつていてますのに、この方が居眠りなどしているのですもの。これくらいは覚悟して頂かなくては？）

フィフィには、もう少し眞面目に取り組めるようこじてあげるつもりだ。クルスはそう決めて、楽しそうに微笑んだ。

（？わたくしの気が晴れませんわ。）

つまづきしてくるフィフィを眺め、クルスはぐぐっと首をもたげそうになつた苛立ちを押さえつけた。

「つつかれた……」

フィフィはお腹を抱えて歩いていた。時刻は昼過ぎ。普通なら昼食をとつて倦怠感ある時間帯だが、フィフィのお腹は呻いていた。つまり、ろくに食べれていない。

「鬼だ……あの人は鬼だ……」

元々、フィフィの勉強時間は朝だった。朝起きてまず、クルスに教えを乞う。だが、フィフィがあまりに集中出来ないため、昼に時間変更された。昼食をとりながらやりましょう、というので楽しそうだとわくわくしていたのだーーが。

『言葉使いを間違えられた時点で、昼食は没収いたしますから、充分注意なさって下さいね。』

につ、こり笑つてそう言い渡された。それが始まってまだ五日。いつも夕食までお腹を空かせるようになってしまった。言葉遣いは、慣れない。

「くそ……どつかなんか食べるもんないかな……」

「フィー？」

幼い声が聞こえて振り返ると、驚いた様子で走つてくるコンファがいた。

「よお、コン。一人か？」

「はい！今お昼をいただいて、きゅうけいもいただいているところ

です。」

「匂… せつか…」

「ひりやましー。」

「どうしたんですか？眞似でもわるいんですか？」

心底心配してくれるコンファに感動しつつ、ファイは「うう」とばかりに詰め寄った。

「なあ、どうか食べ物分けてくれるやつなどい、ないか？」

「えつ……食べるものですか？」

きょとんとしている。ファイは「うう」と頷いた。

「腹減つて……」

「アス様はお昼をくださらないんですか……？」

そんなのひどい、とばかりに心配してくれる。ファイは首を振つた。

「そうじやないナビ…まあ、ちゅうと事情があつてな。なあ、知らないか？」

「そうですね……あ、たんれんじゅうのじゅうびうなら、あるかもしれません！」

「鍛錬場の食堂…ね。サンキュー。」

手を振つて別れる。コンファはまだ心配そうにこちらを見ていてくれた。安心させるよううつむかへ一度手を振つて、ファイは鍛錬場に向かう。

(飯……とかく、飯！…)

もう、表情が怖い。通りかかった官が避けている。そんな状態のフイフイに、果敢にも声をかけるものがいた。

「フニアース様？」

聞き慣れない、穏やかな声。フイフイは空腹による機嫌の悪さを忘れて声の主を探す。すると、濃い緑の瞳の、凜々しい青年が側へ歩いてきた。その青年の名を思い出し、誰かを思い出してフイフイは首を傾げた。

「ルキセオード様？」

呼ばれて微笑むと、通りかかった女官や侍女達が惱殺されているのを見た。本人は全く気付かないのか、興味がないのか、至って平然とフイフイに話しかける。

「どうされましたか？怖いお顔をされますよ。」

そう言つて笑うが、気遣つてくれているのが分かる。フイフイは事情を説明した。

「昼食があんまり食べれなくて…鍛錬場の食堂ならまだ食べれるんじゃないかって聞いたので、そこに行こうかと。」

「…昼食ですか…」

これはまたアシュリーが疑われているな、と思つたが、ルキセオードはにこやかに案内を申し出た。

「では御一緒致しましょう。私も鍛錬場へ行くところでしたので。」「あー…助かります。」

並んで歩き出す。フイフイはふと思いついて訊いてみた。

「ルキセオード様は、従騎なんですね？」

「ええ。…私にそのようなお言葉遣いをして頂かなくても、結構ですよ。」

「え？でも…」

戸惑うフイフイに、ルキセオードは穏やかに笑う。

「立場的には、似た様なものですね。」

「……」

フイフイはまじまじとルキセオードを見つめてしまつた。従騎と、大魔術師の助手は同じくらいの位置にある、と初めて知つた。

「どうされました？」

長く見つめるフイフイに驚いた様子で、ルキセオードは若干緊張した様子で訊く。すると、フイフイは真剣な顔で答えた。

「…実は、俺は今言葉遣いを習つてるんですよ。それで俺の先生が、言葉遣いを間違えたら昼食を没収するんです。」

「…それは…手厳しい方ですね…………それで空腹なのですか。」

「…そうなんです。で、今までして言葉遣いを直せと言われてるのと、ルキセオード様にどんな言葉遣いをしようか悩んでます。」

「……」

今度は、ルキセオードがフイフイを見つめる番だった。そして、笑い出した。

「すみません。…ああ、でも、改まつた物言いをされますと……隔たりを感じます。特にフイアニス様は外から参られた。ですから無理さなる必要はないと思いますよ。」

言われて、フイフイはほつとした。そう。本当に性に合わない話

し方なのだ。

「良かつた！慣れないんですよ、ほんと。口が回らなくなつてくる

…」

「どうか楽にお話下さい。ありのままで結構ですから。」

「ありのまま…ですか…」

少し考え、フイフイはルキセオードに訊いた。

「俺とルキセオード様つてどれくらい差があるんですか？」

「フィニアース様。コンファにされていたような話し方で結構ですよ。

「…………」

聞いていたのか。

「じゃあ聞くけど、どっちが偉い？」

くすくすと笑いながら、ルキセオードは答える。

「どうらが…そりですね…本当に同じくらいの地位なのですよ。」

「…………」

いや、とフイフイは笑つた。

「じゃ、ルキセオード様も話し方変えて下さい。でないと隔たりを感じます。」

「…………」

虚をつかれたらしく、ルキセオードは一瞬固まつた。

「…なかなか手強い。では、俺のことはルキ、と呼んで下さい。」

「…」

「ルキ様？」

「隔たりが。」

「ルキ。」

「はい。」

「その話し方はクセ?」

「ですね。いくら氣をつけても」「いつなつてしまつたので。」

「ふーん…」

「そちうひびき呼んだら?」

先程とは少し違つ、何か悪戯を楽しむかのような笑みに驚きつつ、
フイフイは答える。

「好きに呼べばいいけど。」

「好きに…ですか。」

少し考え、ルキセオードは頷いて言つた。

「では、フイースと呼びます。」

「フイース?」

「ええ。」

フイフイは記憶をまさぐる。

「…あんま呼ばれたことないな。」

「そうですか?」

それもそうか。とフイフイは考える。元々名前はフイフイ、なの
だから、どう考えたつて“ス”は入らないのだ。

「新鮮だな…」

「気に入つてもらえたようですね。」

そう言つたルキセオードは楽しそうだ。フイフイは笑い返した。

鍛錬場へ着くと、ルキセオードはフイフイを食堂へ案内した。通りかかる兵士達は皆ルキセオードに敬礼し、不思議そうにフイフイを見ていた。

食堂へ入ると、皆一斉に立ち上がり、大きな声でルキセオードに挨拶する。ルキセオードが軽く返し、樂にしろ、と言つと途端にもの騒がしさが戻つた。

騒がしいと云つても、すでにほとんどの者は昼食を終えているらしく、人はまばらだつた。それでも元氣が溢れているから、昼食時はもつと騒がしいのだろう。

「さ、フイース。好きなものを選んで下せい。」

ルキセオードが並んだ料理を示して言つ。選ぶ前に、フイフイは首を傾げた。

「ルキはもう食べたんじゃないのか？俺に付き合つ必要なんかないぞ。」

そう言つと、ルキセオードは微笑んで答える。

「いえ、フイースの昼食に付き合つくらいの時間はあります。それに、少し話してみたいと思つていましたから。」

「……ならいいけど。」

言しながらもう料理を選び出している。

一通り見て、大きな肉が二つ入っているものを選んだ。

「これ、なんの肉？」

給仕の若者に聞くと、元氣よく答えてくれた。

「牛ですよ！一番人気！」

「だよなあ。うまそーだもんな。」

それだけで満足そうに皿に盛り、ルキセオードと向かい合わせで

席に着き、もくもくと食べ始めた。その様子を見ていたルキセオードだが、ふとフィフィがしている耳飾りに目を留め、眺める。

「ん？」

「気付いたフィフィが訊ねると、ルキセオードは不思議そうに訊いてきた。

「あ……その耳飾りはアシュリー様のものでは？見た事があります。フィフィはもぐもぐと咀嚼してから答える。

「そうそう。この間……その先生が付く時に、無理矢理つけろって言われて……。多分ウイスペルがなんか言つたんじゃねーかな。

「……ウイスペルというと、アシュリー様の使い魔の？」

「……やっぱり知つてんだ？そう。俺には鈴の音にしか聞こえないけどな。鳴らなくても耳を傾けてるような時もあるから、やっぱなんか、魔術の一種で会話してんのかな。」

ルキセオードはますます不思議そうに、興味深そうに耳飾りを見つめる。

「俺も詳しくは知りませんが、その耳飾りの石は瑠璃石という宝石で、数ある瑠璃石の中でも妖精が宿る石だそうですよ。そういうものを、魔術師は“精石”と呼ぶようですが……」

そこまで言つて、ルキセオードはフィフィがきょとんとしているのに気付いた。

「？……どうしました？」

「……いや、ルキって自分の事、俺つて言つんだ？ほんとは。」

「ああ……そうですよ。私、こうのと半分クセですが……」

「ふうん……」

再びもぐもぐと食べ出したフィフィに、ルキセオードは訊ねた。

「アシュリー様は、何故ウイスペルを貴方に？」

「自分で呼びに行くのが面倒臭いからだよ、あの人は。ウイスペルが連絡役を買つてくれたんだよなー？」

呼びかけるように言つと、耳元でちりん、と鈴の音が答えた。その様子に、ルキセオードは感心した面持ちだ。

「…すつかり懷いていますね。」

「…そうなのか？なんか、始めからこんな感じだけどな。」

「…それは……なんとも珍しい……」

「あ、そーだ。俺も訊きたい事があるんだけどわ。」

「はい、なんですか？」

「エウエラって誰か知つてるか？」

フィフィはあの、ヴィルジウスとの対戦を思い出しながら訊いた。

「…エウエラ……。時の大魔女ですね。彼女の何を知りたいんですか？」

「俺さ、ニル様にこんなの描かれたんだけど、なんか凄い事になつてるらしくて。どいう事になつてるか分かるか？」

差し出されたフィフィの手をとり、ルキセオードはまじまじと見つめた。

「……エウエラの図形…」

「なんか、皆が言つからそれは分かつたんだけどさ。オルクス様は樹力が混ぜてあるつていうし…そもそもどんな意味があるのかと思つて。」

「…殿下の体勢を崩す事が出来たのは、これがあつたからなのですね…。」

ルキセオードは真剣な面持ちで図形を見つめていた。その真剣さに、フィフィは少し不安を感じる。

「……ルキ……？」

「……エウェラは、ヴォルテール王の時代からイルジス王の時代にかけて存在していた大魔女です。」

「え、それってつまり、いつ？」

慌てて問い合わせるフィフィに、ルキセオードはくすりと笑った。

「我らが王、ウルセデイ陛下の四代前に当たる王の時代に生きていました。」

「ん……それならなんとなく分かる……かな。」

難しそうに頷くフィフィに、ルキセオードはなるべく簡潔に話す。

「エウェラは他に類を見ない程の魔力の持ち主で、魔術の使い手でした。時を経るごとに外見も中身も衰えるのが人ですが、エウェラは身体的には何ひとつ衰えず、魔力、魔術に関してはますます強大になつていった。」

「……つまり、見た目はもう、どつかで止まつてた……？」

「そうです。そして……はつきりとした時期は分かりませんが、彼女は人でなくなつていた。」

「…………えっと……不老は人のうちにに入るのか？」

心底納得出来ない様子で言つフィフィに、ルキセオードは軽く笑つた。

「肉体があるので、一応は。エウェラは今や“大精靈”です。世界の氣脈に身を置き、契約によって人に力を貸す。普通、大精靈ともなれば簡単に接触は出来ないのですが、エウェラは元が人であつたからなのか、案外気楽に人と関わつているようですね。」

「気楽……」

呆れたように言つと、ルキセオードは再びフィフィの手にある図形に視線を落とした。

「……エウエラは特に、魔女に力を貸すのが好きなようですね。エウエラと契約出来るのは女性が多いようですから。……そして、貴方も興味がおありのようだ。」

「え、俺に？」

「エウエラは例え契約者の言葉であるつと、気に入らない相手にはわずかの力も貸さないようなので、まず、貴方に興味があると考えていいでしょう。」

「…………」

「不思議だ。仕事上、魔術師と関わる事はあっても、それはほとんどの場合、味方ではなかつた。魔術師のように魔術に携わり、精霊や妖精や神と力を共有したり、そういう存在を尊いと思つた事はないのに。何故、エウエラという大精霊はフィフィに力を貸すのだろう。フィフィはまじまじと図形を見つめた。

「樹力ってのは？」

「……対象のものを“成長”させる力だと聞いています。」

「成長？」

訊ねるフィフィに、ルキセオードは若干困ったように首を傾げた。

「……これ以上は俺には……」

「ああ……武人だもんな。魔術の事は魔術師様に聞いた方がいいか？」

とは言つても、主であるアシュリーは面倒臭がつて説明してくれない事は確定だし、ニルもにこりと笑つてはぐらかしそうだ。

「ま、先生にでも聞いてみるか。」

「そうして下さい。」

苦笑しながらルキセオードがそう言つて、フィフィはそれを見て笑つた。

和やかな雰囲気のところへ、何やらばたばたと兵士達が駆け込んできた。見れば雨に降られてしまつたようだ。皆一様に外を見て怪訝そうな顔をしている。

「どうした？」

思わずルキセオードがそう訊ねると、兵士達は顔を見合させてから言った。

「それが……突然空が妖しくなつたと思つたら、急に大雨が降り出したんですよ。」

少し耳を澄ませば、外がかなりの雨に降られているのが分かる。

「…今日はそんなに天気悪かつたつけ？」

フィフィが首を傾げると、兵士が即答した。

「いえ、先程までは晴れていたんですよ。晴天、とまではいきませんでしたが。」

なおも不思議そうに兵士は続けた。

「それに、急に曇つたというよりは、急に雲が渦巻いたんですよ。」

「雲が渦巻いた？」

ルキセオードが若干の緊張をもつて言つと同時に、ちらん、とウイスペルが鳴いた。

「ん？」

なんとなく、アシュリーが呼んでいるような気がして、フィフィは席を立つ。

「…アシュリー様から呼ばれましたか？」

ルキセオードが思慮深い目を向けて聞いてくる。フイフイは若干驚きつつも、食堂の入り口へ向けて歩き出す。

「そうみたいだな。ルキ、今日はありがとな。」

「ええ、また時間があればお付き合い下さい。」

「ああー。」

笑顔で手を振つて食堂を出る。建物にそつと造つてある廊下は、外側の壁はなく、柱で天井が支えられている。その廊下は決して長くはなかつたが、そこを早足で歩いている間にも、風が急に強くなつていつているのを感じた。

「…………嵐か…………？」

眩いで扉まで走る。雨に濡れたり、強風に煽られるのはじめんだ。扉を開けると官達の足取りが忙しそうだつた。早く扉を閉めるよう促され、扉を閉めるとフイフイも急ぎ足でアシュリーの元へ向かつ。官達は歩き回り、時に廊下の端へ寄つて話し合い、何か緊張したような面持ちだつた。

（…………やつと言えばさつきルキもあんな顔してたな…………。天氣と関係あるのか？）

思いつつも、急ぐ足はだんだんと速度を上げて、いつの間にか走り出していた。

アシュリーは自室で書類を熱心に読んでいた。一晩数日で報告さ

れた出来事の中に、気になる事があったのだ。それに、陸下からも知つておくように言い渡されていた。

(陸下が知つておけと仰る時は、厄介事を調べると仰つてゐるのと一緒にだ。)

あの人はいつもああだ、とアシュリーは思った。大事な事を何も無い事のように言つて、アシュリーにそれを計るように促す。そうやってはつきりしない物言いがアシュリーは嫌いだつたが、あの人はわざにそうする。難しい事はさも簡単そうに言つ。しかし目は有弁で、態度や物言いより遙かに多くの事を語つて？？いや、押し付けてくる。

ふと、外の空気が急速に変わったのを感じた。外、とこゝのモ城の外だ。

(？あり得ない。)

アシュリーは外を探る。状況が分かれば分かる程、アシュリーは首を傾げた。

(これは…どうこう事だ？)

報告書にもう一度目を通す。そして、睨みつけた。

と同時に。

自室の扉が荒々しく開かれた。

一瞬、嵐で壊れたのかと思った。

「えーっと…お呼びでしょうか？」

扉を開け放つた乱暴さとは全く逆の、どこか能天気さを伴つ声で、
フィフィは言った。アシュリーは一瞬扉に視線を映したが、すぐに
声をかけた。

「遅い。」

「……」

青筋がたちそうになつたが、抑えた。

「これでも走つてきたんですけどね。何かあつたんですか？」

言い返しつつも、それ以上アシュリーの言葉が続かないように先に言葉を紡ぐ。企み通り、アシュリーは反撃するよりも後の言葉に意識を持つていかれた。

「これを見込んでおいて、嵐が収まつたら調査に行かないといけないと想ひや。」

言つだけ言つて書類を押し渡そうとして、押しとどめて、フィフィに触れるか触れないかの距離まで書類を顔に突きつけた。フィフィは押しのけるようにして書類を受け取ると、首を傾げて聞いた。「調査つて、どこかへ出かけるんですか？」

アシュリーはもつ田線を別の書類へ移していた。

「出かける時は付いてくるんじやなかつたの？」

さらりと皮肉を言われるも、出かける為にわざわざ呼ばれた事に驚いた。あれほど助手は要らない、邪魔だと言つていたのに、フィフィに仕事をさせようとしているのだ。

- 1 -

お礼の一ツも言おうと思ったが、気難しいアシュリーの事だ。そのやり取りだけで気が変わること、二つもありそうで、ぐつと我慢した。

（お礼もろくに言えないなんて、変な相手に仕える事になつたなあ）

「… これ、 読んでおけばいいんですか？」

「 あはは、アシニラニ世ノミハヤトヤの顔を見て言いた
 事は、俺の何? 」

：君は俺の何？

言われてフイフイは一瞬考えた。

「助手です。」

：その間は何：

ぼそりとアシュリーが突っ込むが、フイフイは聞こえないふりをした。

「助手なら、それらしくして。」

それだけ言つてまた視線を机の上に戻す。フイフイはしばらくアシュリーを眺めた後、一応、一礼をしてアシュリーの部屋を出た。部屋でゆっくり読む事にしたのだ。

？？激しい雨と風は三日三晩続いた。

その間アシュリーは一度も部屋を出た様子はなかつたし、誰も部屋へ入れなかつた。フィフィはする事がなかつたので、クルスの部屋へ招いてもらい、礼儀作法などを教わつていた。おかげでなかなか上達したようだ。

城内をうろついていても皆声を抑えて話していく、誰かが通りかかると去つていく。

フィフィは一人状況が分からず、皆が外を眺めては何か話している様子から、嵐が何か関係ありそうだとは思ったが、話してくれる人はいなかつた。少しの期待を持つて鍛錬場へ行つてみるものの、ルキセオードはいなかつたし、兵士達に聞いても状況は分からぬようだつた。

ならばと思つて書庫へ行つて天候関連の書を探して読んでみるも、二、三ページ読むだけで意識が逸れていつてしまつので諦めた。ただ、その書は魔術と天候に関わる書のようで、ちらつと見た限りでは、魔術によつて天候に影響を与える事が出来るのかも知れない、とは考えられた。

それでやつとアシュリーに貰つた（預かつた？）書類の存在を思い出して、慌てて部屋へ戻つて読んだ。

書類には、二二一年で起つたある出来事が報告されていた。海辺のある国のある場所からの変化。それはある現象によつて場所を移し、徐々にクリストに迫つていた。

（ん……？）

フイフイは思わず眉をひそめた。それから書類を読み直して、最初に変化があつた場所では、今も変化が拡大しているという事が分かった。その後に変化があつた場所でも、同様に変化が拡大しているようだ。それは決して急速ではなかつたが、誰も手出し出来ないようだつた。変化を運んでいるとある現象とは、“嵐”だつた。

(こんなに頻繁に…しかも定期的に起つるもんか? 嵐つて…)

大きな窓を見やると、豪雨で景色がひどく歪んでいる。大きな木が風で煽られているのがなんとなく分かつた。

(…これでもし、クリエイストでも他と同じ様な変化があつたら…)

自然な現象とはとても思えない。あまりに不自然な嵐だ。この世界に何かが起つっている? その証拠となるだらう現象だ。

フイフイはふと、自分が身を置いていた世界を思い出していた。こんな風と雨では、無事では済まないだらう。

(城は丈夫だよな…やつぱり。)

これだけの雨風にもびくともしない。雨漏りも無ければ風の衝撃も感じない。まるで、窓の向こうに別世界が広がっているように感じた。それは奇妙な感覚で、しかし、ほつと出来る事だつた。

(あたしは今、城で働いてるんだな…)

そう、何故か感慨深く感じた。

- 12 - (前書き)

読んで頂いて、こんな皆様、ありがとうございます！

理解しにくい、分からぬ、矛盾などあるかも知れません

その場合はお教え下さい。

三日三晩続いた突然の嵐は、ゆるやかに終わつていった。去つて行つた、といふよりは、その場で消えていった、といふのが正しいだろう。起こつた時と同じで、その場で現れ、その場で消えていった。人々は不思議そうに空を眺め、首を傾げた。

嵐が消えた朝、フイフイは暖かい日差しで目を覚ました。暴風雨ですっかり退屈していたフイフイは、その時間を喜んで睡眠に費やしたのだ。

まだ少し眠気が残る目をこすり、軽く頭を振つて眠氣を追いやる。そもそもベッドから出て、光に向かつて伸びをする。全身がほぐれると、すっかり晴れた景色を見るため、窓を開けてテラスへ出た。

「うわー…」

中庭のあちこちに大きな水溜りが出来ており、綺麗に咲いていた花々もめちゃくちゃになつっていた。大木には大きな傷がついている。補修や警護の為か、兵士達が走つて行くのが見えた。

「ひつやひでーな…」

言いつつ、フイフイは身を翻して部屋を出て行つた。主の元へ向かう為に。

回廊を出てすぐに兵士に呼び止められた。本当に出てすぐの所で呼び止められたので飛び上がった。兵士は何喰わぬ顔で用件を伝えているが、その背中が笑っているのをフイフイは感じた。ともあれ、アシュリーが出かけたという事だから、急いで向かわなければ。

嵐が明けたのは朝日が昇る前で、アシュリーはすぐに城を出た。あの変化が現れているという情報を得たからだ。場所は城下から少し離れた、海に面したところだ。大きくて立派な宿泊施設が建っている。サファイアという名のこの施設はあまりに有名で、城の関係者も利用する事がある。その経営者から、変化の知らせがあったのだ。

すぐにサファイアへ向かおうとして、思い出してウイスペルに呼びかけた。しかし肝心の助手が熟睡しているらしかったので、近くにいた兵に伝令を頼んで城を出た。

サファイアのある大きな町に着くと、従業員が待っていた。周りの住人達も皆、困った様子でアシュリーの動向を見守っている。それを感じ取つてはいるものの、アシュリーは案内の従業員以外に目を移す事はなかった。

「支配人のフォルクローベがウイルレイユ様をお待ちしております。
どうぞいらっしゃへ」

不安氣な従業員に軽く頷き、アシュリーはただ付いていく。そんなアシュリーを、あまたの視線が追いかけた。

噂に違わぬサファイアは美しい建物だつた。その造形もさる事ながら、目の前には白い砂浜にエメラルドブルーの海が広がり、プライベートビーチを囲う縁も見事なまでに計算されて配置され、サファイアの敷地全体、どこを眺めても美しかつた。

だがしかし、海へ続く砂浜には今、大量の花が咲き乱れていた。青から紫へ花弁の色が変わつていて、その花はかなり美しい。が、海へ近づけない程広がつていて、それが人工的に植え付けられたものではない事を物語つていた。加えて、よく見れば波が被るところにさえ花が咲き乱れており、これがこの花の異常さを感じさせた。

「嵐が止んだと思つたらこれです。」

気がつくとすぐ横に、銀色の髪の青年が立つていて、その目は深い碧色で、美しいこの海を連想させる。

「私が気付いた時はまだ埋め尽くされてはいなかつたんですよ。ウイルレイコ様をお待ちしている間に、こんなにも広がつてしまつた。」

ああ、では、と思つて青年を見ると、目が合つて微笑まれた。

「お初にお目にかかります。私がサファイアの支配人であり、ウイルレイコ様に知らせを送つた、フォルクローレ＝ルセと申します。」

そういうと丁寧に礼をする。まるで洗練された動きは、上流貴族

を思わせた。

「…………ルセ?」

「はい。どうぞ」覧になりますか?」この植物を。

ひつかかりが疑問にかわる前に質問を投げかけられ、アシュリーは目線を花に戻した。指で花弁をそつとなぞるようになると、花は逆らわず、ふわりと揺れた。

「…………害はない。」

「それは良い知らせです。お客様になにかあつては大変ですのです。」

「…………」

少し考え込むアシュリーを見て、フォルクローゼは口を開いた。

「……実はお待ちしている間に、少しでもなんとか出来ないかと、色々試してみたのですよ。」

「試した?」

怪訝な表情のアシュリーに気付かないのか、フォルクローゼは話しを続ける。

「ええ。まず、引っこ抜いてしまおうとやつてみたのですが、雑草よりも強固な根の持ち主のようで、誰がどれだけやろうとも抜けません。ならばと切つてしまおうと思つたのですが、茎が裂けることがあつても、纖維が切りきれないのですよ。これも、どんな道具を使おうが駄目でした。」

(どんな道具を使つたんだ…?)

思ったものの口に出せず、その合間にもフォルクローゼは話を続ける。

「最後の手段と思つて燃やそつとやつてみたのですが、海に守られているかのようで、どれだけ炎ろうとも焦げ跡すらつかないのです。我々では、どうすることも出来ず、ますますウイルレイユ様のお力に頼る他ないと思つて心待ちにしておりました。」

最後ににこりと笑つてさりげなくプレッシャーをかけた。そこに一瞬、ニルを見たような気がして、アシュリーにとつてフォルクローゼは要注意人物となつた。が、まだ恐るるに値しない。むしろ無茶無謀が目につく。

「…………ルセ。忠告しておぐ。」

「はい。」

「…命が惜しくば、自然の摂理から外れているものに触れるな。」

「…………肝に銘じます。」

忠告に返す目はとても真摯だった。その態度は、やはりどこか一般人らしからぬところがあるように感じる。

さておき、とアシュリーは植物の解析にかかつた。これが自然の摂理から外れた、あるべきでない植物だというのは分かる。だが、その異常さはどこからきているのか。それが分からなければ対処が難しい。

（この植物は……報告書によれば“嵐の度に”世界に広がっているものだな。浜辺……しかも海水の被るところに生え、見る間に増殖していく……。嵐 자체が月の満ち欠けに従つて起こっているから、“嵐は何かに起こされている”事になる……。

植物は“嵐に乗つて”広がっている……前回の嵐でこの植物が現れたのはレシテ……レシテからの距離が、嵐が影響を及ぼせる範囲と考

えていいな…。植物はどんな状態で運ばれるのか…。何を糧に生長しているのか…）

そこまで考えたところで、にわかに騒がしい事に気付いて顔を上げる。と、ファイファイがやつてくるのが見えた。一度兵士に止められるが、顔見知りだったのか、お互い笑つて言葉を交わしている。

（…………この短い間に、もう顔見知りがいるのか…）

若干驚きつつも、ファイファイが近付いてくるのを黙つて見ていた。しかし、ファイファイは思いがけない人物に止められた。

「フィー、こんなところで何を？私に用があるなら、悪いが今は取り込み中だから、サファニアで待つてくれないか？」

「はあ？」

（は？）

アシュリーも驚いた。ファイファイを止めたのはフォルクローゼだ。それも、親し気な態度で話しかけている。

「俺はアシュリー様に用があるから、フォンは気にしなくていいよ。」

「

（知り合い…………？）

アシュリーは小さく首を傾げる。それに気付いたフォルクローゼが、アシュリーに疑わしげに訊ねた。

「ウイルレイユ様。この娘とお知り合いなのですか？」

娘、という言葉に違和感を感じる。そう言えば近くにいた兵士も

驚きに目を見開いている。これは少し厄介か、と考えながらも自分にとつてはどうでもいい事だと思い直し、アシュリーは肯定した。

するとフォルクローゼは驚き、フイフィに向かって問い合わせ始めた。

「一体どうして、どうこうの経緯で？」

「いやあ、安定収入を田指してたら、たまたま城の仕事があつたんだよ。それで。」

「安定収入？ 一体どうしてそんな考えを？」

笑いながらそう聞いている態度を見ると、フイフィはこれまで長い間、ギルドの仕事を自ら選んでやってきたのだろう。その考え方が変わった事が、フォルクローゼには可笑しいらしい。

「まあ……なんとなく。悪人面ばかり追っかけるのにも疲れたつていうか……」

「へえ……？ それで、城では何を？ まさか侍女だなんて言わないだろうな？」

これも大いに笑って言う。フイフィは呆れた様子で言葉を返す。慣れているようだ。

「助手だよ。」

助手、という言葉に、フォルクローゼは笑いを引っ込めた。

「助手？」

真剣な表情で聞き返す。すると、今度はフイフィが可笑しそうに

笑つて言つた。

「そ。助手。正確には、助手兼護衛。」

「……それは、どなたの？」

聞かれたフィフィは、教え込まれた言葉遣いで答えた。

「こちらにいらっしゃるアシュリー様が、私の主人です。」

示されたアシュリーは、なんの感慨もない目でちらりとフィフィを見た。正直、フィフィがこんな言葉遣いをすると、違和感を感じる。フォルクローゼはフィフィとアシュリーを交互に見ると、悩まし気なアシュリーに訊ねた。

「本当のようですが、何故フィフィを選ばれたのか、お伺いしてもよろしいですか？」

聞かれたアシュリーは大して考えもせず、ただこう答えた。

「上の策略と陰謀。俺には必要ない。」

「ちょっと…」

げんなりするフィフィを横目に、アシュリーは淡々と言つた。

「それで、話がしたいなら離れて。邪魔だから。」

「……大変失礼致しました。我々に出来る事があればなんなりとお申し付け下さい。そこへ連絡係の者を置きますから、御用の際はあれにお伝え下さい。」

フォルクローゼが深々と礼をするのも最後まで見ず、返事すらし

ないでアシュリーは植物の解析に移った。その横に、フィフィも併む。顔を上げたファルクローゼはしばらくそんなフィフィを眺めていたが、一つ首を傾げてサファイアへ戻つていった。

解析には半日かかった。昼を過ぎる頃までアシュリーは植物の生えている端から端までを歩き回つていたが、納得した様子で中央へ戻つた。そしてフィフィは、初めてアシュリーの魔術を目にすることとなつたのだ。

「？？汝は我に住まう動かぬ時。我の吐息に道を繋ぎ、彼のもの的生命の時を固く封じ給え？？」

聞いた事のあるような呪文だが、耳飾りをつけられた時とは異なる言葉が続いている。アシュリーは続けて紡いだ。歌うつになめらかで、囁くように優しい声音だ。

「？？汝は我が僕。風に住まうもの。我が吐息に力を与え給え？？」

アシュリーが差し出した両手に誘われるよう、植物を囲うように風が吹き始めた。

「？？汝は我が僕。海に住まうもの。我が名、アシュリー＝ウイルレイユにおいて、誓約を果たす事を命ず？」

アシュリーが深く呼吸をする度に、風は高く大きくなり、植物は完全に風に覆われた。

「？？汝、誇り高き光。その御名において我と誓約を結ぶものの罪

を贈し給え？？

そう言い終えると、アシュリーは手を下ろした。風は先程より弱くなっているものの、相変わらず植物の周りだけに吹いていた。明らかに自然の風でない事は分かる。それを確認すると、アシュリーはぐるりと踵を返して歩き出した。

「え…」

慌ててフィフィも後を追う。

「終わりですか？」

「終わった。」

「あれ、どうなったんですか？」

フィフィに答えず、アシュリーは待機していた従業員に言った。

「あの植物には決して近寄りず、触れないように。あれが消えるには少し時間がかかる。」

「は、はい！」

そう返事が返ってくると、アシュリーは従業員を通り過ぎ、明らかに馬車へ向かっていく。

「え、待って下さい！」

フィフィが言つも、止まる筈がない。

「消えるのに時間がかかるって…どうこう事ですか？アシュリー様でも解決…」

いきなりアシュリーが振り返ったので、フィフィは思わず口を閉ざした。アシュリーはフィフィを睨みつつ、かなり面倒くさそうに言った。

「…………馬車で話すから、黙つて。」

「…………

フィフィは大人しく従つた。アシュリーから何かの説明がある、というのが珍しく、同時に説明しておかなければならぬ事態なのだろうと思ったからだ。それがどれ程重要な事態なのかは分からないが、とにかく国の大事に関わる事なのは確かだ。

サファイアのある浜辺を離れてしばらくは、アシュリーは書類に夢中になっていたので、フィフィは大人しく黙つていた。が、そんなに長い時間は我慢出来ず、結局はアシュリーの言葉を待たずに話しかけた。

「それでアシュリー様。一体どうなつたんですか？アシュリー様でも解決出来ないような事態なんですか？」

最後の言葉に弾かれたようにアシュリーは顔を上げ、フィフィを睨んだ。

「…………（なんですか）…………？」

「君は、俺の助手？」

「…………そうですよ。残念ながら。」

「なら、国民を不安に陥れる様な言葉を、安易に選んで使わないよ

うに。」

「…………」

フィフィはちょっと驚いた。アシュリーが普段嫌々仕事をしているという訳でないし、城下の人間を下賤の民などと言つているのを聞いていたわけでもない。しかし、人と関わりを持つのを面倒くさがる彼が、フィフィの軽率な言葉に怒るとは思わなかつたのだ。

そんなフィフィを、一瞬前とは打つて変わつて不思議そうに眺めた後、アシュリーはあの植物について話し始めた。

「あの植物は、一年程前から報告に上がつて、世界で起つてゐる変化と一緒にものだと思つ。最初にあれが現れたのは、エイシャントの孤島に近い、フェルウェイル王国で、今回クライストで発生したような唐突な嵐の後に発見されたらしい。

その三ヶ月後にはイイエル国で嵐の後にあの植物が発見され、その二ヶ月後にはピスティル・オス共和国で。その後一、三ヶ月おきにラナス国、ハーグヴェル帝国、レシテ国に嵐が起つて、その後に必ずあの植物が発見されている。」

「…………じゃあ、あれは嵐に乗つて広がつているんですか？」

「そう考えられる。それも、自然の摂理から外れた嵐だ。その嵐に乗つて広がつてゐるあの植物も、自然の摂理から外れてる。」

「えーと…自然の嵐ではないとする、魔術で嵐を起こしているつて事ですか？」

そう言つと、アシュリーは僅かに考え込むような仕草をした。

「…………魔力の溜まり場で稀にそういう事も起こるけど、定期的に月の満ち欠けに伴つて起こつてるとなると、人為的に起こされてると考えられる。あの植物も何かしら手を加えられている。」

フイフイもまた、少し考えてから言った。

「……誰かが定期的に嵐を起こしてこるって事ですよね？」

アシュリーが答える前に、フイフイは言葉を続ける。

「誰かが嵐を起こす。一ヶ所じゃなくてあちこちに。定期的に起こつて、距離も等間隔。……なら、嵐での植物を運んでいるって事ですか？それともあの植物はついで？」

「あの嵐は明らかに植物を運ぶ為に起こされてる。」

「なんでそういう言ひ切れるんですか？だつてさつき、害はないっておっしゃつてましたよね？」

不思議に思つてそう聞くと、アシュリーは若干面倒くさがつて説明してくれた。

「…………生き物に害はない。でも、精靈達には害がある。あの植物は力を糧にしてる。あんなのがずつといたら、この国から精靈が消え失せるだらうな。そうなれば魔術師は力を失つ。」

「…………誰かがそれを望んでいるつて事ですか……」

「……血を流さずに国の力を削ぐのが目的なら……けど、呑氣過ぎる。」

「…………？」

首を傾げるフィフィ、「アシュリーはそもそも面倒臭そうに説明する。

「……例えばクライストの精靈を喰い渴くすなら、あのペースだと五年はかかる。どこの国の力を削ぐ氣なのか分からぬけど、悠長すぎるだろ。」

「…………じゃあ……なんの為にこんな事……？」

「ああ。」

「一言。あまりこも短く、あつさつとした一言で、フィフィは思わず突っ込んだ。

「“ああ”つて…。国の一大事ですよね？」

するとアシュリーは淡々と答えた。

「…理由はどうでもいい。」

「は？」

國民を不安にさせると言つておいて、どうでもことと言つ放つ。若干憤るフィフィを前に、アシュリーは「へ普通に答えた。

「…クライストを脅かすものは報復を受ける。必ず。」

それはフィフィが初めて聞く、『國の盾であり剣』と称される者の言葉だった。

その日の夕方には城へ戻つた一人だったが、アシュリーはすぐに国王に呼ばれていった。フィフィは取り合えず状況を整理し確かめる為に、クルスティーユかニールを探す事にした。

城を彷徨つていると（まだ城の構造がよく分かっていない為、回廊とクルスの私室と鍛錬場以外の場所では彷徨う形となる）、どうやらニールも国王に呼ばれたらしく分かつた。ならばクルスティーユを探すしかない。

ぼんやり覚えているような廊下を彷徨い彷徨い歩いていたら、いつの間にか周りに誰も歩いていない事に気付き、いつの間にか物音さえしない廊下にいる事に気付いた。

（なんで…）

なんとなく、廊下に灯されていてる灯りさえ、音を立てないようにしている気がする。

（これ…やばい所に入っちゃったんじゃねーよな…）

「いつ！？」

突然、右手を強く引っ張られた。驚くよりも焦りを感じたのは、それが、前方に引っ張られたからだ。もちろん、この廊下にフィフィ以外の人間はいない。それは見れば分かる事なのだ。

「うわっ」

なおも前に引っ張られている。誰もいない。誰も見えないのに、
フイフイは右手は掴まれ、引っ張られている。

「くつ……！」

言じよつの無い不気味さを感じて、足に全神経を集中させて踏ん
張る。すると若干右手を引っ張る力は弱くなつたものの、ぐいぐい
と前へ引きずられる。

「なんなんだよ……！」

左手で右手の周りをはたいても何も感触はない。そういうつしてい
る間に、周りの様子が変わつていて事に気付いた。

（どうだ！？）

円形の、高い壁に囲まれた部屋にいる事に気付いた時、唐突に右
手を引っ張る力は消えた。その反動でフイフイは床に尻餅をつく形
になつた。

（なんなんだ……！？）

辺りを見回しながらさつと立ち上がる。そこは漆黒の床、漆黒の
壁で、柱は白く高い。柱には灯りが灯してあるのだが、数回見回し
ても出入り口が見つからなかつた。

（なんで……今ここに入ってきた筈だよな？）

どこからか日の光が注ぎ込んでいるが、天井は確かににあるのに窓
はどこにも見当たらないのだった。

『びつくつした？』

(一?)

軽やかな、笑いを含んだ声が聞こえた。
(どこから……あたしに言ってんのか?)

『すつごい焦つてたわよね』

くすくすと楽しそうな笑い声が聞こえる。腕を引っ張つていたのは声の主だと察し、フィフィは腹立たしそうにまかせて怒鳴つた。

「俺と話しがしたいなら目の前に出て来い！」

これで姿を現さなければ、フィフィは一切言葉を発しないと決めていた。それに、魔術師ならばウイスペルに頼んでアシュリーや一ルに知らせて貰えればいい。

『ああ、それもそうね。』

そう聞こえたかと思つと、目の前に一人の女性が現れた。

「悪戯、大好きなのよ。」

そう言つて笑う女性は、美しかつた。が、同時に可愛らしさもあつた。淡い白灰色の髪は長く、緩く編まれて膝下辺りまで伸びている。胸元の開いた白いドレスは纖細で柔らかい印象で、綺麗であります。可愛らしい。華奢な体つきなのだが、悪戯が好きだと言つて無邪気に笑う様はふてぶてしくもあつた。

(…なんだこの人……)

半分睨みつける様なフィフィの視線に気付かないのか、女性は興

味深々にフィフィの顔を覗き込んで訊ねた。

「ね、フィフィ＝ルセよね？」

「……………あんた、誰？」

「あ、それを問題にしたかったのよ！私は誰だと思つ？」

心底樂しいらしく、彼女ははつきつきとフィフィの前を行つたり來たりし出す。

が、フィフィは事も無げに言つた。

「興味ない。元の場所に返せ。」

ぴく、と彼女は動きを止め、大仰に溜め息をついた。

「駄目。楽しくないわねえ…人生楽しんでる？」

(は？)

「最近めつきり減っちゃったのよねえ、私と関わりを持つ人。だからちょっと悪戯と意地悪しただけなのに、あなた、冷たいわよ。」

冷たい、と流し目で言われても、フィフィはこの美しい女性を悲しませてはいけない！などとは思わない。

「悪戯と意地悪で不愉快な思いをしない程の仲じゃないからな。俺とあなたは。」

「……………誰かに似てる台詞ね。」

「は？」

「私が言つたのか…」

ぼそりと言つて床を睨む女性。フィフィはこの女性に頼るの止め

て、ウイスペルに頼む事にした。

「誰か助けを呼んでくれよ。」

ちりりん、と可愛らしい鈴の音が聞こえると、女性は面白そうに視線をフィフィに戻した。

「駄目よ。光の眷属だろうと私には関係ないことだもの。」

「あんたは何者?」

「ああ、ねえ…睨むのやめなさい。せっかく正式に力を貸してあげようとしてるんぢゃないの。睨むのはゼルヴァで充分!」「

「正式に力を貸す?」

正式も何も、力を借りた覚えはない。

フィフィには。

「…俺はあんたを頼つた事ないけど?」

すると、彼女は大仰に溜め息をつき、首を振る。

「ちょっと。それはひどいわよ。いくら鈍感で能天氣だからって。」

「喧嘩売つてんのかあんたは!」

「売られてるのはこいつ?全く。クビにならなかつたの、誰のおかげだと思つてるの?ひどいわね。」

(クビ…?)

クビと聞いて思い浮かぶのは、半月前の御前試合。フィフィは思い出して言った。

「ニル様とコンのおかげだ。あとは、運かな…」

「運つて何よ！一般国民が、ヴィルジウスに勝てるわけないでしょ！能天氣過ぎよ…」

「……………てめえ…」

「私のおかげでしょ？私の！私が盾になつてあげたのよ？」

「ん…？」

あの御前試合では誰も舞台には上がつていない筈だ。それに、あの瞬間だつて誰も近くにはいなかつた。盾が必要だつた場面は、たつた一瞬。それで王子は体勢を崩した。

「……………ニル様がくれた魔術…？」

「うーん…まあ、それでも良しとするか。」

「あれはニル様がくれたんだぞ？あんたがどこに関係するんだよ。」

女性はがつくんと肩を落とした。

「ああ…なんて鈍いの…。それとも、かなり馬鹿にされてるのか知名度が落ちたのね。やつぱりこのままじゃいけないわ。忘れられちゃつたら意味ないじゃないの…」

「だから、言つてみろよ。どう関係してるのが。」

はてながいっぱい、という感じで促すフィフィに、女性は気を取り直してにこりと笑んだ。それは、人を魅了する柔らかな笑みだ。

この時初めて、この女性が人外のもののように感じた。

「私はエウエラ。大精靈よ。」

そう言つた彼女の足下には、いつの間にか大きな白い豹が寝そべつていた。

「……ヒュヒラ……？」

「もうよ。分かったでしょ？あなたのクビを守つてあげたのは、私。

「大精靈、ヒュヒラ！？」

「そうやつ、そうなのよ。分かった？」

「…………」

驚愕に言葉を失うフィフィを見て、ヒュヒラは満足そうに微笑んだ。

「私に選ばれる者は少ないのよ？感謝なさい。」

「な……なんでヒュヒラが……？ ていうかあなたはニル様と契約してるんじや？」

「んーまあ、助けてあげてもいいとは言つてあるけど……元々の契約者はユンファなの。ユンファがニルヴァーナも助けて欲しいっていうから、気が向いている間は力を貸してるだけよ。」

「コンが……？」

「コンファは時の中でも稀な子よ。すごい子だわ。」

言しながらヒュヒラはしゃがんで白豹の毛並みを撫でた。白豹は気持ち良さそうに喉を鳴らす。

「…………それで、俺になんの用ですか？」

不思議そうに首を傾げるフィフィに、ヒュヒラは呆れた様子で言った。

「まだ分からぬなんて、鈍いにも程があるわよ！もつと考えなさいよ！」

「正直関わるのめんどくさいんで。言つてくれれば済む問題じゃないんですか？」

「済むけど……済むけど……ああもう……」

悔しそうに頭を抱えた後、エウエラはフィフィを睨みつけて言つた。

「あなたを加護してあげる。」

「…………は？」

「右手を寄越しなさい。右手を。」

フィフィが返答する間もなく、勝手に右手がエウエラに伸びた。

「えー？」

「？？この生命に宿る輝きは私の糧となり、私を創り出す生命の全てはフィフィ＝ルセの僕と成り得る。

」の輝きは生命の輝き。

」の言葉は生命の言葉。

混じり合つその真実は全てに宿る意思あるものの楔となり、」に消え去ることのない約束を刻み、戒める力となれ？？」

エウエラは差し出されたフィフィの右手に触れる事なく、両手で包み込むようにして呪文を詠つた。手は口だまりにあるかのように暖かくなり、手の甲の図形が光り蠢いているのが確認出来た。息を呑むフィフィに、エウエラは笑つてこう唱えた。

「？？彼女が私を受け入れるその時だけ、私は彼女に全てを譲るつ？」

その微笑みに魅入った瞬間、フイフイは柔らかなものに、体も、意識さえも包まれ、ようやく閉じ込められた空間から出られたのだった。

「?????うわっ」

「！」

意識が完全に消えかけた時、急激にまた引き戻された。

？？氣に体の感覚と意識が戻ったのだ。それで、うまくバランスが取れず、フイフイはまたもや尻餅をついた。

「うひ、いてー……」

「フィニアース！」

顔を上げると、そこにはニールの姿があった。驚きつつも訝しんでいるのが分かる。ニールは立ち上がるのに手を貸しつつ、不思議そうに訊ねた。

「一体どひこひこと？まさか魔術の勉強でもしているの？」

「……まさか。俺はたった今、悪戯が大好きな大精靈様に意地悪されて、ようやく帰してもらつただけですよ？」

皮肉たっぷり、明後日を見て言ひフイフイに、ニールは真剣な面持ちで訊ねた。

「…………エウエラに呼ばれたの？」

「……呼ばれたというか、無理矢理連れて行かれたというか……」

立ち上がり、ありがとうございます、と礼を言つてフィフィは自分の足で立つた。歩きましょ、とニールに言われ、二人並んで歩き出す。

「ところで、ここはどの辺ですか？俺、迷つて…その間に誘拐されたみたいなんですね。」

「それで…」

ニールは納得した様子で頷いた。フィフィには何を納得したのか分からぬが、特に聞こうとも思わなかつた。

どうでもいい。とにかく休みたい。

「…」ここは城の三階。真つ直ぐ行くと古書庫があるわ。分かる？

「ああ！つてことは右に行くと武器庫で、厨房もあるんですね？」

「そうよ。大分覚えたみたいね。」

お陰様で、とフィフィは笑つた。

「…それで、エウェラに何かされた？」

「…………ニール様も何かされた事あるんですか？」

「え？」

「大精靈つていうから、どんなものなんだろうと思つたや…。コンはなんで契約しようつと思つたんだろ…」

「コンがエウェラと契約しているつて、エウェラ本人から聞いたの？」

「そうですよ。ニール様にも力を貸して貰つて言つてました。」

「え…」

落とした聲音に気付き、フイフイは首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「…………あまり口外しないで。」

「え？」

不安そうな目を見るのは初めてだ。ニルがこんな顔をするなんて。フイフイは思わず足を止めそうになつたが、ニルが構わず歩いて行くので、少し遅れて続いた。

「…………ユンは…………稀な子なの。」

「…………それ、ヒュエラも言つてました。」

ニルは何も言わなかつた。

「どういう事ですか？何か……よくない事でも？」

ニルはすぐには答えなかつた。フイフイもすぐには言葉をかけない。小さく深呼吸をしてから、ニルは答えた。

「…………ユンのする契約は、私達とは違うの。その契約を快く思わない人の方が多いのよ。だから：人に言わないで欲しいし、契約について聞かないで欲しいの。」

いつも、しかと目線を合わせ、相手の意向を絡み取つてしまふようなニルだが、この時だけは目線を合わせようとしなかつた。僅かに俯き、淡々と話していた。その様がひどく憐憫で頼りなく、フイフイは頷くだけに留まつた。

ちりん、と耳元で鈴の音が聞こえた。はつと立ち止ると、気付いたニルが頷く。

「あの嵐と植物の件だと思うわ。」

「そう言えばニル様も呼ばれてたんですよね…」

「話はアシュリーから聞くといいわ。行きなさい。」

「はい。じゃあ失礼します。」

さつと礼をしてフィフィは駆け出す。半月前と比べて、言葉遣いや礼の動作などが変わりだしたフィフィを見送り、ニルは僅かに笑顔になつた。

「遅い。」

開けた途端にさう言われ、フィフィは扉を押し手に力を込めた。

（このは……）

「すみません。大精靈に埒されていたもので。」

「は？……ヒュエラに？」

首を傾げたと思ったたら、アシュリーは唐突にフィフィの右手を掴んで引っ張つた。

「ちよつ…」

その手の甲をじつと眺め、アシュリーは不思議そうにフィフィを眺めた。図形は、今や刺青のように右手全体に広がつており、そこだけ色を抜いたような白さだった。もの言いたげに見られ、さすがに口を開く。

「……何か思うなら、聞いてみたらいりますか？」

「ひひつきや指名手配犯に、軟弱そうだ、女だ、といつて眺められる事はあっても、この生き物なんだろ、といつて見られた事はない。少なくとも、アシュリーに出会うまでは。なのでとっても居心地が悪くなる。

が、アシュリーの一言は、そんな心地悪さなど一瞬で吹き飛ばした。

「君つて、変だと思つ。」

「あんたよりマシだ絶対に！？」

先程から理不尽な扱いを受けていると感じていたフイフィは、アシュリーの一言で爆発した。思わず手を振り払う。クルスが見ていたらきっと激怒していただろう。振り払われて少し驚いた様子のアシュリーだったが、ことさら平然と言つてきた。

「君より俺の方が普通。絶対に。」

「んなわけあるか！どう考えたってあんたのが変人だ！」

怒鳴るフイフィに、アシュリーはさらりと話題を変えた。

「あの嵐が始めに発生した、フルウェイル国に行くから。」

「は？」

「明日出発。今日二郎がレイフィス国王陛下に訪問を伝達してくれる。今回は調査での訪問だ。出来るならついでに事を片付ける。」

「……レイフィスって誰ですか。調査して解決するなら、いつ戻れ

るか分からないうて事ですか。」

「…………

説明するのが面倒臭い。と顔が言つてゐる。フィフィは大仰に首を振つた。

「あーもーいいです答えなくてークルス嬢に聞きますから。明日出発ですね分かりました!」

言つだけ言つて退室する。アシュリーの返事に構わず荒々しく扉を閉めると、フィフィは怒りに任せて駆け出した。

「あ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ……」

行き交つ兵士や姫がぎょっとしているが、そんなの知つたこつちやない。

この城に来てから、理不尽な仕打ちばかり受けている気がした。

出発の日は快晴だつた。

嵐は大きな爪痕を残したもの、夢ではなかつたのかと思える程、後の天候は恵まれ、クライスト本来の穏やかな天候が続いている。

城門と城とを繋ぐ庭には、フェルウェイル王国へ向かうアシュリー一行と、見送りの人達がいる。見送りは、ヴィルジウス王子の名代でリディオス、同僚であるニールと助手のコンファ、そしてルキセオードだけだ。

クルスには出立前に、しばらく授業は受けられないと言つておいた。では旅先でも礼儀作法には気をつけるようにと念を押された。そして、見送りには行けないから、気をつけて、と。どうしてか訊ねると、苦笑しながら身分が低いから、と答えられた。小さく謝ると、その必要はないと言つてくれた。

それにしても、少し寂しい見送りなんじゃないかとフイフイは思つた。けれど、フイフイは元々、見送る、見送られるという習慣がない。少し寂しい見送りも、当事者達が平然としていれば、見送りつてこんなものかと思つて離まる。

「では、クライストの調査団という形で、フェルウェイルへ向かいます。」

アシュリーがことわら、じゃあ行つてきます、という風に別れの挨拶をすると、フィフィも今回の旅がなんでもない事のように思えてきた。

「ウルセーディ陛下から、無事に、と託かつてきた。我が主からは、早々に解決するよつこと。」

リディオスが表情を一瞬も動かさず、アシュリーはげんなりと肩を落とした。

「……よつするに事態を完全に解決するまで帰つてくれるな、でもさつさとやれ。つてことだな…」

ぼそりとアシュリーに、ニールが言葉をかける。

「道中気を付けて。あの時みたいにならないよつことね。」

「余計なお世話。本当に。」

「フィアース、貴方がしつかり護衛するのよ。その為にいるんですからね？」

突然矛先が自分にむいて、フィフィは若干動搖した。

「はい。きつちつお守りいたします。」

「いい態度ね。言葉遣いも改善されたし……いい感じよ。」

「……肝に命じます。」

言葉の端々から圧を感じてそつ返すと、ニールはにやつと笑つた。悪魔の笑みだ。しつぽが揺らめいて見える。

「アシュリー様、ファニアス、どうかお気を付けて…」

コンファだけが心底心配そうにそう言つので、ファフィは思わず笑顔になつた。

「心配なさらず。アシュリー様を守るのが仕事ですから。」

コンファがほつとしたように笑うと、アシュリーは用が済んだとばかりに城門へ足を向ける。ファフィは若干先を思いやりながら、その後に続く。

「第一師団長サーチェス。アシュリー様、ファニアス様を無事フェルウェイルへ送り届け、お一人の任に助力し、また無事にクライストへ帰還する。以上が今回の任である。命を賭して任務を遂行せよ。」

「ルキセオードにそう言い渡されると、サーチェスと呼ばれた師団長他、第一師団が一斉に敬礼した。

「はつ…」

その様は実に壯快だった。思わず振り返ったファフィに対し、アシュリーはもうすでに馬車に乗り込んでいた。

（はやつ…自分の見送りだつてのに…）

「フィース。」

呼ばれて振り返ると、ルキセオードが側に立っていた。

「ルキ……」

若干緊張を含んだ姿勢に、フィフィも緊張する。

「クライストの大魔術師は、常に命を狙われています。フィースも気を抜かないよう。アシュリー様を狙うに当たつて、まずフィースから、と考える事もあります。」

そんなに危険なのか、という思いが顔に出たのだろうか。ルキセオードは微かに頷いた。

「……了解。自分とアシュリー様の身くらいはなんとか守れる。」

心配するな、とは言えなかつた。ギルドで危険な目にあつてゐるが、これから起つてゐる危険がその比に及ばない事だつてあるだらう。

「……それは良い知らせです。こぞとこつ時、師団は捨て置いて構いません。俺の師団です。簡単にはやられませんから。」

ルキセオードはそう言つて微笑んだ。それで、フィフィも緊張が解れた。しっかりと手を握つて別れをすますと、急いで馬車へ乗り込む。

と、アシュリーと目が合つた。

「……なんですか？」

「…………」

何も言わずに視線を逸らす。わけが分からない。が、それはいつもの事なので。

(アシュリー様つて目の付けどじるもちよつと変わってるしな)

くらいにしか思わなかつた。

「第一師団、出立ー」

サージェスの号令で、一行は動き出す。見送りの四人は、ルキセオードとゴンファを残し、すぐにその場を去つて行つた。しばらくその場を動かなかつた二人だが、ゴンファが口を開いた。

「……天魔の一匹でもおつけするべきでしょつか…」

その言葉に、ルキセオードはやや緊張した。ゴンファがどんな能力を持つているのか、よく知つてゐる。

「……ゴンファ様。貴方がそうしたいのなら、おつけになればいいと思ひますよ。」

今度はゴンファが、緊張した面持ちでルキセオードを見上げた。ルキセオードの顔は静かで、温かだつた。

「けれど、本当にそつしたいと思つてらつしゃいますか？」

「つ……」

とたんに目を落とすゴンファ。こんな子供に頼りな氣にされると、

大体の者はついつい甘やかしたくなるが、ルキセオードは先程と変わらず、しっかりと姿勢を正したまま言った。

「コンファ様。貴女は確かに強大な力をお持ちで、それを頼りにされる事も多い。ですが、貴女はニルヴァ？ナ様の助手であり、その前に、貴女という人間です。それを忘れてはいけません。」

「……？」

コンファは驚いてルキセオードを見上げた。

「力を使う事はお好きではないのでしょうか？なら、必要に迫られた時以外は、無理に使う事はありません。」

「……」

「ありがとうございます、と言わなければと分かっている。が、言葉が出なかつた。

コンファの力は特別に稀で、忌み嫌われる場合がほとんどだ。それでもこの城で働く事になつたのは、ひとえに、力の強さだ。“兵器として”この城に迎えられたのだ。本当は働きくなかったが、コンファには居場所が何処にもなかつた。だから、生き存える為に招致を受け入れた。その時、心は死んでいた。それを救つたのが二ルで、二ル以外にコンファを“人”として扱つてくれる人は存在しないと思つていた。

だから、ルキセオードの態度、そして言葉には驚いた。コンファを小さな、頼りない子供としてではなく、忌み嫌われる化け物ではなく、同じ城で働くものとして、見ててくれていると感じたのだ。これは、コンファには大発見だった。幸せな出来事だ。

「…………わたし……怖くないんですか？ 気味悪く……ありませんか？」

おそれおそれ聞いた質問には、明るい笑みが返ってきた。

「私は何も怖くなどありませんよ。むしろ頼りになりますし、天魔王は大切なものなのでしょう？」

「…………でも、わたしは……」

ルキセオードはそっと肩に手を置いた。人の手の温度が、コンフアに伝わってくる。

「コンファ様。貴女はその力を、気味が悪いとお思いですか？ 怖いと？」

コンファは大きく首を横に振った。

「なんの為に振るわれるべきだとも思いですか？」

「これには、少し考えた。戸惑いながら答える。

「…………へいかには、国の安全を守るために使えと言されました。そのためには血を流すこともひつよつで、じゅうよつな事だと……」「ニルヴァ？ ナ様は如何です？」

「……ニル様には、自分と、守りたいものがきずつかないために使いなさいと言われました。」

逡巡するコンファを見て、ルキセオードは微笑んだ。

「では、コンファ様。貴女の力は、貴女が使い方を決めればいい。貴女が陛下の意を汲みたいと思うならば、その為に使いればいい。」

ルヴァー？ナ様の意を汲みたいと思うならば、その為に使えばいい。

「…………わたしは…………」

「どちらを取つてもいいし、どちらも取らなくともいい。全ては貴女の力で、貴女が決める事なのですから。」

不安気に彷徨つていた視線は、少し経つと彷徨うのを止め、しつかりとルキセオードを見上げた。

「はい。わたしは、わたしの考え方で力をを使います。」

馬車の中は静かなものだつた。アシュリーは出発後すぐに眠つてしまつていて。フィフィはすることもなく、しばらくは城下の景色を眺めていた。

「…………」

賑やかな様子を見ていると、助手になる前を思い出す。親しい知り合いも、仲の良かつた仲間もいた。しかし、以前の生活では、いくら親しい仲であつても、別れは唐突で、当たり前の事だ。今こうして町を眺め、知り合いを見つけたところで別れを言いにわざわざ馬車を降りる事もない。そんな事をするのは不自然であつたし、可笑しい事だ。

そしてまた、再会も出会いも唐突で、自然な事。フィフィにひとつそれが常識だ。別れも、出会いも、大きな出来事ではない。

しかしそういう事をしないと後でつるさいのが一人だけいる。その人物の顔と、何を言われるかを想像して、フィフィは若干目つきが悪くなつた。

「具合でも悪い？」

思いもかけない言葉を聞いてかなり仰天した。アシュリーがいつの間にか起きて、フイフイを不思議そうに見ていた。

「ああ、いや。…馬車の中って慣れてないんで、馬に乗せてももうつていけですかね？」

そう聞き返すと、アシュリーは頷いた。

「サー・ジエスは良いって言つたと思つ。」

「じゃあ、聞いてみます。」

そう言つて、進む馬車の扉を開けると、横についていた騎士がぎょっとして慌てた。

「フイ、フイアニス様…！危ないですよ。」

「平気だよ。俺、馬に乗つてた方が楽なんだけどさ、乗つても良いかサージエス師団長に聞いてくれるか？」

「は…？はあ…。しばらくお待ちを。」

そう言つと、騎士はすぐに前方へ移動して聞いてくれた。サージエスが驚いたように振り返り、また騎士に視線を戻して何か話す。騎士も言葉を返し、しばらく考えてから、サージエスが下がつてきた。

「フイアニス様。あいにく、フイアニス様の馬を用意してございませんので、騎乗なさるのは難しいかと……」

「じゃあ御者席にいたら駄目か？」

「はあ……。御者が恐縮してしまつと思ひますが…」

「…………そーかー」

扉を開けた状態のまま悩むフイフイに、アシュリーが声をかけた。

「サー・ジエスをそれ以上悩ませないよつに。馬がいいなら、リーリーに着いたらあげるから。」

「滅相もございません、アシュリー様。わたくしが至らず、フイア二ス様には申し訳ありません。」

「え、いや、俺の我が仮だから……すみません。アシュリー様、お願いします。」

「…………サー・ジエス、もういい。」

「はつ！」

大人しく扉を閉めると、フイフイはアシュリーに頭を下げる。

「すみません。お願いします。」

「…………そんなに馬がいいの？」

「馬がいいと言つよりは、じつとしてるのが性に合わないんですよ。だから、まだ馬に乗つてた方が楽だなーっと思いまして。」

「…………寝てれば？」

「俺、あんま長い時間寝れないんですよ。ざつしても起きてします。」

「…………取り合えず座つて。」

言われてフイフイは対面に腰掛けた。

「リーリクに着くまでは我慢して。サー・ジエスは俺達を守るためにあちこち気を配らないといけないから、煩わせないよつに。」

「……はい。」

「……………」

数時間後、フィフィは眠っていた。規則的に起こる揺れに眠気を誘われたのか、あるいは差し込んでくる口差しの暖かさか。もしかしたら心地良い音のせいかも知れないが、うとうとしていると思つたら、意外にも早く寝入つてしまつた。

腰掛ける為というよりは、安らぐ為の馬車の座席にすっかり身を委ね、肘掛けにもたれるようにして眠り込んでいるフィフィを、アシュリーは眺めていた。

人がこんな風に寝ているところに遭遇した事がないので、珍しかつた。

そう言えば、フィフィが来るまでは、誰かとこんなに長く一日を一緒に過ごす事はなかつたように思う。それに、ここまで人前で無防備でいられる人にもあつた事がない。無防備でいる、という意味ではヴァイルジウスもそうしているが、彼とはまた違う。といふか、彼は違う。色々な意味で人とは違う。比較にはならないかも知れない。

そう考えて、アシュリーは頭を振つて考えを追い出した。

(さつきは何をあんな真剣に見てたんだろ?…)

外を眺めていても、アシュリーの興味を惹くものは特にない。ただ人がいて、通り過ぎて行くだけだ。

フィフィの事を、不思議だと思う。月給につられて城に来たらし

いが、そもそもギルドの賞金稼ぎが、どうして城で働くと思ったのだろうか。確かに安定した収入にはなるだろうが、ギルドとは違う、どんな危険も命じられれば断る事など出来ないところのこ。

軽い気持ちで来たのかも知れないと思こや、御前試合も逃げずに、むしろ堂々と戦い、助手兼護衛といつ仕事をきらんと果たそうとしてるよう見える。

(変……)

そう言つたら本人は怒つていたが、そう思えるのだから仕方がない。ファイフイは変だ。アシュリーにはそう思える。最初の頃は城に居づらそうだったのが、一週間も経てば何喰わぬ顔で歩いているし、始めは誰もファイフイに好意的ではなかったのに、いまではよく話しかけられていのを見かける。

そもそも、ルキとあんなに親しくなつていたのに驚いた。ルキ自身は誰にでも友好的な態度を取るが、あれはもう、心を許していると言つていいだろう。それに、ゴンファがかなり懐いているのも驚いた。

(変……)

こんなにも自分をさらけ出して、周りに命を預けて、よくギルドの世界で生きて来られたと思つ。それとも、本当は誰にも自分を見せていないのだろうか。

「…………よく寝てる……」

眩しても、ぴくりとも反応しない。もうとっくに町から外へ出でいるが、その変化にも気付かないのだろうか。ファイフイはすやすや

と寝入つている。

「…………これだけ寝てて、護衛なんて出来るの……？」

そんな疑問にも、気付かない。アシュリーはフィフィの観察にも飽き、自分も寝る事にした。

リーリクという、クライスト帝国最東端の町についたのは、出発から三日三日の事だった。

町に着いて、アシュリーに馬を貰つて（魔術で移動させたらしい
が、ファイファイは見れなかつた）、一泊して、さあ朝に出発というと
ころまできて、ファイファイはようやく気付いた事があつた。

「アシュリー様」

馬車に乗り込もうとしていたアシュリーに声をかけるが、アシュ
リーはやはり見向きもせずに答えた。

「なに。」

ファイファイは馬に騎乗して続けた。

「今思つたんですが、クライストからフェルウェイルまで、どうし
て魔術で移動しないんですか？」

その質問に、師団全員の視線を集めた気がした。

「…………」

言葉を失つたのはアシュリーだけではなく、師団全員が、驚きに
硬直していた。

「…………いや…………すいません…………政治には疎いもんで

あまりの緊迫感に、思わず肩を竦めて謝った。アシュリーは大仰に溜め息を吐いた。かなり呆れていたようだ。

「…………ちょっと乗れる?」

馬車へ入れ、といふ意味だ。ファイフイは馬を騎士に預け、じばし馬車で移動する事になつた。

「…………ぢりして魔術を使わないか、考えてみて。」

説明するのが面倒臭い、と顔に描いてある。が、サファイアでの一件と同じよつて、話さなければいけないと黙つていていたのだ。

(「いやあ、国回士の関係に関わることか?」)

わつ判断して、ファイフイはよくよく考えてみた。しかし、魔術でぱつと移動する事に、そういう問題はないに思えた。便利じゃないか。ぱぱつと伝達出来るし。

「…………まずはいんですか?」

わつわつとい、アシュリーは頭が痛そうに顔をしかめた。

「…………相當信頼しあつてて、この国回士でなければ、魔術で転移するの宣戦布告に値する。」

「えつ…………移動しただけで?」

「攻撃とみなされる。それくらい、国同士の間で転移移動は重要視されている。しないのが常識だ。万一魔術で相手の許可なく移動すれば、移動先以外の国からも非難されるだろうな。」

「なんで……いや、何故ですか？……あつ！国境が関係なくなるから？つまり、関所を通り抜けられるからですか？」

「そう。不法侵入になるけれど、それ以上に、魔術での移動は内容を細かく把握出来ないから、国際的に禁止されている。」

「行かれちゃまずいところに入れちゃつたり……って事ですね？」

「そう。…………ギルドに魔術師はいなかつたの？」

「あー、いましたけど……ギルドの魔術師つて変態ばっかでしたから、関わりませんでした。」

遠い田でそう言わると、アシュリーは何かいけない事を聞いた様な気がして、ほんの少し罪悪感を感じた。

「……まあ、国際的禁止事項を平気で破っている者もいるけど。」

「は！？」

「聞いた事ない？ウォルス＝イセリア＝dain。」

「…………あ？？？？つ！……神出鬼没の魔人ウォルスだ！……」

フイフイが突如大声を出したので、アシュリーはその煩さに思いつきり耳を塞いだ。

「あ、すいません」

「煩い。無駄に煩い。」

「…………」

かなり耳に響いたのか、アシュリーはしばらくしてから、よつやく手を耳から外した。

「……ウォルスは国際指名手配。けどまあ、捕まらないだろ?」

「……そんな事言つていいんですか?」

「クライストに仇成さない限りは。……それに、あいつは特別だから。

」

あの子は稀なの、と言つたエウエラの言葉が被さつた。魔人の存在も稀、という事だろ?」

「……特別、ですか?」

「そう、特別。古代の一族の末裔だから……」

「へー……」

よく分からぬが、そつなのか。と、思い込んだフイフイの態度が気に喰わなかつたのか、アシュリーは、もういいよ、と言つてフイフイを馬車から追い出した。再び馬に騎乗したフイフイは、うきうきと旅を再会した。

クライスト帝国を北東へ進んでいくと、やがてはフェルウェイル王国につくのだが、その間には、クライストから順に、レシテ国、ハーグヴェル帝国、ラナス国、ピオティス・オス共和国、イイエル国がある。

嵐は海沿いにやつてきたから、その痕跡を調べながら迫るのだ。

最短距離で隣接する国々を通りのなら、ハーグヴェル帝国に。ピオティス・オス共和国、そしてイイエル国だけで済む。そうフイフイが言つと、呆れた様子でこう返ってきた。

「それじゃあ調査にも解決にもならない。」と。

そんなわけで一行は今、レシテ国にいた。

レシテはクライストに比べると、随分小さな国だ。それもその筈、クライストとハーケヴェルという帝国に挟まれている形になる。両帝国に海へ押しやられ、肩身の狭そうな国だ。

実際、アシュリー達が到着するなり、国王の使いが慌ててやつてきて礼を尽くした。事情を説明して、後にハーケヴェルへ渡ると伝えると、それならばと伝令役を買って出たのだ。アシュリーはそれを断つたが、あまりに恐縮した態度に、側で見ていたフィフィは可哀相に思えてしまった。

「なんか……可哀相なくらい縮こまつた態度ですね。」

国王の使いが去ると、フィフィはぼつりと呟いた。それにアシュリーが淡々と答える。

「帝国に挟まれているから仕方がない。それに、両国の仲はあまり良くなないから、余計に敏感になってるんだろう。」

「あー……噂には聞いてましたが、そんなに仲悪いんですか？」

アシュリーは面倒くさそうに顔を上げる。今は宿の一室の中。外には見張りの騎士もいる。それを確認して、アシュリーは答えた。

「両陛下のものの考え方が違うし、意見の通し方も違う。仲が良いとは、とても言えない。」

「……間にあるレシテとしては、穩便に毎日を送りたいわけですね。」

「

フィフィがそう言つと、アシュリーは深く頷いた。

「もしも両帝国が戦争でも始めれば、レシテは火の粉を被るどころか、真っ先に戦場にされるのは分かりきつてるから。」

「……実際、戦争になりそなんでしょうか？」

そう聞くと、アシュリーは沈黙した。フィフィも言葉を失う。あまり仲が良いとは言えない。というのは噂で知つていた。それは、クライストの国民の間では当たり前に流れている噂だつたが、それを真剣に考えているものはいないだろう。それこそ、城に仕える者以外には。

「……そんな状況で、ハーグヴェルに入つて大丈夫なんでしょうか？」

アシュリーは溜め息とともに答えた。

「……今のところは。」

「どういう事ですか？」

問い合わせるフィフィに、アシュリーは呆れた様子だ。

「……君は、本当に質問が多い。」

「今説明して下さると、後々面倒が少なくなりますよ。」

こつこつ笑つてそつと、アシュリーは観念したよつて視線を逸らした。

「……ハーグヴォルはクライストを落とす機会を虎視眈々と狙っている。表立っては同盟を申し込んだり、不可侵をうたつてはいるが本心は違う。」

アシュリーは淡々と続ける。

「我らがウルセデイ陛下は争う気はないと暗に伝えてはいるが、だからと言つて侵略を許すわけにもいかないから、ある程度はひけひけ示す必要がある。」

アシュリーは暗くなってきた室内を照らすために、燭台に火を灯した。とはいっても、実際はウィスペルが飛び回つて灯を灯す。

蠅燭の光に照らされていると、アシュリーの神秘さがいつそう際立つ。

「それが、ゼルヌ陛下には惡々しいようだ。」

そう言つてアシュリーはしばらく窓の外を眺めた。ひょっとしたら色々と思いを馳せていたのかも知れない。

ふとフィフィに向き直ると、なんでもない事のようになつた。

「まあ、すぐにどうこうなるような対立じゃない。今のところは。」

「…………それについた事はありませんね。」

「もう寝るから、出でつて。」

眠た氣に目を向けるアシュリーに言われてフィフィは一礼し、部屋を出た。

翌朝、フィフィはウイスペルに起された、心地良い朝の空気をいっぱい吸い込んで身を起こした。今日明日はハーグヴェルを通過するのだ。少し警戒しておいた方がいいかも知れないと、フィフィは少し気合いを入れた。

朝食を摂ると一行はすぐに旅立つ。その時もレシテ国王の使いがわざわざやつて来て見送ってくれた。その様はまさに帝国の僕だ。なんとも言えない気持ちでフィフィはレシテを後にした。

レシテ国とハーグヴェル帝国の間には、短いが渓谷がある。道があるとはいえ、大きな岩が多く見通しがかなり悪い。そのせいか、師団全体が僅かに緊張しているように見えた。渓谷を抜けて行く人々もいるのだが、その人たちも僅かに警戒しながら通り抜けているように見える。

（見通しは確かに悪いけどな……。こういう場所で襲撃にでもあったら、この大所帯じゃ身動き摑りづらいやつたらないな。）

少し馬の足を止める。両側にそそり立つた大岩を見上げると、その上に逞しく生い茂つていてる緑が見えた。

（……ほんと、見えない……）

前を見ると、少し止まつていただけなのに師団の姿が見えなくなりそうだった。

（道なりも急で、はぐれはしないけど見えなくなるのは簡単だな。）

そう焦らずに馬に前進を促し、師団を追う。すると、道を曲がつてすぐのところ、師団とフィフィの間辺りに座り込んでいる旅人が目に留まった。通り過ぎようと近づくと、その旅人の顔色が悪い事に気づいた。マントを羽織り、フードも被っている為分かりづらいが、顔色が悪い。

フィフィは馬を止め、その旅人の側に降りた。気づいた旅人が顔を上げる。その両目がとても珍しいものだと気づく。

（深い紫色……見た事ないな……）

思わず魅入ってしまっていると、旅人が微笑んだ。

「どうかしたか？」

少し低めの、心地よい聲音。その目も、その聲音も、どこか常人とは違う気がして、フィフィは僅かに警戒した。

「……顔色が悪いぞ。眞合でも悪いのか？」

男は驚き、また微笑んだ。

「俺を案じてくれるわけか。」

純粹に嬉しそうに微笑まれると、警戒している自分に少し罪悪感を感じるが、ここは気を引き締める。

「レシテなら近いぞ。もう少し頑張れば着く。」

「あいにゃ、レシテには用が無い。だが心配無用だ。すぐに良くな
る。」

「薬でも置いてってやるつか?」

「……お人好しだな。」

「別に、分けられる時は分けたらいいだらう。で、要るのか?」

「いや……お前の気持ちは貰つておこう。薬は不要だ。」

「わうか……まあ、気をつけろよ。」

そう言つて騎乗するフイフイに、男は嬉しそうに微笑んだ。フイ
フイは少し離れてしまつた師団と合流する為、馬の横腹を軽く蹴つ
た。

「お前、いい女だな。」

(……！)

声が耳に届いたのは馬が走り出してからで、フイフイはそう言つ
た男の姿を確認する事が出来なかつた。この格好で、少し話したく
らいで、こうも確実に女だと判断された事に驚いた。

(あいつ、一体……?)

振り返つてももう岩に阻まれて男は見えない。何か厄介な相手に
絡んでしまつた気がして、フイフイはじわじわと不安になつていつ
た。

??アシュリー一行はレシテの短い渓谷を無事に越え、もう一つの
帝国、ハーケヴェルへようやく足を踏み入れた。

渓谷を越えた所はなだらかな下り斜面で、ハーグヴェルの城下町を一望出来る。

「うわあ……」

その壮大な景色と共に、伺い知れない予感がフイフイの胸をざわつかせた。

この国には何かがある？そんな予感が。

ハーグヴェルの城下町へと足を踏み入れる。

渓谷けいこくから伸びる斜面には長く石畳が敷かれ、城下町に近い所は鉄で作られたアーチで飾られていた。細工は美しいが、重々しい雰囲気だ。門兵もアーチに沿って並んでおり、入るのも出るのも妙に緊張感を誘う。

そのアーチが終わると、一際大きく莊厳な鉄門が開かれており、いかにも“入れてもらう”という印象を受ける。

入つてすぐにアシュリーは馬車を降り、待機していたハーグヴェルの兵によつて、一足先に城へと運ばれていつた。レシテとは違い、さすがに帝国はただでは通してくれないらしい。

「アシュリー様、馬に乘りますか？」

「いい。」

その方が楽なのに、とフイフィは目で訴えてみたが、アシュリーは見向きもしないで歩き出した。一応護衛もある為、フイフィも仕方なく馬を降りた。馬はサージェスへお願いした。

「なんか、重々しい所ですね。」

そつフイフイが呟くと、アシュリーは淡々と言葉を返した。

「ハーグヴェルは鉄がよく採れる。だから城はもちろん、そういうの住居だってクライストよりよっぽど丈夫だろ？。」

「ああ、クライストは木造ですよね。」

頷いてから、ふと疑問に思つてアシュリーに問う。

「もし火事なんか起つたら、クライストつままずいですよね？」
「は？ なんで？」

アシュリーは心底不可解そうにフイフイを振り返つた。

「だつて木造じやないですか。こと比べたら断然危ないですよね？」

「…………君は、馬鹿？」

「…………はあつ？」

毎度の事なのだが、よくよく考えればまだ二ヶ月と経つていない。だから、そう。まだまだ言われ慣れないのだ。青筋が浮くのも仕方ない。

「ば、馬鹿なのはよく分かつてますから、分かるよつて説明してくれませんか？」

怒りすぎて笑顔しか出ないフイフイに、アシュリーはつんと前を向いたまま答えた。

「君は人に答えを求めるさうだ。少しは自分で考えなよ。」

（あんたが説明しなさすぎなんだろーがつー！）

「…アシュリー様。俺が無知なのが分かってますよね？」

怒りが爆発しそうなを堪え、フィフィはアシュリーの行く手を遮つて仁王立ちした。

「……邪魔。」

心底煩わしそうに顔をしかめられ……キレた。

元来売られた喧嘩は買つ性分だ。

うん。よく我慢してきたと思つ。

「あれ、分かつてないんですか？求人の書類も見てたのにそんな事も頭に入らないんですかねえ、アシュリー様は。魔術の事しか分かんないほんくらなんですかねえ？」

「なつ……ー？」

さすがのアシュリーもほんくら呼ばわりされて癪に障つたようだ。そつと強ばつた表情を見て、フィフィは胸がすつとした。思わずにはんまりしてしまう。

「二ル様が色々教えてくださるわけですよね。ついでにアシュリー様も二ル様にとやかく言われるわけですねー？」

ふふふと笑つて首を傾けると、アシュリーはわなわなと震えてい

た。信じられないものを見る様な目でファイフイを見つめている。

一応、衆目を考えて声は控えめだ。が、側でサージェスと師団が硬直していた。皆、ファイフイを恐ろしげに凝視している。

(ん……？なんで怖がってんだ？)

そう思つたのもつかの間、アシュリーが動いた。

ぎつ、とファイフイを睨みつけ、どん、と思いつ切り押しのけられた。

「つー？」

アシュリーにとって全力でも、鍛えてあるファイフイには弱い衝撃だったが、それよりもアシュリーの強い視線に驚いた。

「つるわこうー！」

「へ…？」

一言呟ぶとすんずん歩いて行ってしまう。

「…………へ？」

ファイフイの挑発に呆れるか怒るかと思っていたが、あの怒り方は予想と違った。何か、嫌な事でも思い出をせってしまったのだろうか。

(…………あれなんかあたし…古傷抉つた…………？)

恐る恐る第一師団を振り返ると……。

「…………」

全員が全員、気まずさにつつにファイフイをちら見していた。

（うわーー直視出来ない程まづかったのか……？）

青ざめて慌ててサーチェスの元へ駆け寄る。

「さ、サーチェス！俺、まづい事言つた？」

「はい。ファニアニス様。あればかなりまづいと思われます。」

「即答！？即答なのか！？」

今度は黙つて、全員が頷いた。もはや、言葉が出ない。

「…………」

「これは、まづい。

（あたし……今度こそクビ？）

「いや……こんなんで……？」

ファイフイは数秒考えて、師団を振り返る事なくそそくかとアシュリーの後を追つた。

追いかけて、近づいて。ファイフイはかける言葉に迷つてただ後ろ

を歩いた。

(こや…どうか。)

アシュリーは怒っていた。それと同時に、何かを耐えていけるように見えた。

(ビードル…? ほんくら…いや、魔術しか分かんないってどこか?)

考えて、さうとやうなんじやないかと思つた。

アシュリーは魔術以外の事が苦手だと、誰もが少なからず分かっている。だからこそニールも、兼護衛という職務をフイフイにやらせたがつたのだろうし、アシュリーをからかうのだろう。

(アシュリー様…結構気にしてんのかな…)

いつもいつも傲岸不遜なものだから、何事にも疎いのかと、勝手に思い込んでいた。

それに、さつきのは傷つけるつもりはなかつたのだ。

ちよつとだけ、いつも腹いせのつもりだった。

「……あーあ…」

小さく零す。いつも零れた言葉は、なかつた事には出来ないんだと、今更思った。

どんなに傲岸不遜に見えても、アシュリーだつて人なのだ。

そこは、軽んじてはいけないところだつた。

「アシュリー様…」

声をかけてみるものの、反応は期待出来そうにない。

（今は無理か…）

前方からハーグヴェルのものだらう、重厚そうな馬車がくる。それが着く前に、とフイフイは思い切つてアシュリーの横へ駆けた。

「俺、言いすぎました。すみません。」

一言だけ、アシュリーの目を捉えて言つた。

アシュリーはふいと視線を逸らす。それで、フイフイは一步後ろへ下がつた。

馬車でアシュリー達を迎えて来たのは、妙齢の女性だつた。いかにも賢そうで、ニルと似た雰囲気があるものの、なんだか無機質な感じがして、フイフイの目にはちよつと不気味に[彌]つた。

「よつこそ、ハーグヴェルへ。わたくしは皇従（こうじゆう）のセシリニア＝ヴェルフェイアと申します。ウイルレイコ様は馬車へどうぞ。師団の方々は恐れ入りますが、後へ続いて下せいませ。」

(なんだこいつ…)

フィフィは眉根を寄せた。丁寧と思つきや強引だ。

一つ頷いてアシュリーが馬車へ向かうと、当然の如くフィフィも後へ続いた。

「失礼ですが、こちらは？」

セシリアはすっとアシュリーとフィフィの間へ入る。その所作がいやに静かで、フィフィはざわつきを感じた。

（なんだ、こいつは…？）

間に入られて不快だと思う以前に、何かがおかしいと感じた。何かが異様だ。

「俺はアシュリー様の助手で、護衛も兼ねています。お側にいるのが仕事です。」

不快感を押さえ込み、教えられた態度を絞り出す。セシリアは怪訝そうにした後、アシュリーへ視線を向けた。

「ウイルレイユ様。この者が必要ですか？」

(ーー?)

ざわり、とうなじがざわつく。しかしそれを一瞬で押さえつけ、フィフィは主の許しを待つた。アシュリーはすでに馬車へ乗り込んでいて、その表情は伺えない。

「……御者席へ。」

普段となんら変わらない口調。しかし、拒絶されているのが分かった。

セシリアがフイフイへ視線を戻し、淡々と言い渡す。

「ひつ仰っています。よろしいですね。」

「……はい。承知しました。」

ぐつと拳を握りしめ、馬車の脇を通り過ぎて御者席へ乗り込む。隣に座るハーグヴェルの兵士は、鉄仮面で表情さえ見えなかつた。

(…胸ぐそ悪い国。)

そう心中で呟いて、フイフイは大人しく馬車に揺られた。

ハーグヴェルの城は荘厳だつた。加えてやはり重厚で、一番息苦しく感じる。馬車は城の中まで入る事が出来て、円形に開けたところで止まつた。

セシリアが先に馬車から降りると、アシュリーも出て来る。意識してフイフイを視界に收めないようにしているのが分かる。それは構わず、フイフイは御者席から降りてアシュリーの後へ続いた。

師団は城内正門前に居るようだ。

「陛下にお会いになられた後、すぐに例の植物を見に行かれますか？」

セシリアにそう問い合わせられると、アシュリーは軽く頷いた。

「そうさせて頂きます。」

「承知致しました。案内を『ご用意致します。』

「それには及びません。」

きつぱりと案内を断つたアシュリーに、セシリアが僅かに顔をしかめた。それを見て尚、アシュリーは言つた。

「お手数をかけて頂く程の事ではありません。ここからでも十分に場所が分かれます。」

セシリアは怒氣の籠った目でアシュリーを見据える。

「…失礼ですが、ウイルレイユ様。ここから植物の魔力を、感知出 来ると？」

「もちろんです。……こんなに濃い気配がするではないですか。」

くすり、ヒアシュリーが笑つた。

(えつ！？)

びっくりして、フィフィは先程の暗い気分が吹っ飛ぶ程にアシュリーを見つめた。

(初めて見た……アシュリー様、こんな顔出来るんだ…)

高圧的で、小馬鹿にしたような、それでいて綺麗な笑み。

セシリアの纏う雰囲気が変わった。ぐつと拳を握りしめ、羞恥と怒りに耐えている。この程度の魔力も感知出来ないのかと、そう言われたも同然なのだ。

しばし拳を握りしめて怒りを抑えると、セシリアは射る様な冷たい眼差しをアシュリーへ向けた。

「……さすがは、ウィルレイユ様。案内などと、失礼でしたね。」「お心遣い、痛み入ります。」

わざとらしく感謝の意を伝えれば、セシリアは忌々しげにそれを見やつて歩き出した。

「謁見の間はこひらひでござります。」

セシリアの視線が外れた途端にいつもの表情に戻ったアシュリーの後に、フィフィも慌てて続く。そして、じつとその後ろ頭を見つめた。

（……意外とやるんだな……）

フィフィと顔を突き合わせるといつも子供っぽい喧嘩しかしないから、仕事なんか出来るんだろつか、と内心呆れていたのだ。

（でもいいのか…？ハーグヴェルはクライストを狙つてゐるのに…喧嘩吹つかけるみたいな態度とつて。）

フィフィにはよく分からぬ。

もう少し後でアシュリーに聞いてみよう。そう思つて黙つて後ろを歩いた。

謁見の間を出ると、どうにも兵士がいなかつた。このままどうぞ好きに、とこゝ事らしき。城へは留まらずに先を急ぐと伝えてあるせいかも知れない。師団は城の一階で待機だ。

ハーグヴェル国国王、ゼルヌへの謁見は、かなり疲れた。

何せ威圧感が半端ない。この国の雰囲氣からして威圧感たっぷりだが、加えて国王だ。なんか、身体がすこーく凝つた氣がする。

アシュリーとの壁が、さらに腹心地の悪さを生み出している。

（でも、いつまでもぐだぐだしてんのもなあ……）

思えばこんな風に、誰かと長い時間行動を共にする、とこゝ事がなかつた。

ギルドの仕事で何人かで組む事があつても、気が合わなければ解散する事が多かつたし、ともすれば報酬の分け前争いで真剣に戦う事もあつた。

（そう考えると……アシュリー様と助手のあたしつて……絶対裏切らない相手”？）

もしそうなら、それは、とても不思議な関係に思えた。

(……まあお互に排除する理由がないしな。)

助手は要らないと言つてゐるアシュリーも、単に面倒くさいだけで、特に不都合があるというわけではないのだ。そりが合わなくて、一緒にいれない事はないと思つ。

(でもなあ…)

どうしてか、このままでは嫌だつた。単に居心地が悪いというだけかも知れないが、なんとなく、このままにしておきたくなかった。

「アシュリー様。」このままあの植物の所に行くんですよね？」

隣へ並んでそつと声をかけると、アシュリーはちりつとこちらを眺めた。すぐに視線を前へ戻すが、フィフィがずっと横に並んでいると、観念したように小さく息を吐いた。

「……君は護衛の仕事をして。」

短いけれど、それは紛れもなくフィフィを受け入れた言い方で。

「はいー喜んでー！」

弾んだ声のフィフィをぎょっとしたように見つめ、何故か腹が立つたらしく、アシュリーはずんずん進んで行つた。

当然、フィフィも追つ。たつた一言で喜ぶ自分が可笑しくて、無性に笑えた。

(アシュリー様の言つ通り、あたしがて変なのかもな)

皇従…言つてみれば皇族、城のお使い係です。勝手に考えた役職です。

植物のある浜辺までは、城から遠く離れていた。浜辺へ着いた時はもう陽が暮れかかっていて、空は赤く、不気味に光っていた。

「あ、あそこですかね？」

見た事のある色彩がちらつき、フィフィはアシュリーの前行こうとした。

が。

「ちょっと…何しているの。」

「え、何って、先に行つて見て来ようかと…」

がしつ、ヒアシュリーに腕を掴まれた。ついでに思いつきり睨まれている。

「君、サファイアでの話、聞いてなかつたの？」「サファイアでの…？」

言わされて思い返してみる。

(やういやフォンとなんか話してたっけ？それに帰り際に触るなんかなんとか…でもあれってアシュリー様がなんとかした後だよな？)

「うーん、と考え始めたフィフィを見つめ、がっくりと肩を落とした。

「……何も頭に残つてないのか……」

「まかして笑うと、睨まれた。

「“命が惜しくば、自然の摂理から外れているものに触れるな”って言ったんだ。君も、無闇に近づくんじゃない。」

その日は、とても静かで、深くて。

「……はい。」

あんまりにも神秘的で、見蕩れてしまつて。やつぱり耳に残らなかつた。

「……後ろについて。あれには触らないで。」

「はい。」

素直に頷いて、ちゃんと後ろへ回つた。

ハーケヴェルに辿り着いていた植物は異様な程増殖していた。完全に浜から上がり、花畠と化した植物の中に、浸食された民家が見えた。ちょっとした密林だ。

「……すごいですね……この辺りに住んでいた人は、非難したんだろうな……」

アシュリーは黙つてじつくりと植物を検分する。

（結構力が喰られてる…。確かにすごい有様だ。けど……何かおかしいな…）

ふと足下の幹を見て、息を呑んだ。

（……水を纏わりつかせてる…？）

植物の根元にたゆたう水は、液体である筈なのに砂に馴染まず、生き物のように揺らめきながら植物に纏わりついていた。

魔力を少しだけそこへ零してみる。と、途端に貪るようにアシュリーへ向かってきた。

（…？）

「アシュリー様！」

ぞわりと総毛立つような、這う様な感触が身体に絡んでくる。と同時に力を大量に吸われている感覚があり、ぐらりと目眩も感じた。

だが、それは一瞬だつた。どん、と衝撃を感じたかと思うと、不快な感覚は消え失せた。おまけに、何か温かい感触がアシュリーを包んでいた。

（なんだ…？）

状況が呑み込めず瞬きするアシュリーの耳に、ほつと息吐く音と、心配そうな声が聞こえた。

「…大丈夫ですか？アシュリー様。」

「…………」

聞き慣れた声に視線を動かすと、フィフィが心配そうに覗き込んでいた。

(いつの間に? それに、これは?)

状況を把握して、一気に驚きが増した。

「俺を助けたの?」

「は?」

助けた本人としては、そんな質問はあんまりだと思つ。今度はフィフィががつくりと肩を落とした。

「い」の状況でそれ言います? なんか、やばかったじゃないですか。

あの水に襲われた時に襲つた衝撃は、フィフィがアシュリーに激突する形でその場から退いたかららしい。その勢いに当然ついていけなかつたアシュリーは尻餅をつき、フィフィは抱えたままだったのでつられた。

状況をしつかり把握したアシュリーが慌てるより先に、フィフィが抱きしめた腕を解いた。

「まあ無事そうですね?」

そう確認の為に覗き込まれて、アシュリーは頷いた。そして、目を合わせずに言つ。

「助かつた。」

するとにんまり笑われた。

「それは褒め言葉ですよねえ。」

「褒めてない。」

調子づくフイフイにじつかり言い返して立ち上がる。

「君はなんともない？」

「はい。なんとも。あれはなんだつたんですか？」

フイフイは本当になんともないようで、密かに胸を撫で下ろす。そして、あの水を眺めた末、踵を返した。

「…宿で話す。」

思わずアシュリーを凝視してしまったフイフイだが、本人はさつさと師団の元へ戻りうとしていた。

その背を、まじまじと眺める。

（あ、アシュリー様が…面倒くさがりずに話すつて…話すつて言つた…！）

そして、思つ。

（うつかり“へ…？”って口に出せなくて良かつた…）

言つていれば間違いなく、じゃあいい。とか言われそうだ。

ゼルヌ陛下から、好きな宿へ泊まれるように計らわれていた為、一行は浜辺から少し離れたところで宿をとった。師団を含めて二十名程になる為、大きな宿となつた。

「入つて。話すから。」

着くなりそう言い、アシュリーは部屋へフイフイを招き入れた。そして、扉を背に立ち、すぐに詠唱する。

「？？汝、静寂を統べるもの。此の空間に響く音を固く封じ給え？」

突然の詠唱に驚いたものの、歌う様な、囁くような柔らかい聲音に聞き惚れてしまった。

（きれーな声……）

普段の仏頂面からは想像出来ない声音だ。なんて思つていると、アシュリーはわざと椅子に座つていた。

「今のは……？」

「この部屋の音が漏れないようにした。」

視線で来いと言つて、はーはー、と声を出ながら返事をする。

「あ、で…あれ、なんだつたんですか？」

側へ寄つて訊ねてみると、珍しく邪険にされなかつた。かわりに難しい顔をしており、僅かに怖いと感じる程だ。

（だけど…）

不覚にも、どきりとしまつた。

（いやいやいや。物珍しいだけだつて。）

そう呟いて一人で頷いた。

「今回の事だけど

「はいっ！？」

思いつきり考へ耽つていた為に飛び上がつてしまつた。

「…………なに？」

怪訝そうに首を傾げるアシュリーに笑つて「まかし、先を促す。

「いえ、何か分かつたんですか？」

「…………あの植物は海の加護を受けてる。それは間違いない。」

フイフイの様子を訝しみながらも話しがを続ける。

「海の加護…ですか？」

「そう。……君の為に説明しておくと、海の加護を受け付けていれば火を受け付けなくなる。魔力が高くなれば海の力も多少は操れるようになる。」

(すげえ……アシュリー様があたしの事気遣つたよー)

なんて感動している間にもアシュリーは淡々と話す。
「それと別に……触れたものの魔力を喰らつよつ、誰かが手を加えてる。」

(……アシュリー様に纏わりついてた、あれか)

「でもアシュリー様。フォンはある植物を触つてたんですね? だけどなんともなさそうでしたよ?」

「フォン?」

「誰だそれ、と訴えられる。しつかりと話し合つていたように見えたのだが……覚えていないのか。苦笑しつつも教えてあげた。

「サファイアの支配人ですよ。」

「ああ……。彼には魔力がないから無事だつたんだろう。君が俺を助けた時も少しばかれてた筈だ。だけど君も無事だろ?」

「……確かに。」

「……で、あれに手を加えた誰かが、何らかの目的の為に魔力を集めてると考えられる。」

「何らかの目的ですか。」

さっぱり分からないので首を傾げた。集めてどうするところだ
れい。

「…君には前に話したけど

アシュリーはさう前置きして続ける。

「魔力がある程度溜まると、そこから“何か”が生まれる。例で言
えば今回の嵐だ。」

さう言つて、じつと見つめられて。数回瞬いた後に気付いた。

「えー…じゃああれですか！？あの植物は嵐で運ばれて、そこで次
の嵐を生み出す魔力を蓄えてるんですか！？」

大きな声に顔をしかめるアシュリー。やべ、ヒュヒュは笑つて
ごまかした。

「あ、すいません。」

「君は騒がしい。無駄につるさい。…いい加減に学習して。」

（うわあ。いつもながらの棘…）

「びっくりしたもん。」

氣をつけます、とは言わなかつた。何故ならつるさがつてているの
は今の所アシュリー一人。他に誰かから苦情が来たら氣をつけよう、
とこゝそり決める。

「で、じゃあやつぱりその、手を加えた奴ってのはフェルウェイル国にいるって事ですかね？」

「…………」

アシュリーが黙つた。

「…………違うんですか？」

フィフィは瞬く。

「最初はそう思つた。確かにフェルウェイルで発生してるし、手を加えられたのもそこだと思う。だけど、フェルウェイルの人間がそれをやつたかどうかは分からぬいだろ？」

言われて少し考える。確かに、人は移動する。国を移動する事だつてあるわけだ。

「けどじゃあ、なんの為に？わざわざフェルウェイルに出向いてこんな事して、それでまた元の居場所に戻つたわけですよね？違う国の人間だとしたら。」

「…………」

再びアシュリーは考え込んでしまつた。側でその様子を見ながら、フィフィは首を捻る。

（嵐での植物を増やしてつて、一体何になるんだ？大陸全土に広がつたとして…今からでもおそよ三年はかかる。確かにやつかいな

植物ではあるけど…まさか世を憐んだ誰かが道連れに？？つてレベルでもないよな。それなら毒でもバラまいた方がさくっと出来るもんな。）

フィフィは早々に考えるのを放棄してアシュリーを見やる。と、アシュリーがぽつりと呟いた。

「……嫌な予感がする。」

（……嫌な予感？）

首を傾げるフィフィはすでに眼中になじみで、アシュリーは窓へ視線をやつた。

（クライストを離れて良かつたんだろうか…。）そのままフルウェイルへ向かつても…？）

ざわざわと身の内が騒ぐ。

（不安材料には警戒すべきだ。）

そう判断して、再び詠唱した。

「？？汝は我が僕。風に住まう者。我が意思、彼の者へ届け給え。汝に降る災いは、我が光が裁きを下す？？」

ふわり、とアシュリーの差し出した手に鳥が舞い降りた。

「鳥……？」

またもいきなり詠唱し出したアシュリーを眺めていたのだが、鳥の出現にはさすがに度肝を抜かれた。

「違う。精霊だ。」

冷静に言われて苦笑する。そりやあただの鳥でない事くらい、フィフィにだって分かる。

「二ルに用心するよつ、伝える。」

「用心……ですか？」

訊ねるフィフィには田もくれず、アシュリーは窓を開けて鳥を外へ送り出した。そして、窓を閉めてフィフィへ向き直る。

「「」の話は「」で終わり。もう寝るから、出でつて。」「え？」

（アシュリー様が嫌な予感するつて事しか分かつてないけど？）

言葉を呑み込んで、フィフィはしぶしぶ頷いた。

「分かりました……おやすみなさい。」

ぐるりと踵を返し、さつやと部屋を出た。

だから気付かなかつた。

おやすみと言われたアシュリーが驚いていたなんて。

今夜の宿の部屋へ行き、外套を脱いで寝台へ放り投げた。そのまま腰掛けて、ぼんやり窓の外を眺める。

（なんか、難しいなあ…）

主人のアシュリーもさることながら、クライストを取り巻く状況もややこしい。フィフィには縁のなかつた世界だ。

正直、面倒くさい。

（けど、アシュリー様があれだけ考へてるんだもんな。）

自分は考へるのも策を練るのも苦手だ。手伝える事はほんの僅かだろう。もしかしたら無いのかも知れない。

「まあ、やれる事つて言つたら、やつぱり警護くらいかな。」

小さく呟いて苦笑する。

（城に戻つたらちょっとは魔術について勉強するか。）

そう考へて、灯されていた蠅燭を吹き消した。

闇が辺りを包み込み、宿の宿泊客も皆眠りを貪っている頃。

月明かりが僅かな窓掛け^{カーテン}の隙間から室内に入り込む。その光の先には、ぐつすりと眠る姿が見えた。

音も無く窓掛けが揺れた。

じつくりと時間をかけて窓が開かれる。人一人通れる程に開くと、するりと男が忍び込んだ。窓を開けたのとは対照的に素早く寝台へ近づくと、そのままの勢いで腕を振りかぶり、一気に振り下ろした。

「させらか！」

「！？」

ガキンッ！と刃がぶつかった。男は即座に飛び退いて乱入者を確認する。

寝台に寝そべる人物を跨ぐように立ち、短剣をこちらへ向けて威嚇しているのは小柄な人物だった。月明かりを受けた瞳が爛々とこちらを狙っている。一体どこに潜んでいたのか。全く気配を感じさせなかつた。

「何？？」

狙われた人物はようやく目が覚めたようだ。男はさつと身を翻し

て窓から飛び出した。

「サージェスー！下ー！」

叫び声はしたものの、幸い、対峙した人物は追つて来ないようだつた。

ひやりと空気が冷えた気がして、意識が戻った。しかし瞼が重かつたためにそのまま放つておいたら、いきなり寝台が大きく沈んで真上で叫ばれた。

「させらるかー！」

と。

かなり聞き慣れた声だ。といふ事は、さつき寝台が沈んだのはフイフイが乗ったからか。そう言えども金属音が聞こえたような。一体なんだ。何がどうなつてフイフイが部屋にいる。そして寝台に乗っている。

「何…？」

不機嫌も露に瞼を開けると、フイフイが短剣を持って自分の上に跨ぐように「仁王立ちしているのが見えた。その目が鋭く光っている。

「一体、何…？」

身体を起こして、寝台の方へ移動してフイフイの下から抜け

出す。

かたん、と窓から音がした。

「サージェス！下！」

再び怒鳴り声が降つて来る。音がした窓を振り向くと、何故か窓が開いていた。

「……？」

（何これ。どういう状況？）

アシュリーは瞬いた。

「大丈夫ですか？アシュリー様。」

相手が去つたのを確認して、フィフィはすぐに窓を閉めてアシュリーを伺つた。とうのアシュリーはまだ眠そうだ。ぐさりとやられそうになつたというのに、呑気なものだ。思わず頬が緩む。

「無事みたいですね。」

「……で、一体何事？鍵かけてあつたと思つけど？」

心底不思議そうに言われ、フィフィは得意そうに笑つた。

「アシュリー様。ギルド出身者を舐めちゃあいけませんよ？こんな

鍵、開けられるに決まつてゐるぢやないですかー。」

もの凄く得意そつた。満面の笑みが眩しい程に。

(…………セレは血漫する所じやないだろ。)

眠氣も手伝つてか、普段ならすぐに切る所を心の中で留めた。代わりに溜息が出た。

「で? 何してるの?」

「呑氣ですね……。たつた今殺されそつでしたよ?」

「…………! ?」

皿を丸くしてフイフイを見つめた。

(アシュリー様……危機感なき過ぎじやねえ?)

先が思いやられる。と思つた矢先、アシュリーは表情を一変させて窓を睨んだ。

「…………どうしたんですか?」

(今更あいつに怒りが湧いた、とか?)

なんて思つて首を捻つてると、アシュリーが声を絞り出した。

「…………この部屋には術がかけてあつた。」

「へ?」

「君と、サージェス達しか入れないよ!」

「え、でも……」

あの男は入ってきた。といつ事は。

「誰かが術を解いたんだ。」

「さあ、気付かないもんなんですか？それって……」

途端にアシュリーに睨まれた。

「俺を誰だと思っているの？」「

（うわあー！俺様な台詞ー！）

「…………こんな事出来るのは一人しか思い当たらない。」

「え。思い当たるんですか。」

あいつ分かってしまって、ちょっと拍子抜けだ。するとまた呆
れ顔をされる。

「分からぬい？」

「分かりませんよ。大体そいつがそんなにすこいつてんなら、そい
つがここへ来て狙えば良いじゃないですか。なんでそいつはあの男
にやらせたんですか？……まさかあの男が術を解いたなんて言こませ
んよね？」

「…………君つて、馬鹿？」

（うああー！殴つてえー！）

ぐつと拳を握りしめたのにアシュリーが気付き、慌てて寝台の上
を移動する。

「ちよ、ちよっと、まさか殴る気?」

「うつすらと笑つてにじり寄る。

「どうかなあ…? 馬鹿にされたままつて事がないんで、手が動いちやいそなんですよねえ…」

「……！」

真つ青になつたアシュリーを見て、楽しそうにフィフィは笑う。

「ねえ、アシュリー様。誰に術解かれたんですか?」

教えるよな?といつ威圧をかけて軽く首を傾げた。

「……………ウオ、ウォルスだ!」

拳を警戒しながらも、睨みだけは利かせてアシュリーが叫んだ。

「ウォルス?」

「だから、ウォルス=イセリア=ダイン! 分かつたら離れて!」

(……)

「魔人か!」

フィフィは拳を解いて一步離れた。それをしつかり確認してから、アシュリーはほっと息を吐いて元の場所へ戻る。

「……くそ……暴力主義者め……」

ぼそりと零れた悪態は、しつかりフィフィの耳に届いていた。

「なんですかー？アシュリー様？」

「別に……それよりもう寝かせてくれる…」

もはやさつき怯えただけで体力を使い果たしたようだ。ぐつたりしながらそう言われて、フィフィはほくそ笑んだ。

「まだウォルスが術を解いた理由を聞いていませんよ。」

アシュリーはしばしフィフィを睨んだ後、根負けして盛大な溜息を吐いた。

「…………座れば……」

「ありがとうございます。」

にっこり笑つてフィフィは椅子を引き寄せた。

「……ギルドでウォルスの噂は聞かなかつたの…」

堂々と寝台で横になりながら、ついでに目を閉じながらそう話し進めるアシュリーは、どうやら憔悴して嫌がる事すら止めたようだ。

（体力も忍耐力もないって…ますますこの人が有事に役立つか心配だよな。）

なんて思いながらもフィフィは答えた。

「ギルドでは特にないですよ。男だと、もの凄い魔力だと、実は神とか精靈の子なんだとか。神出鬼没ででかい事には力は貸さないで、どうでもいいような小さい事しか手を貸さないんだとか?」

(結構あるじゃないか……)

思いつつも疲れていたので突っ込まずにおいた。突っ込んだらうるさいに決まっている。

「けど回復役としてウォルスと組んだ事あるやつは、やつぱりどんでもない魔術師だつて言つてましたけどね。」

「もういい……」

アシュリーは溜息を吐いた。

「噂にあるよ、アーティアには“ちょっとした手伝い”をよくしてる。今回もそれだ。」

「今回も……アシュリー様の術を解くのが?」

「そう。」

「でも……それをやるんだつたらついでに他の奴は眠らせる、とかはしないんですか?もしくはやつてくれつて言われそうですが……」

「それはやらない。“ちょっと”手伝つだけだから。」

「……アシュリー様、ウォルスと仲良いんですか?」

「…………は?」

あまりに分かつたように言つるものだから、ついそんな事を訊いて

しまつた。が、アシュリーがとんでもなく嫌そうな顔をしているから、違うのだろう。

「違うんですね。」

「どうしたらそうなる訳?」

「よくご存知のようなので。」

- 1 -

ぐつと詰まつたところを見ると、よく知つてはいるらし。

「なんですか」とださなんてしまふ?」

「遡屈してゐるから」

「 まばたきの仕事 」 と い ふ 事 は 、 まばたきの仕事 は まばたきの仕事 で ある 。

卷之三

つまりは優秀過ぎて打ち込めるものがない、という感じだろうか。

「もはい？」

珍しくちょっと弱った聲音を出されて、なんだか胸がむずむずし

た

「…はい。分かりました。ありがとうございます。」

「まかすように立ち上がり、ペニツト一礼して踵を返す。しかし部屋の扉を開けて振り返った。

「じゃあアシュリー様、良い夢を。」

ぱたん、と扉が閉まる。

「…………」

（刺客に襲われた後に言つ事？）

と毒づきつつも、アシュリーは胸がもももやしてしばらへ扉を見つめていた。

「サー・ジエス、どうだつた？」

宿の一階に部屋をとつたサー・ジエス達を訊ねた。さすがは第一師団。起き抜けに侵入者を追つて全力で走つたにも関わらず、全員がしつかり目を醒ましていて、状況も把握しているようだ。

「闇に溶け込むように消えてしまいました。申し訳ござりません……」

「それは俺も一緒だ。追いかけなかつたしな。」

深々と頭を下げるサー・ジエスにそう言つて、僅かに緊張が解れたようだ。

「どうか俺つてサー・ジエスにこんな態度取つてもいいのか？」「もちろんです。アシュリー様の助手なのですから。」

即答されるとなんだか居心地が悪い。

「えつと、それで……」

事態の説明を求めるべく、小さく頷いて教えてくれた。

「どこの者かは分かりませんでしたが、アシュリー様と知つて狙つたのは確実でしょう。他にこの宿に要人はおりません。」

「アシュリー様の話じゃ、手伝つたのはウォルスらしいぞ。」

そういうとサージェスは渋い顔をした。

「さようですか…また厄介な…」

「…俺は今日は寝ないから、昼間は頼むな。」

「はい、畏まりました。ご無理なさいませんよ。」

「おう。サージェス達もな。」

笑つて別れようとすると、サージェスがもの言いたげにこちらを見ている。

「…どうした？」

「いえ…」

問われて苦笑する。

「フィニアース様は…護衛という職が板についていらっしゃる。」

「ああ…そりゃあ、伊達に賞金稼ぎやつてないからな。正直、助手より護衛の方が向いてるよ。」

「…なれば…何故この職へ志願されたのですか？」

他の団員を返しながら、サージェスは不思議そうにフィフィを見つめた。と、フィフィが苦笑する。

「…フォンが過保護だからや。」

「フォン、とは？」

「ほり、サファイアの支配人だよ。あいつがつるさんだ。金に困るならサファイアへくればいい。だから賞金稼ぎは止めりつて。だから、黙らせてやるつと思つてた。」

フイフィは言われた時を思い出したのか、不機嫌そうに虚空を睨む。

「別に金の為に賞金稼ぎやつてんじゃなかつたんだけどな…性に合つてゐつてだけで。でもサファイアなんて絶対性に合わないから、城の仕事ならこいつの仕事もあるかもつて思つて探したんだ。」

そう言つて明るく笑つので、つい厳しい口調になつてしまつた。

「しかしフイアース様。城へ仕える身では、命じられれば受け入れるしかあつません。その覚悟はおありなのですか？」

すると、フイフィは不敵に微笑んだ。その目は鋭く、爛々と輝く。

「アシユリー様の命令なら、聞いてやるつもつだ。」

それは、不敬だ。本来ならば国王陛下へ絶対の忠誠がなくてはならないのだから。

（だが…この人は強い。）

フイフィならばアシユリーを裏切らず、確實にその全てで護るだろと思われた。

「さよひですか…。ではこれからも、アシュリー様をお願い申し上げます。」

深々と頭を下げられて、フイフイは慌てて胸を張った。

「あ、ああー任せとけって。」

そうしてやんぐると部屋へ戻っていく。

その背を見送りながら、サーディエスは微笑んだ。あのアシュリーに、良い相手が付いたものだと。

翌朝、宿を出たところでセシリ亞が待ち構えていた。どうやら昨夜の騒ぎを聞きつけたらしい。宿の主人とわずかな客以外は眠つてから気付いていない筈だが、それを聞きつけるところはさすがハーグヴェルの皇従^{こうじゆう}と言えるだろう。クライストの動向には少しも目を逸らさない、ということころか。

探るようなセシリ亞に、アシュリーは淡々と答えた。

術を解いたのはウォルスだという事。フィフィとサージェス達が追い払つた事。宿の客にも、誰にも怪我ひとつなかつた事。

逆にアシュリーを狙う者に心当たりはないか、と聞いた所、ぴくりとセシリ亞の眉が動いた。心当たりがあるのか。それとも不当な疑いをかけられたと憤つたのか。それこそ溢れんばかりの怒気を目に宿し、アシュリーと、その真後ろで睨み返していたフィフィを睨みつけた。

「どうぞお気をつけて。」

と、かなり棒読みな言葉を送り、アシュリー一行の後ろ姿を睨みつけて送り出してくれた。

「アシュリー様…」

珍しくアシュリーにくつついて馬車に乗り込んだフィフィは、戸惑い気味にアシュリーに声をかけた。そして、それに対してアシュ

リーも珍しくファイフイに手を向いた。

「ハーケヴェルが差し向けたと思つてゐるんですか？」

すばりと聞いたファイフイに、アシュリーはすぐに視線を外した。

「……言つたと思つけど、西帝国はあまり仲が良いとは言えない。」

「あ、はい。」

「そしてクライストを落とす機会を狙つてゐる。」

「……はい。」

ファイフイはアシュリーを見つめていた。窓から光が差し込んで、アシュリーの深い群青色の瞳が透き通り、きらめいて見えた。それが綺麗で、思わず魅入ってしまう。

「となれば俺が今ここにいる状況は、良い機会だろ？ 加えてあの植物だ。」

「…………けど、あんなしょぼい奴差し向けるなんて甘過ぎませんか？」

見蕩れていて、慌てて言葉を返した。アシュリーは氣付いていいようだ。

（そりやそつか。人に興味ないもんな。。。）

「相手もそんなに馬鹿じやない。」この程度を調べたんだりつ。

（魔術と武術の程度か。。。あつちはウォルスが手伝つんなら、あとはあたしとサーチャス達の腕によるわけだ。）

相変わらずアシュリーの瞳を見つめていると、さすがにアシュリーが気付いてきょとっていた。

「なつ…何?」

近くでまじまじと見つめられるなんて事はないのだが。びびっている。

「いや…………田えきれいだなーって。言われません?」

「…………は?」

アシュリーは思いつきり怪訝そうにじらを見て、続いてぱりと突っ込んだ。

「眞面目に聞いてるんじゃなかつたわけ。」

「え? やだなあ聞いてましたよ? 小手調べだつたわけでしょ?」

あはは、と笑いながら言つと、怪訝そうにしながらも信じたようだ。

「あの植物と嵐を発生させたのがハーグヴェルだとは言こされない。けど、あの植物を利用する事は考えられる。」

クライストを護る大魔術師の一人が国を離れた。それでクライストの護りが崩れるわけではないが、大きな力が離れた事には変わりない。落とす機会としては、十分だ。

「だとしたらこれから先、クライストへ戻るまでの間に何度も襲撃があるか分からぬ。」

また窓の外を見ていたアシュリーは、つと視線をフイフイへ向けた。油断して、またアシュリーの手を見ていたから、どきりとした。

「君は護衛の仕事に専念して。サーディス達としつかり連携取れるよ。」

「……」

頷きそうになつて、フイフイは口を結んだ。

(頷けるかよ。)

ちよつと不機嫌になつたフイフイを見て、アシュリーは首を傾げる。

「どうかした?」

「……あの、アシュリー様。俺つて助手兼護衛ですよね?」

両足に両肘を乗せ、前屈みの姿勢でアシュリーを睨み上げる。

「……今更なに?」

「ちゃんと分かってくれてるんですね?」

少し考えてからアシュリーは頷いた。

「うん。」

「その間はなんなんですか。」

さらに不機嫌に睨みつけられ、ちよつと焦る。取りあえずフイフイの両手が握られていないのを確認した。

「だから、何。」

「俺は貴方の為にいるんですよ?」

言われた台詞がさらっと心を撫でて、もう一度頭の中で反芻する。

「俺は軍人じゃない。サージェス達と一緒にしないで下さい。俺は國の為には動かない。貴方の側にいるのが仕事です。貴方を護る事が。」

「……なに……」

真つ直ぐに睨みつけられて、ぞわりとした。

強く、強く、光を受けて瞳の奥が輝く。

琥珀の色が射抜く。

「ござりとう時、サージェス達は捨て置いていいトルキにも言されました。やうじやなくとも俺は貴方の側にいる事を優先します。」

「ぐぐり、と我知らず息を呑む。もはや言葉が出なかつた。

「だからアシュリー様。ここから先は何を言われようと、絶対に離れませんから。」

言われたまま、アシュリーは動けなかつた。言葉が出て来ないし、身体も動かない。

フィフィはそんなアシュリーをじばらぐ睨むと、すつと立ち上がり、馬車を出て行つた。

途端に身体が動いて、思わず溜息を吐く。

(……何……)

おかしい。フィフィに警戒するよう促しただけなのに。何故自分が圧倒されているんだろう。

（やつぱり、変だ……）

それがフィフィの事なのか、自分の事なのか。思いがぐちゃぐちになつて自分でもよく分からなくなつていた。

クライスト城？？ニルヴァーナの回廊。

田の当たる半屋内の廊下でひなたぼっこをしていると、風の精霊が飛んでくるのが見えた。コンファはあつと声を上げて立ち上がった。両手を差し伸べて導く。

迷わず小さなコンファの手にふわりと降り立ち、精霊は形を変えた。鳥の姿から、光り風を纏う精石に。それをそつと両手で包み込んで、コンファは回廊の屋内へ続く扉を開けた。

造りはアシュリーの回廊と左右対称になつており、やはりニルの自室は地下にある。が、そこへ行くには絵画の婦人に導いて貰わなければならぬのだ。

「“しるべ”よ。主の元へしもべをいざなえ」

幼い声に促され、婦人は手を差し伸べる。とは言つても絵画の中

で手を動かすだけで、その手が現実に触れる事はない。その絵画の婦人の指先に触れようとすると、ニルの部屋へと導かれるのだ。

「ニル様！アス様から伝言ですよ！」

机に向かつて書類を片付けている主へ走り寄ると、立ち上がりて抱きしめてくれた。

「ありがとう、ウン。……あら、光の加護を付けたのね。何か分かつたみたい。」

「あのお花ですか？」

「ええ。」

そつとウンファの髪を撫でながら、ニルは椅子に座つて、精石に封じられていた魔力を解き放つ。すると精石から水平に陣が広がり、光と風がニルを包み込んだ。目を閉じて、集中する。

と、アシュリーの声が聞こえた。ニルの側にいたウンファも陣に包み込まれ、ウンファにも声が聞こえる。初めて体験する伝言の魔術に驚いた。

『??ニル。あの植物は魔力を溜めて、新たな嵐を生み出すように仕組来るなら書術を施して食い止めておいて。

ついでに喰らつた魔力を溜めて、新たな嵐を生み出すように仕組まれてる。すぐに嵐が向かう先の国へ警告して。

周りには常に注意して。多分ハーケヴェルはこの機会に何かしらすると思うけど、今回の件とは別かも知れないし、策の一つかも知れない。俺はこのままフェルウェイルへ行つて片付ける。

……君が暴走しない事を祈る』

声が消えると同時に精石が輝きを失った。風も光も止み、コンフアは息を吐いた。

(すいじ…声が頭にひびいてた…)

見上げると、ニールが苦笑していた。

「…好き勝手言つわね…」

「…ニール様?」

心配そうに見上げるコンフアの髪を撫で、ニールは立ち上がった。ぐずぐずしてはいられない。

「出かけます。コン、手伝つてね。」

「はいっ!」

元気よく答えたコンフアに微笑みかけ、回廊を出る為、歩き出す。前を向いてコンフアから顔が見えないようになると、ニールは虚空を睨みつけた。

(触れると魔力を喰われるのに、書術を施せですって?あの馬鹿、無茶しか言わないのね…)

帰つてきたら苛めてやつと、にせつと笑つたのだった。

回廊を出て、国内専用の転移魔術陣のある部屋へと歩いていくと、その部屋の前に見知った姿を見つけた。

「あら、ルキ様。どうされました？」

ルキセオードは声をかけられて微笑した。そして、軽く礼をする。

「護衛をするよう言われましたので。お供致します。」

「そう…ではお願ひします。」

従騎であるルキセオードが供をしてくれるのなら、万が一魔力を喰われ過ぎて倒れても安心というものだ。コンファでは運べないから、天魔を呼ぶ事になつただろう。

（…兵器だと言いながらも、陛下もコンファの事を案じてくれるようになつたのね…）

振り返るとコンファが真っ直ぐに見つめ返してくれる。コンファに領いて、ニルは転移陣へと足を踏み入れた。

「ルキ様も陣の中へお入りください。」

「はい、では。」

陣はそうそう大きくはない。三人も入ればいっぱいだ。

「では、移動します。」

？？汝は“移ろい”。我是ニル、ヴァーナ＝ハ、ディエス。誓約に従い、その力を示せ？？

言い終わると同時に光と闇の粒子が三人を呑み込んでいく。圧力を感じた次には一気に解放され、目を開けるとそこはもう、辺り一面に花が咲き乱れていた。

「これは……」

見渡して、ルキセオードは啞然とした。サファイアの浜辺を侵していた植物は、今やサファイア自体に侵入しつつあった。

「……コソ、分かる?」

植物が水を纏い、アシュリーが張った結界の中で、精霊達を喰らおうとあがき、精霊達が逃げ惑っている。コンファはじつと結界を見つめたあと、小さく頷いた。

「……見えます。」

逃げ惑う精霊が苦しげに喘いでいる。その声はか細く、まるで風を切る様な小さな声だ。

二ルはゆつくりと植物へと足を進めた。アシュリーが結界を張つていなければ、今頃サファイアは呑み込まれ、町にまで到達していたかも知れない。

「一体、何が起こっているのですか?」

ルキセオードは状況が読めず、控えているコンファにそう問うた。コンファは、二ルを見つめたまま答える。

「二郎のお花は、せいれい達を食べてしまつんですね。」

「精靈を…食べる?」

魔術の扱いすら知らないルキセオードには、不可解な言葉に聞こえた。目に見えないものを食べるというのが、よく分からない。

「えつと…人間で言えれば…血を抜かれていくような感じです。」「血を…」

眩ぐルキセオードに、ゴンファは頷いた。

「でもせいいれいに血はありませんから、血を抜かれたぶんだけ、消えていしまつます。」

もう姿がよく分からぬほど、存在が消失しつつある精靈も見える。アシュリーが原因を突き止めて解決するまで、保たないだろう。

「ルキ様。」

結界の際まで近づいた二郎が振り返った。静かにこぢりらを見つめ、強く言葉を発する。

「私が倒れたら、お願ひします。」

「二郎様…」

ゴンファでは倒れた二郎を運べない。運ぶとするなら天魔を喚ばなければならぬ。そつさせたくないから、二郎はルキセオードに頼んだのだ。

「お任せください。」

力強くルキセオードが頷くと、ニルはコンファに笑いかけた。

「コン。アシュリーの魔術を助けてくれる?」

頼られて、コンファは、しつかりと頷いた。

「はい! “停止”と“しゃだん”ですね!」

「そうよ。頼んだわね。」

力の入るコンファを愛おしげに眺め、ニルは呼吸を一つして、植物へ触れる。

触れた途端、その指先から力を持つ水が這い上り、ニルの魔力をまさぐり、貪つた。

すみませんが大変忙しくなつてまゝいつまして、滞つております。

大分遅い投稿になりますが、どうかお付き合いく下さい！

今までのお話で「感想を頂けると励みになります！」

（つ…！無理矢理、血を抜かれているみたい…！）

遠くなりそうな意識を必死に留め、指先に意識を集中させて幹に文字を刻む。ニルがなぞると、そこに文字が刻まれた。

特に道具を使って削るわけではなく、ただ、魔力を込めてなぞるだけで、そこに術を刻める。それが書術だ。ニルはその技術が格別に高い。それ故に、若くして大魔術師として迎えられたのだ。

（…《構成を歪め…あるべき形を崩せ》…）

植物を作り出す力が正常に働かないよう、存在が安定しないように書き記す。

（…《魔力の流れを戒めの風へ》…）

溜め込んでいた魔力が、アシュリーの術の助けになるように、これも書いていく。そうすると少しだけ、ニルの身体を弄る動きが弱つたように感じた。だが、依然として魔力が抜けていく事は止められない。

（…貪欲な術ね…。私は結構魔力が多い方なのに…）

目の前がくらくらする。頭を振つて耐える。きつく目を閉じて、
気合いを入れて開けた。

(…『連なる全てはこれに従う』…)

フェルウェイルから広がったであろう全ての植物に、同じ効力を發揮するように刻み込む。指先が震えた。視界がぼやける。

最後の人文字を書き終えると、ニールは意識を失った。

「？？ニール様っ！！」

ニールが倒れたのを見て、コンファアが駆け出そうとした。

「いけません！」

とつさにルキセオードがその腕を引っ掴んで止めた。

「はなしてください！ニール様が！」

倒れた途端に力ある水がニールを覆った。蠢く様は、本当に生き物であるかのように見える。

「コンファア様、私が行きます。貴女があのようになれば、悲しむのはニール様ですよ。」

「つ……！」

諭されて、呆然とニールを見つめるコンファアの背をぼんと叩き、ルキセオードはすぐさまニールの元に駆け寄り、抱えて結界から飛び出した。水は粘度があり、ニールを逃がすものかと絡み付いてくるよう

だつたが、結界を出てしまえばただの水と化した。

「ニル様！ニル様、しつかりしてくださいー。」

全身ずぶ濡れとなつたニルに縋りついて、ゴンファは今にも泣きそうになりながら必死に声をかけた。

「…ゴンファ様、大丈夫ですよ。氣を失つていいだけです。」

ルキセオードの落ち着いた、柔らかな声音が耳に届いて、ゴンファはただ無言でニルを見つめた。小さく、呼吸をしている。

「…よかつた…」

心の底から安堵して、ゴンファは幸せそうにニルを抱きしめた。

（……このお一人は……お互いがとても大切なのだな…）

ニルのゴンファに向ける、切ないくらいの愛情や、ゴンファがニルに向ける、怖いくらいの依存心。見ていると、こちらの心がかき乱される程の

しがみつくゴンファを宥め、ルキセオードは立ち上がった。

「さあ、このままにはしておけません。戻りましょう。乾いたものに着替え、ゆっくり休ませて差し上げなければ。」

「……あ…はい。」

不安気に揺れる瞳は、おどおどしながらニルとルキセオードを見た。そして、しつかり頷いて、ゴンファは城へ帰還するための陣

を創り出した。自分と、ニールを抱えたルキセオードが陣に入っているのを確認すると、主に習つて歌うように詠唱する。

「？？汝は“移ろい”。われはユンファ ソルシア＝ミット。主ニール
ヴァーナ＝ハティエスのゆるしをもつて、わが支配を受け入れよ。
せいやすく従い、その力を示せ？？」

幼い声が精靈を喚び、縛り、使役する。そんなユンファは、やはり唯の子供にはなり得ないのだと、ルキセオードは悲しくも思い知つた。

ニールを抱きかかえて陣のある部屋からニールの回廊へ移動する。ユンファはその先を行つて回廊を開き、途中出会つた女官にニールの着替えを頼んだ。

女官はニールとルキセオードを見てきょととしていたが、すぐに走つて行つてくれた。

ルキセオードはニールの執務室へ入ると、一先ず厚手の布でニールを覆つた。椅子へもたれさせ、女官が来るのを待つ。

「あの……ルキ様……」

ユンファがニールの側で膝立ちになりながら、顔をルキセオードへ向けて、落ち込んだ様子で声をかけた。

「……ありがとうございました……」

その様子を見て、ルキセオードは胸が詰まった。主が倒れた時、思つままに助けられなかつた事が悔しくて、ふがいなさを感じているのだろう。あの時ばかりは、コンファは子供なのだと意識せざるを得ない。

「…そりゃ自分を責めないで下さい。」

「え……？」

どうして自分の気持ちが分かつたのか、不思議そうにルキセオードを見つめる。見つめ返す瞳は、心が解れる程に温かかった。

「こればかりは仕方ありません。例えコンファ様が成人されていても、体格がありますから…やはり、男手が必要だつたでしょう。」

言られて初めて、ああそうか、と思い至つた。確かにそうだ。今は子供だからと嘆いても、結局大人になつても二ルをここまで運べたか分からぬ。

「そり…か……そうですね…」

なんだか畠然としてしまつたコンファを見て、思わず笑つてしまふ。

「そりですよ。」

そう返したところ、回廊に訪問者ありと知らせが入つた。

「ああ、先程の女官でしょう。それでは私は…これにて失礼致します。」

「はい。ありがとうございました、ルキ様。」

幾分明るくなつた顔を見て、ルキセオードはまつと胸を撫で下ろしたのだった。

ハーグヴェル帝国からラナス国へと移動する前夜。フイフイは宿の部屋で、窓を開けて夜空を眺めていた。たくさんの星が瞬いて、優しい光が降り注いでいるようで、ほつと落ち着く。

出窓に肘をついて眺めていると、隣の窓が開いて、アシュリーが夜空の遠くを見ていた。

「アシュリー様。」

声をかけると、ちよつと驚いて身を引いた。

「…何してるんですか？」

「…別に。」

二人ともそつと言つたきり、夜空を眺め続けた。

ぱさり、と夜空の向こうから羽音が聞こえた。するとウイスペルが耳飾りから飛び出して、アシュリーの前でふわり、ふわりと飛び始めた。

「…何してるんですか？」

もう一度そう聞くと、ちらりと目線だけ向けられた。

「…帰つて來た。」

「帰つて？」

何か送り出しただらうかと首を捻ると、羽音が近づいてきて、姿が見えてきた。

（あ……）

アシュリーがニールへ送った精靈だ。仄かに光を纏っているのが分かつた。

「ニール様からですね。」

アシュリーはそれにほ答へず、さつと鳥と共に部屋の中へ引っこもうとした。

「あ、待つて下さい。今そつち行きますから。」

「は？」

不可解そうにあるアシュリーにやつと笑いかけ、フィフィは出窓に足を置いた。

「えつ？」

驚くアシュリーに田もくれず、フィフィは軽く勢いをつけて窓を飛ぶ。

「よつ、と。」

一瞬後にはアシュリーの部屋の出窓へ足をつけて、するつと部屋入り込んだ。さて、と振り返つてみると、アシュリーが大きな溜息を吐いていた。

「なんですか？」

「なんで回つて来ないの？」

「だつて飛んだ方が早いじゃないですか。」

「……君は、やっぱり変。」

（変つて……）

思つたものの、へそを曲げられてニルからの報告を聞けなくなつたら嫌だ。ここは黙つておいた。

アシュリーが椅子に座ると、フイフイも近くの椅子を引き寄せて腰を降ろす。特にフイフイがちゃんと座るまでは待たず、アシュリーは精霊の魔力を解き放つた。

すると精霊は精石へと姿を変えながら、陣が水平に広がり、光と風が一人を包み込む。目を閉じて、集中すると、ニルの声が響いた。

『？？無茶な事言つてくれたわね。戻つてきたら……覚えてなさいよ

！』

一言田から怒つてゐる。ちらつとアシュリーに田をやると、田が思いつきり泳いでいた。

（なに無茶言つたんだろ……）

ちよつと笑つてしまつ。

『植物の“生長の阻害”と“全体への伝達”は上手くいつたわ。

溜め込んだ魔力は貴方の“遮断”へ流した。“停止”は上手くいかないみたいね。海の精靈が力を貸しているみたい。

それから、他国への警告は陛下が。すでに噂は回っていたよう、で、思つたよりすんなり頷いたそう。

あとはハーグヴェルね。こちらは今の所目立つた動きはないようだけど……あいつ（・・・）がこそこそ笑つているから、まあ、何か企んでるのは間違いないわ。用心しておく。

早く片をつけてくれないと、殿下が大暴れするわよ？？』

ニルからの云言は、それで終わつた。

溜息を吐くアシュリーに、フイフイは訊ねた。

「で、結局よく分からなかつたんですが、どういう事でしょ？？」
「……」

面倒くさそうに見やるアシュリーにひつ笑つてみると、と、案外素直に教えてくれた。

「あの植物はニルがなんとか広がらないようしてくれた。ただ、

海の加護が邪魔して“停止”の術がうまく働いてない。そのせいで魔力を喰らうのは完全に止められない。

「とりあえず今以上は浸食されないんですね。」

「そう。あとはハーケヴェルの状況だ。」

そこまで言つてアシュリーは少し逡巡しているようだった。

「どうかしました？あ、部屋に魔術かけなくていいんですか？」

「“静寂”ならかかるてる。そつじやなくて……」

僅かに視線を落として、アシュリーは言つた。

「本来なら俺が言つ事じやないけど、話しておぐ。」

「あ、はい。」

神妙な面持ちだ。自然と座り直した。

「……二ルの名前…ハティエスといつのは、闇の精靈を示す言葉だ。まあ、単純に言えばハティエスといつ一族は、闇の精靈に愛されてる。」

「あ、愛…？」

失笑だ。なんだその一族は。

「一族は生まれながらに闇の精靈に憑かれてる。だから、争い事や企みの気配がすると、闇の精靈が喜んでいるのが感じられる。二ルが言つてたのは、そういう事。」

「ああ…あいつていうのは、その精靈の事ですか。」

「そう。」

「で、やつぱ何か企んでるんですね。ハーケヴェルは。」

アシュリーは頷いた。その間に剣呑な光が灯る。その間に、魅入つてしまつた。

（アシュリー様が言つて、『クライストに仇為す』状況になりつつあるつて事か…）

これは自分の得意分野かも、と思つと嬉しくなつて、思わずにんまりと笑つた。

「…何がおかしいの？」

アシュリーが、いきなりにんまりし出したファイファイに怯えていた。それにせりて笑みを深めて、ファイファイは颯爽と立ち上がる。

「いえいえ、なんにもおかしくありませんよ~明日はよつやべりから出れるわけですし、張り切つて寝ます！」

「え? なんで張り切るのに寝られるの?」

アシュリーがまともに突つ込む中、ファイファイは笑顔でアシュリーの部屋を後にする。

（暴れると思つと、嬉しいな!）

スキップでもしそうな程つきしづきしながら、ファイファイはご機嫌で寝台へ潜り込んだ。

（早く出発したいなー…）

しかし、そこまで興奮して、寝られるわけがないのだった。

「……なんなの？」

朝、宿の前に集まって、開口一番にそう言われた。

「……」

アシュリーを始め、皆呆れた顔で見ている。

「気にしないで下さい。」

つまりは、眠れなかつた。それで、ひどい顔だ。

「… サージェス達の手を煩わせないよう」。

アシュリーにそう言われてむつとするが、自業自得なので仕方ない。

「はい。」

大人しく頷いて、ひょいと騎乗した。

進み出してすぐに、サージェスに気遣われた。

「大丈夫ですか？ フィニアス様…」

「大丈夫だよ。三日寝なくたつて賞金首捕まえられたんだから。」

そこは自身を持つて笑うと、少しほっとしたようにサージェスが笑つた。

「それでは護衛の方、よろしくお願ひ致します。」

「おひー。」

頼むと言われて、ちょっと氣合いが入った。

ハーグヴェル帝国を出ると、ラナス国へ入る。ラナス国はその半分が海へ面していて、植物の浸食がひどいと思われた。救出する事も考えないといけない、ニアシュリーが言っていた。

そこを抜けたとピスティル・オス共和国。王、というよりも、国民の代表といえる者が纏めている。帝国には及ばないが広い土地があり、落ち着きと活気があってなかなか人気がある。

そこを抜けたとイイエル国で、レシテに負けないくらい小さな国だが、こちらは荒くれ者が集まっているので有名だった。まあ国が小さいのでそう大した脅威にはならないし、第一荒くれ者が団結するわけもない。

が、国王はなかなかのもので、荒くれ者が暴れようものなら即座に出向いて叩き潰す。という行動力の持ち主だった。故に、以外にも安全な国だつたりする。

そこを越えたら、目指していたフェルウェイル国に着く。国王レイフィスにはすでに話しが通してある。当然、今までの調査報告は済ませていた。

「レイフイストてフェルウェイルの国王の事だつたんですね！」

今更だが、その事が分かつてすゞくスッキリした。そんなフィフィを見て、アシュリーは諦めて首を振った。

フィフィには何事も、一から説明しないといけないかも知れない。

「君つて賞金稼ぎだつたんだよね？他国には行かなかつたの？」

「そりやあ行つてますよ？けどその国の王が誰かなんて気にしませんよ。」

「……やつ。」

それもそろかも知れないな、とアシュリーは思つた。ただ狙つて相手を追いかけていくだけなのだ。そこには国同士の利害関係など意味がないのだろう。

「君つて面倒くさい。」

思わず零れた言葉にフィフィが食い付くかと思ひきや、なんだか笑われた。

「……」

笑う理由が聞くにも聞けず、馬車の窓越しに黙つて見ていると、フィフィがそれに気付いてこちらを見た。

「……いや、なんか…アシュリー様の嫌味に慣れました。」「は？」

「ちなみにアシュリー様も面倒くさいですよ。」

「はー?」

「……だけ言って、フィフィはさつさと前の方へ移動していった。

「…………どっちが嫌味だか。」

小さく溜息を吐いて。

その後自分が笑っているだなんて、気付きもしなかった。

ハーケヴェルの、あの重々しい雰囲気からやつと解放され、フィ
フィは国境を越えるなり大きく伸びをした。

「んーーー身体が軽くなつた気がする…」

馬上で伸びをする、という危険極まりない事を平気でやつてのけ、
ついでに感想まで呟くフィフィに、サージェスが苦笑した。

「あの雰囲気は独特ですかうね。師団員も慣れない者は、辟易して
おります。」

言われて後ろを振り返つてみると、何人かはつるぎりしたように
振り返つていた。これには苦笑した。重苦しくて敵わない。

「ヒツからはラナス国だな。」

確認すると、サージェスが前方を見据えて言つた。

「ええ。見通しが良いとは言えませんが、クライスト、ハーケヴェ
ル間の渓谷よりは良いでしょう。」

「…へ？」

なんだか嫌な物言いに、フィフィが前方へ目を向けると…。

「げ。」

子供がすっぽり隠れてしまつへりの臂丈の低木が、所狭しと育つていた。

「フィニアース様…思つのですが、ギルドの依頼で国を出る事もあつたのですよね？」

怪訝そうに訊ねられて、フィフィはなんとか笑い返した。

「……俺さ、いつもばか騒ぎする奴ばっかと組んでたから、途中の道つてあんま覚えてないんだよな。どこに何があるとか。」

「……それでは毎回大変でしたでしょ。」

「うん。けど、地形によつての戦い方は覚えてるから、そこは大丈夫だけだな。」

「そ、そつなのですか…」

そんな曖昧な情報で、よく今まで無事にこれたものだ。サーチェスにそんな風に思われているとはつゆ知りず、フィフィは上機嫌で馬の手綱を取つていた。

（道に迷つたりしないのだろうか…）

馬車の中で会話を聞いていたアシュリーも、同じように思つていた。

（けど…フィフィなら迷つてる事に気付かなさうだな。）

なんて、失礼な事を。

鬱蒼とした視界は腰辺りまでで、その上は見晴らしがとても良い。

しかしそれに油断は出来ない。ようするに見えない高さでかがんでいれば、いくらでも潜んでいられるのだ。

だが心配したような襲撃はなく、のどかな時間が過ぎ去って、日暮れ頃にはラナス国の大門をくぐった。

しかし、ここがおかしかった。

「誰もいない……？」

そう、本来なら門番がいる筈なのだ。これはびこの国でも同じ事。それなのに誰もいないとは。

「アシュリー様、ファニアス様。少々お待ち下さい。」

そう言って、師団員の何人かが門周辺を調べにいった。

そう待たずして戻ってきて、一様に首を傾げる。

「……一人もいません。兵だけでなく、街人も……」
「街人も？」

サービスにそう訊ねられ、師団員は一斉に頷いた。

（こりやあ、なんかあつたな……）

思わずフイフイの口元がにやりと笑みの形を取る。

「どうする?」「

「そうですね…近くに怪しい気配はありません。ともかく街まで進んでみでは如何かと。フニアース様はどう思われますか?」「

「俺も、賛成!」

頷いてから、フイフイは馬車を覗き込んだ。アシュリーと日が合う。

「いいですか?」「

「……いいけど…」「

歯切れが悪い。首を傾げるフイフイに、アシュリーは不機嫌そうに言った。

「何か、変。嫌な予感がする。」

「そりやあいるべき所に一人もいないのはおかしいですよ。何かあつたに決まっています。」

「分かってる。それだけじゃなくて…」

はあ、と大きな溜息を吐かれた。

「なんですか?」「

「…君、俺が大魔術師だつて、わかつてないの?」「…」「

つまり。目に見える状況ではなく、何か魔術絡みで怪しい動きを感じる、じ。

「分かつてますよ？」

「だから、その間はなに。」

えへへと笑うフイフイに、ぎろりと睨むアシュリー。そんな二人を遠巻きに見て、師団員達は、ちょっと不安になつた。

「……それでは参りましょつか。」

見兼ねたサージェスの一聲で、一団はラナス国の大好きな街へと足を踏み入れる。そうして、一団が門を通り過ぎた。

瞬間だった。

誰もがはつと感じる事が出来る程の魔力が動いた。

「！？」

振り返ると、門を境に、まるで空間を断ち切るように不可視の壁が広がつた。地面から空へと、虹色に色彩を変えて広がつていく。

肌が、ざわりと総毛立つた。それほどまでに大きな魔力が、この壁を瞬時に創り出したのだった。

「…………これ、は……」

唚然としたサージェスの声が空しく空気に消える。

「……境界壁だ。」

アシュリーが馬車からゆっくりと降り立った。

「境界壁？」

フィフィの問いには耳を貸さず、アシュリーはサージェスへ向いて言った。

「馬車は置いていく。」

「…畏まりました。」

「取りあえず人を捜す事にする。」

「はつ。」

サージェスがそう返事を返すと、師団が一斉に礼をとる。それを見やつてアシュリーは踵を返して歩き出した。置いていかれそうな雰囲気に、フィフィは慌てて後を追つた。

「アシュリー様！」

並んでそう声をかけると、アシュリーは視線すら動かさずに答えた。

「急がないとまずい。」

「えっと、なんで…」

「ラナス国よりハーケヴェル側へは道が断たれた。」

「断たれた？…って、事は戻れないんですか…？」

思わずアシュリーの前に出て道を塞いでしまった。アシュリーは呆れた視線を流してきたが、フィフィは気にならない。

「境界壁をどうにかしないと無理だ。」

「どうにか出来ないんですか？」

アシュリーはファイフイを押しのけて再び歩き始めた。その勢いにちよつと押されたものの、ファイフイはぴつたりついていく。

「考える。この境界壁はハーグヴェルの仕業だ。なら、狙いはクライストの陥落だ。」

「だったら！ すぐに戻つた方が？？」

「ハーグヴェルの魔力の源はあの植物だ！」

珍しく怒鳴つたアシュリーに、驚いて怯んでしまつた。

「源を断たなければ、クライスト・ビニウム植物に浸食された国全でがハーグヴェルに下る。」

「…………っ！」

アシュリーは苛立つていた。すぐにでも戻つて護りたいのと、すぐ根元へ辿り着いて植物を消滅させたいのと、二つの衝動に駆られて、葛藤しているのだ。

それが分かつて、ファイフイは考えを巡らせて、今一度アシュリーに声をかけた。

「……サーチョス達だけ送り出す事は出来ませんか？」

先程とは聲音が違う。それに気付いて、アシュリーがファイフイと目を合わせた。しばらく見つめ合つて、アシュリーが頷く。

「…出来ると思う。けど、人を捜すのが先だ。」

どうして人を捜す事が優先されるのか、フイフイには分からぬ。だが。

「はい、分かりました。」

言われた言葉に即座に頷ける程に、アシュリーを信頼していた。アシュリーの言葉は、信じられる。絶対になんとかしてくれる。

そう、思えるのだ。

門から十分程行くと街があつた。がらんとしていて、人の気配が感じられない。

試しに家々を訊ねて回つてみるが、人づ子一人見当たらなかつた。

「アシュリー様……」

フイフイが見つめる先には、見覚えのある色彩が見えた。あの、花だ。花には風が纏わりついており、アシュリーとニールの術が作用しているのが確認出来た。

「……ラナス国は半分が海に面してる。……そのせいだろ?」

ハーグヴェルからの門は、ちょうど海側、陸側の間にあった。その延長線にあるこの街までも、すでに浸食されていたのだ。

「……これより海側へ行つても誰もいないだろ。陸側を探す。」「はい。」

アシュリーを筆頭に、一団はピステイル・オス共和国への道沿いにある、ラナス国の中へと足を進めた。

これだけ浸食されているのだ。危機感を覚えた国民が城へ逃げ込んだり、他国へ逃れようとしている筈だ。そして王も。並の魔術師ではあの植物を食い止めるどころか、魔力を喰られて使い物にならなくなってしまうだらう。

「アシュリー様！ 前方に城が見えます。」

城を見据えたアシュリーを見て、フィフィが一步先へ踏み出した。

「俺、先に偵察に行つてきます。」「は？」「

田を丸くしたアシュリーに、フィフィはにんまり笑つてみせた。

「俺は貴方の護衛つてだけじゃないんですよ。助手でもあるんですから。」「ちょっと……」

引き止める間もなくフィフィは走り去つて行く。思わず手が伸びてフィフィを掴もうとしていたが、まあ、届く筈もない。そんなアシュリーを見兼ねたサージェスが、後ろから控えめに声をかけた。

「…我々師団を信頼して下さっているのでしょうか。」

意外そうに振り返るアシュリーに苦笑して、サージェスは師団員一人を先へやつた。

「……犬みたいだ…」

紐でもつけておきたい、とアシュリーは切実に思った。

（だいたい助手の仕事じゃないだら…）

はあ、と溜息を吐く。面倒を起さなければ放つておきたい。フイフイは、色々と騒がしいのだ。

態度は軽々しいものの、隠密よろしく、静かに走り行くフイフイの後ろに、師団員一人が追い縋る。

「お供致します、ルセ様！」

そんな一人をぎょっとしながらフイフイは振り返った。

「な、なに…？」

「ですから、お供致しますと…」

「そんな畏まつた態度とらなくて…」

慌てたファイフイに、一人も慌てる。

「そういう訳には参りません！」

「そうですよ、ルセ様！アシュリー様の側仕えなのですから…」

「や・め・ろ！せめて俺らしかいない時は！」

「…」

「…」

二人はかなり困った様子で顔を見合せた。

「しかし…」

「じゃあ畏まつたら罰な。」

「ええつ！」

仰天した二人を見て、面白くて笑ってしまった。

城は、クライストやハーケヴェルと比べるのが間違いの様な氣もするが、とても小さかった。砦のようにも見える。しかしこれが小国の城なのだと、師団員二人に教わった。

「……なんか、静かだな…」

見上げる城は、寒々しい空の色と相まって、生き物を拒んでいるかのような雰囲気があった。

「よし。入る。」

「お待ちを！」

一步踏み出したところで一人に肩を掴まれた。

「なんだよ。」

「もう少し危機感は持てませんか？」

呆れた様子で言われ、ファイフイは不満げに口を尖らす。

「元賞金稼ぎが、命を落とす様な真似するわけないだろ？」

「今は違いますから。」

苦笑された。ぱしりと肩を掴まれた手を叩き落として睨みつけた。

「なめんなよ。お前らもサーディースの部下なら、びくびくすんなよ。行くぞ。」

「「あつ…」「

城の門扉をくぐつてすたすた進むファイフイの後ろに、一人は仕方なしにくつついて行くしかなかつた。

（アシユリー様と似たり寄つたりの自分中心っぷりだな…）

呴いた一人の背後で、殺意が揺らめいた。

「「…?」「

振り返りざま、剣を引き抜いて振りかぶつた。間一髪で避けた暗殺者は、一人の追撃を受けてあっけなく命を落とした。

「なんだ！？」

先へ行つたフイフイが矢をつがえて門扉の外に狙いをつけていた。一人目を始末した師団一人の後ろには、どこに隠れていたのか、ぞくぞくと殺意をみなぎらせた奴らが来る。

「刺客ですね。」

「落ち着いてんな…」

飄々と言つてのけた師団員に乾いた笑いが浮かぶ。引き絞つた手を離すと、フイフイの矢は真つ直ぐに迫つていた刺客へ飛んでいく。

「俺は上へ行つて人を捜す。あんた達は…」

「ヴィーグです。」

「は？」

「俺はジルキスです。」

「は？」

二人はにやりと笑つてフイフイを見やつた。

「俺たちは貴方の応援に來たわけですから、お供しますよ。」

「いやでも」

「アシュリー様は大丈夫です。サージェス師団長がいらっしゃいますからね。」

「…………」

ぽかんとするフイフイが可笑しかつたのか、大勢の刺客が迫つてゐるにも関わらず、二人は楽しそうに笑い出した。それを見て、フイフイも思わず口が笑みの形を取る。

「……じゃあやつをと行へやー！」

「そりゃなくわやー！」

「行きますかー！」

駆け出したフィフィを追つて、ヴィーグとジルキスも走り出した。その三人を追いかけてるのは、無数の殺氣。上まで上り詰めてしまつたからどうなるかなんて、今は考えない事にした。

必ず、アシュリー様が辺り着く筈だ。

「アシュリー様、あれを。」

険しくなつたサージェスの聲音に、アシュリーは眉をひそめた。

「……愚かだな…ゼルヌ陛下は…」

アシュリー達を滅ぼす為なら、ラナス国など取るに足らないといふ事か。はたまた周辺国から非難されようとも、それを潰すだけの何かがあるのか。

そのよつな考へも力も、愚かなだけだ。

「サージェス、手加減は無用だ。」

「心得ております。」

サージェスが一步踏み出した。師団がそれに応えて剣を抜き、構

える。

「アシュリー様とファニアス様を、命を賭してお護りせよー。」

空気を震わす声が響き渡る。それを見て、アシュリーが目を閉じた。

「一部隊、行け！」

サージェスの命に呼応して、五人が前方へ突っ込んでいった。アシュリーの詠唱がそれを援護する。斬り込んでいく彼らの周辺に不可視の壁を創り出し、彼らの身体を重力から解放する。

道を開ける役目を果たす為に一部隊が激烈に動けば、その後を一部隊が進んでいく。そこには、当然アシュリーもいる。その背後を護る二部隊も苛烈だった。

クライストに仇なす者には、誰一人容赦しない。

皆のような城の螺旋階段を、軽快に駆け上がりしていく。後ろに続く、ヴィーグとジルキスが追手を斬り捨て、フィフィが後方を打ち崩す。

「俺たち良いコンビですよねえ」

ヴィーグが呑気にそんな事を言って、ジルキスがにやついた。

「ほんと。これでファニアス様が女だつたら、恋でも出来るの。」

フィフィの矢があらぬ方向へ飛んでいった。

「…………」

無言でそれを見やつて、ヴィーグとジルキスは真面目に言った。

「大丈夫ですよ。いくら食えても同性には手え出しませんから。」

「そうですよ。いくらなんでもそれはないです。」

「…………ははは……」

（こつらだけには女だつてばれない方が良い気がする……）

フィフィは頭を振つて、目の前に集中した。

螺旋階段を昇りきると、今度は迷路のようになに通路が別れていた。躊躇わざ走りながらも、驚く程思考の似通つた三人は三手に別れた。敵の方が戸惑つたようだ。

（やめあみやがれ！絶対に巻いてやるー）

フィフィは扉についた扉に体当たりして入り込んだ。そこにはただ、上下階へ通じる階段だけがあつた。

（どりちく…）

一瞬戸惑い、下の階へと駆け出す。後ろから追い立てる足音は、もしかしたらフィフィの姿が見えなかつたかも知れない。

（だといいけどな。いくらなんでも多勢に無勢だからな…）

なるべく足音を立てないよう、なるべく階段をすつ飛ばして駆ける。だんだんと光が入らなくなる階段は、足下さえはつきり見えなくなってきた。

（まぢいな…）

灯りが欲しい。そう思った瞬間、耳元から光が飛び出して、フィフィの足下を照らし始めた。

「ウイスペル！」

忘れていた。

最近、あまりに大人しかったから。なんて言つたら即座に耳飾りに戻つてしまふだろうから言わないが。クライストにいた時はちょくちょく出て来ていたのに。

「助かる。ありがとな。」

声をかければ、相変わらずの可愛らしい鈴の音が返つてくる。それにちょっとほつとして、フィフィは暗い階段を駆け下りた。

駆け上がっていた螺旋階段は、皆の内壁に沿つて造られていた。そして、今駆け下りているのは、螺旋階段の内側に造られた階段だつた。こちらは螺旋ではなく、直線だ。

何度か角を曲がつては降りる。残念ながら追手は完全には巻かれず、人数は分からぬが、追いつかれたら厄介だ。

「！？」

しかし、通路は無情にも、唐突に終わりを告げた。

「なんで…」

壁、だつた。道が途切れている。耳を澄ますと、幸いにも追手がここへ辿り着くにはまだ少しかかりそうだ。

（どうする…？ウイスペルに手伝つてもらえれば追手を突破出来るか…？）

後ろを振り返るが、駆け下りて来た階段以外のものは見当たらぬ

かつた。

(……やるしかないよな……)

まあ、こんな狭い所だ。狭い所には狭い所なりの戦い方がある。

(あ、そういうのもいたつけ。)

おまけに大精靈を思い出して、よし、行くか。と氣合を入れたのだが。

「？」

ウイスペルが、行き止まりの壁の前に浮いていた。じいっと、壁を見ているような気がする。

「ウイスペル？」

そつと声をかけるが、微動だにしない。

(一体どうしたんだ……?)

耳を澄ますと、足音が近づいてきている。

「ウイス……？」

光が、呼吸しているように見えた。ひと呼吸ごとにウイスペルの光が強くなつていぐ。それと同時に、ちりん、ちりん、と音も響く。

(何してるんだ……?)

訝しんで、その壁を見た。すると、わずかに文様が現れていた。

(え……)

文様は、ウイスペルの呼吸に反応するように、徐々に深く溝を刻み、はつきりとしてきていた。やがて全ての文様がくつきり現れると、壁が揺らいで、消えてしまった。

「……これ……」

(アシュリー様の回廊にあるのと、同じようなやつか……?)

驚いてしまって動かないフイフイを、ウイスペルが少し先に進んで呼んでいる。

(ウイスペルの話しかけてきてる事……いつの間にこんなに分かるようになつたんだろう?)

思わず苦笑しながらも、フイフイはウイスペルについて奥へと足を進めた。壁があつた所を通り過ぎた途端、消えていた壁が元に戻つた。

「おお……」

こんな時でもちょっと感動してしまう。前を向くと、ウイスペルは行くべき道が分かつてゐるらしく、ふわり、ふわり、と進んでいく。暗い石造りの通路を、仄青い光が漂う様は、少しだけ不気味で、神秘的だ。自分の足音と息づかいしか聞こえない。通路もどこまで続いていくしか分からぬ。

（そういうエウエラに拉致された時も…こんな風に不気味な空間が続いたな…）

なんて考えていたら、急にウィスペルが耳飾りへ突っ込んで来た。

「えつ…なに、どうしたんだよ…」

突っ込んだきり沈黙してしまった。光は灯してくれているが、耳飾りから動かない。

「ウィスペル…？」

そつと耳飾りを指先で撫でてやる。するとほんの小さな音で、返事をしてくれた。

「いいよ。そこにいれば。」

そう言つて、ともかく歩き出そうとした。

通路の先に、いつの間にか人が立っていた。

（いつ…？）

今も、気配が薄い。

（何者…）

そいつを見据えて、進んでいく。怯んでなんかいられない。後ろにはパークウェルの刺客がいるし、別れたヴィーグとジルキス、ア

シユリー達もいる。そしてここ、ラナス国の人達も。

勇んで進んでくるフィフィを見つめて、その人は微笑んだ。とはいっても顔は目元までフードで隠れているし、足下までマントで覆われていて、正体が見えない。十分に距離を詰めて、フィフィは誰何した。

「お前、誰だ? ラナス国の国民か?」

友好的ではないフィフィの態度にも、何故だか嬉しそうに微笑む。そして、ゆっくりと口を開いた。

「また会えて嬉しいよ。」

「……?」

聞いた事がある。少し低めの、心地良い声音。啞然と見つめるフィフィの前で、男は俯きがちだった顔を少しだけ上げた。

「あ、お前……!」

レシテからハーグヴェルへ抜ける渓谷で出会った旅人だった。深い紫色の瞳はそういうない。見知った人物だったが、フィフィはさつと緊張した。それを見て男は、警戒する子犬を見るように笑った。

「そう警戒しなくていい。俺は今、ラナス国と侵入者の仲介をしてるんだ。」
「仲介だと?」

思いつきり眉を顰めた。

「お前は何者だ。」

くすり、と男は笑った。今までとは違い、問われた事を楽しむようだ。

(あれ‥なんかこういう笑い方見た事ある‥?)

既視感に囚われたフイフイに、男は一步近づいた。気配が薄く、どんなに近づいても危機感が沸かない。男は、そつとフイフイの顔を覗き込んだ。綺麗で、不思議な魅力を持った瞳が、フイフイの視線を捉えて瞬いた。

「俺はウォルスという。お前は?」

静かで、心地良い声音。不思議と落ち着く瞳。一瞬、今が大変な状況だというのを忘れそうになつた。

「ウォルス‥?」

はつと我に返つて、聞いた名前を繰り返した。

「魔人!‥?」

自分で叫んだ言葉に驚き、一歩後ずさつた。ウォルスが楽しそうに笑う。

「まあ、そう呼ばれているな。」

「な、なんで‥これも“手伝い”か?」

するとウォルスの瞳が煌めいた。

「よく知つてゐるな。さてはアシュリーに聞いたか？」

「…………それで、仲介つてのは？」

ウォルスといふと調子が狂う。ここだけ空間が違うみたいだ。

「言つた通りの意味だ。ここへ入れたのは光の精のおかげだろうが、ここから先はそうはいかない。」

「光の精…つてウイスペルか。で？」

今頃あの一人はどうじてゐるだろう。アシュリー達は、そう考えたら急に焦つてくる。

「ラナス国を救う事が出来ると誓約するのなら、案内しよう。」

「俺が勝手に約束していい事じゃない。」

即座に答えたフィフィに、ウォルスは楽しそうに笑つた。

「どうか。それなら戻るか？」

「戻れるか！さつと案内してくれよー！」

いきり立つたフィフィに胸ぐらを掴まれても、子犬のじやれつき程度にしか思わない様子でウォルスは笑う。

「誓約するなら。」

「そういうのはアシュリー様にしりー。」

「お前は絶対にしないんだな？」

「だからー俺が勝手に決めていい事じやねえんだよー！」

ゆでゆで揺すられても動じない。

「ああむつー。」

突き放して叫んだ。もどかしい。

「俺はただの弓術師で助手で護衛だ！国を救う力なんてないんだよ！」

叫んで睨みつける。動じない瞳が憎らしい。

「だけど助けようとしてんだろ！さっさと案内しやがれ暇人め！」

「暇人……」

くつくつく、とウォルスは笑った。肩で息をするフイフイは、それを見てぐつと拳を握る。ウォルスはますます可笑しくなったようで、腹を抱えて笑い出した。

「もういい、どけ！」

たまらず、腰に忍ばせていた短剣を手にして斬り掛けた。魔人なら多少斬りつけても死はないだろう。それに、怪我を気遣つていられる程の余裕もないのだ。

ひとつ飛びで斬りつけた。避けたり、怪我を負えればそれで良かつた。それで道が空く。奥へ進める。だが。

「！？」

キン、と甲高い音が辺りに響いた。厚い氷を割った様な感触が手に伝わった。

「……っ！」

フィフィの短剣の先には僅かな隙間があり、その下にはウォルスの手があった。ほんの少し短剣が下がるだけで触れてしまうのに、まるで刃を合わせているように短剣が動かない。ぐっと力を入れても、びくともしなかった。

（どういう事だ……！？）

ぐすり、とウォルスが笑った。ぱっと身を翻して飛び退く。ゆっくりと手を下ろしたのを見て、フィフィは声を絞り出した。

「……どういう…事だ…？」

「お前は魔術に疎いんだな。」

「今のが魔術だつてのか！？詠唱もなしに！？」

怒鳴るフィフィに、ウォルスはどこまでも静かに笑う。

「詠唱のない魔術も見て来た筈だが？ラナス国へ入った時に。」「……あれは、発動条件が…陣が引いてあつた筈だ。」

するとウォルスは、面白そうに首を傾げた。

「陣についての知識は多少あるのか。」

「俺が無知だつて言うのは分かつてんだよ…」

「まあそう怒るな。案内してやる。」

「だから……へ？」

予想外の言葉が聞こえて、思わず肩の力が抜けた。拳だけは握り

しめたままだ。

「お前の気持ちが弱いものではなことこいつのは分かった。だから、案内してやるわ。」「…………そりゃ、エリサエ……」

勢い込んだ気持ちが収まつたりず、もやもやしたまま、応礼を言った。

「素直だな。やはり、お前は良いい女だ。」「…………」

変な口調に眉根を寄せた。ここつま本当に調子が狂へ。

「じゃあわざと案内しや。」「仰せのまことに。お嬢さん。」「やめる気持ちは悪い。」「…………」

心底嫌がるフイフイを見て、ウォルスはくすくす笑いながらも歩き出した。げんなりしながらも後を追つ。その耳元で、ウイスペルが不安気に揺れた。

フイフイと別れて刺客を惹き付けつつ走り回っていたヴィーグとジルキスは、分かれ道を走つて、うちに合流してしまった。

「あつ、何やつてんだよー。」「お前、ソニー。纏めてどうすんだよー。」

罵り合いながらもぐんぐん走り、時折振り向き様に刺客を切り伏せる。

「まざいな……」

「言つなよ。嫌になるだろ。」

ちらりと振り返ると、長い刺客の列が廊下の奥まで見える。

「ファニアス様……無事だらうな……」

「無事だろ。ヴィルジウス殿下が認めた腕前だぞ？」

「それもそうか。」

にやりと笑い合つて前を見据えた瞬間、二人の顔から余裕が消えた。

「「……まざいな。」」

田の前は通路の終わり。外へ誘うアーチの先は、半円の露台が見える。当然、それより先は翼でもなければいけない。

「俺ここで終わりか！？」
「逃げただけで！？」

嘆き叫ぶ二人には、命の危機だというのに緊張感がない。そんな二人がアーチをぐぐりとした時。露台の床に陣が浮かび、待ち望んだ人が現れた。

「「?????アシユリー様！！」」

光を纏わせたその姿は、神々しさすら感じさせた。閉じられていた瞼が開くと深い群青色の瞳が現れ、それと同時に纏っていた光が砕け散つた。そして、幻想的だつた大魔術師は、一気に現実へと降臨したのだつた。

「？？穿うがて、雷光！」

普段詠唱する時とは違い、歌う様な旋律ではなく、言葉が力を持つて空間を震わせた。それに応えるように、突如たくさんの稻妻がアシュリーから刺客達へと走つた。ほとんどが衝撃で倒れていなくなが、かろうじて避けた、または堪えた者達が容赦なくヴィーグとジルキスへ襲いかかる。

だが、アシュリーという救世主を得た一人は、先程の弱気はどこへやら、猛然と反撃を開始していた。雷撃を避けた敵をすかさず斬り倒し、隙をついてくる敵を斬り伏せ、とてつもない勢いで押し返していく。その勢いに刺客は怯み、たじろいで後退する者すら出始めた。

アシュリーが転移してきて数分も経っていない。が、その影響力は凄まじいものがあつた。

「アシュリー様！ フィアニス様は中に！」

ヴィーグが叫ぶと、アシュリーが目を見開いた。

「一緒にじゃないのか！？」

（今気付いたのか…）

とは言えない。ヴィーグは頷いた。

「ここはもう大丈夫です！ フィアース様の元へ！」

ジルキスが叫ぶと、アシュリーは頷きもせずに駆け出した。魔術で敵をなぎ倒していく様は圧巻だった。しかし、見送る一人は呟いた。

「アシュリー様が全力で走ってる……」「

それはかなり貴重な姿だった。

「この先に国王もいる。」

ウォルスは振り返り、一步横へずれて道を示した。訝しみながらもウォルスの隣に立ち、指示された道へ向く。ウォルスへ背を向ける形になつた。そして、一步進んで立ち止まつた。

「…」

壁が、目の前にあつた。

（計つたな！）

振り返るとすぐそばにウォルスの柔らかい眼差しがあつた。見下るされて、どこにも逃げ場がない事を悟る。

「てめえ……！」

睨み上げるフイフイを楽しそうに眺め、ウォルスは口を開いた。

「名前を聞いていなかつた。」

しつとそんな事を言つてくる。

「誰がてめえに……！」

「それなら、外へ送つてやるわつか？」

「！」

（「こいつ……一齧しやがつて……！」）

「……フイニアースだ。」

「それは男名だろ？」

「……」

（「こいつに言つのがすげえむかつぐ……」）

「……ルセ。」

「俺は名前を聞いているんだが？」

すつ、と首の横に手を置かれ、フイフイはぐつと奥歯を噛み締めた。

「………… フィフィ。」

すぐにウォルスは一步離れた。

「フィフィ。 そうか。」

嬉しそうに笑う。その面を殴りたくなつたが、それで城の外へ追い出されでは堪らない。

「さつさと出しゃがれ！」

「人は物じやないだろうに……」

ウォルスは笑いながら壁に手を当てた。ふわり、と一瞬空気が軽くなつたかと思うと、行き止まりだと思っていた壁に文様が浮かび上がつた。

（ウイスペルが開けてくれた時と同じだ……）

文様は異なるが、同じ魔術が使われているのだろう。全ての文様が輝くと、水面のように波打つて壁が消えた。

そこには、かなり広い広間のような部屋があつた。奥に縮こまるのはラナス国の国民だろう。そして、中央に立つてするのが国王だらうか。

「ラナス王。 クライストが手を貸してくれるようだ。」

「なに…？」

やはり、返事を返したのは中央に立つ人物だつた。背を向けてい

たその人はゆっくりと振り返る。初老の、鋭い目をした人だった。

「その者は？」

「アシュリー＝ウイルレイユの助手で、ルセと言つ。」

（あれ…）

てっきりファイファイだと言うのかと思った。女名を隠しておきたい
といふのを考慮してくれたんだろうか。

「あの大魔術師が、ここへ来ているといふのか？」

驚くラナス王へファイファイは声を上げた。

「あんた達はあの植物に追いやられて、こんなところにいるんだろ
？あれにはハーケヴェルが一枚噛んでる事が分かつた。アシュリー
様はその調査で來た。そしたら国境が魔術で閉ざされたんだ。
「やはりまだ閉ざされてあるか…。」

「ついでにこの城へ入った途端にハーケヴェルの兵士がわんさか襲
つて來た。今も皆が襲われてる。協力してくれないか？こつちは二
十人くらいしかいないんだ。いくらなんでも分が悪い。」

「……」

ラナス王は射る様な目でファイファイを見つめた。小国の王といえど
も、その目はとても力強かつた。ぐくり、と唾を飲む。

「……クリストはまことに我らを助ける為だけに動いておるのか
？」

「は？」

不愉快さに眉をしかめるフィフィを見て尚、ラナス王は続けた。

「先程も転移魔術を使つたようだが……この意味が分からぬ訳ではあるまい。」

息を、吸い込んだ。

「あんたは馬鹿か！」

「なつ……」

ざわりと全員がいきり立つ。だが、フィフィは止めなかつた。

「自分たちがどういう状況にいるのか分かつてんだろくなー！孤立無援なんだぞ！？」アシュリー様だつてすぐには境界壁が壊せないって言つてんだ！それなのにハーケヴェルの兵士がたくさんいる。……これでもぐだぐだ言つ暇があんのかよ！」

フィフィの態度に腰を浮かせた彼らだが、ウォルスの静かな言葉にははつとした。

「……」こを見つけるのも時間の問題だろう。今まで大人しくこの城を囲つていたのは、アシュリーを待つていたからだ。今はもうその必要がない。」

「ウイルレイユ様を……？」

思案するラナス王を見て、フィフィは我慢出来ずに叫んだ。

「だからー！クライストが狙われてんだよー！さつさと奴らを追い払いたいんだ！」

「帝国の争いに、我らは巻き込まれたところのかーふやかぬな！」

(「のクソジジイー」)

もどかしくて悔しくて、爪が食い込む程きつくな拳を握りしめた。

「ヴァグル陛下…」

はつとじて振り返った。

「……え？」

そこには、荒い息のアシュリーがいた。汗までかいている。

静まり返った部屋の中央へ、アシュリーが足を進める。躊躇つてそれを見守っていた。アシュリーはラナス王の前へ行くと、躊躇いなく膝を折つて頭を垂れた。

「何を…！」

帝国の大魔術師の行動に、不安氣なざめきが広がる。

「ハーケヴェルはクライストを落とす為に、嵐と植物を利用しました。我が国は今、危機に晒されています。」

「そなたが帰還する為に我らを欲するのか。」

「いいえ。ここで帰つても嵐と植物は消えません。元を絶つ為には、まだ嵐を辿らなければなりません。」

その発言に、ラナス王は息を呑んだ。

「そなたが戻らざして、クライストは…」

「分かりませんが、植物を放置すればクライストのみならず、植物に侵された国全てがハーグヴェルに支配されるでしょう。」

「なんと…まことか。」

「まことです。ですから、ヴァグル陛下。ここにいるハーグヴェルの兵士を蹴散らす為、お力を貸し願えませんか？」

ラナス王はしばしばアシュリーを見つめた。その目に困惑が見えた気がして、フィフィは息を詰める。アシュリーの言葉は、ちゃんと届いている筈だ。

細く、息が吐かれた。見守る全員に届く声で、ラナス王は言った。

「我々を捨て置く事も出来ただろう。……そなたの…クライストの温情に感謝する。それに応えよう。」

喜んだ次には驚いた。ラナス王に応えて国民が血氣づいたのだ。

思わずアシュリーに駆け寄った。

「アシュリー様!」

駆け寄ったフィフィをじっと見て、それから小さく息を吐いた。

そして、睨んだ。

「偵察に行つたのになんで戻らずに突つ込んでいくわけ?」

「へ?」

良かつたですね、といつ言葉が吹つ飛んだ。ついでに無事で良かったといつ気持ちも。

「それものにの」ウォルスについて行くつてどうこのつ事？」
「え、なんでその事…」

（わういえばウォルスは？）

きよりきよりと辺りを見回すが、田立つ男の姿は見えなかつた。

「聞いてる？」
「え？ああ、はい。むついて行きませんから。必要もないですしお。
「…………むついい。」

素直に謝つたのに呆れられた。溜息一つつこて、アシュリーはフイフイを押しのけてラナス国の人間に言ひ。

「我々は城の中を。貴方がたは外をお任せしてよろしいですか？」

すると、ラナス王が大きく頷いた。

「任せておけ。」「…それでは、」武運を。「そなた達もな。」

言葉を交わし、すぐにアシュリーは踵を返した。フイフイも慌てついて行く。

「あの一人には会いました？」

「だれ？」

言ひと思ひた。ファーフィは苦笑するしかない。

「えーっと……ヴィーグ……あ、ジルキス！です。」

「ああ……会った。無事だ。」

「サージェス達も？」

「君は自分の心配をしろ。多勢に無勢だ。」

「それは……確かにそうですね……運が良かつたです。」

「……」

ウイスペルが開いてくれた通路まで戻ると、階段の上から駆け下りてくる音がした。

「下がつてください。俺が出ます。」

すつと一步フイフイが前に出ると、アシュリーは小声で詠唱を始めた。ふわりと身体が軽くなつた。

（なんかしてくれたのかな……）

なんだか嬉しくなる。そして、闘志がざわざわと沸いて来た。体中の感覚がぴりりと鋭くなり、空気が冴える。

壁にぴたりと身体をつけて身を離すと、足音が迫るのを待つ。

気配を探る。敵が迫る。気配が、迫る。

「ぐあつーー？」

敵の姿がようやく見えるかという時に、フィフィは矢を相手の肩掛けで突き刺した。そのままその横腹を渾身の力で蹴飛ばす。

「うらあつー！」

蹴飛ばされた男はよろめき、すぐ後ろに来ていた仲間を道連れに、向いの壁へ倒れ込んだ。すると、壁と床に亀裂が入り、音を立てて彼らを半分呑み込んだ。

「げつーこれ……」

振り返るとアシュリーが涼しい顔をしていた。

（ハ、こええ……）

「上まで行く。せつせつと手をつける。」

「あ、はい……」

早く行け、と田代が促され、フィフィは氣合いで新たに階段を駆け上り始めた。

「後ろー！」
「分かつてんだよー！」

相変わらずぎやあぎやあと言い合いながら敵を斬り伏せる一人は、さすがに息が上がってきていた。

「右！」

「後ろ！」

何故だかお互いのフォローをする一人には、余裕があるのかないのか分からぬ。そんな一人に喝を入れるかのように、頭程の大きさの炎の弾が一人の隙間を通り抜けた。

「あつっ！焦げたぞ！」

「肉が焦げなくて良かつたな…」

言いながらジルキスは、炎の弾を放り込んだ魔術師を倒した。

「うじやうじや来るな」

「これでクライストも同時攻撃されてんのかな…」

「…………」

それつきり、二人は黙つて敵をなぎ倒しにかかった。

階段を駆け上がりながら敵を倒していく。フイフイが「」と短剣で攻撃していくのを、アシュリーが的確に援護する。

（魔術師と組んで戦う事なんて無かつたけど……すっげえやりやすい！）

身体が軽いのは魔術のおかげだろうが、気持ち良い程軽快に進んでいける。恐ろしい程の数の敵が雪崩れ込んでくるのに、それが全然不安にならない程だ。

「アシュリー様！上まで行つてどうするんですか！？追い込まれますよ！？」

戦いながらも叫ぶと、アシュリーも叫び返した。

「下からサージェス達が来る！それで終わりだ！」
「分かりました！」

襲いくる敵をなぎ倒し、二人で駆け上がりしていく。その背後からも、敵はアシュリー達を執拗に追い立てていく。

フィフィ、ヴィーグ、ジルキス三人が別れた螺旋階段の終わりまでくると、今度は外へ向かうアーチの向こうに螺旋階段があつた。外壁に沿つて上へと続いている。そこを走り、大勢の敵が姿を晒したところでアシュリーは一気に魔術を放つた。

「？？裁きを！聖炎！」

アシュリーがかざした手の平から、黄金の炎が生き物のようになつて襲いかかっていく。後には倒れ伏した敵が残つた。

（すげえ…大魔術師つていうだけあるって事か…）

正直、こんなに頼もしい存在だったとは思つてもみなかつた。今更ながら失礼だつたと思い直した。

（終わつたらもうひょいと敬おつ。）

そう思つてちらりと後ろを振り返ると？？。

「アシュリー様！大丈夫ですか！？」

「う……」

普段運動などしない人間が、さつきから走りっぱなしなのだ。しかも、階段がほとんど。ファイファイと同じ体力の筈がなかつた。

つまり？？体力が切れた。

「アシュリー様…」

駆け寄りつつも、まだ新手が近づけない事を確認した。肩を貸して先を急ぐ。

「とにかく今のうちに最上階に行きましょう。」

「ああ…」

返事もやつとだ。

（はあー…今思い直したばつかなのに…）

ちょっと遠くを見ながらそう思つていると、ふいに前方から影が飛び出してきた。

咄嗟にアシュリーをその場に押さえつけ、突き出された剣を避ける為に飛び退いた。剣先が喉をかすめ、外壁に足を取られてバランスを崩した。

（やばつ…）

「この高さから墜ちれば、命はない。」

アシュリーは押さえつけられた直後、顔を上げるとフィフィが足を取られて外壁の向こうへ消えかけているのが見えた。追い打ちをかけようとする敵を一撃で仕留め、外壁へ駆け寄って下を覗き込む。

「つ……な……」

フィフィは、外壁にしがみついていた。

「アシュリー様、さつきの奴は！？」

「大丈夫だ。それより……」

フィフィは、想像していたような焦った顔ではなかつた。むしろ。

「……平氣、なの？」

「ええまあ。しつかり掴めてるんで。そこどいてもらえますか？今から上がりります。」

「あ、ああ……」

戸惑いながらもフィフィを見つめたアシュリーの頭上、上の階の螺旋階段を、敵が駆け下りてくるのが見えた。

「アシュリー様！上から敵が来ます！」

「！」

はつと螺旋階段を見上げた。

「！？」

上から、外壁を掴んでいるフィフィの手すれすれに矢が突き刺さつた。

「 「……」 」

これは、まずい。

「ちょっと…何してるんですか！？」

「早く上がり！」

アシュリーがフィフィの腕を掴む。が、所詮アシュリーの力ではフィフィを引き上げる事は不可能だった。

「いいから離して下さいー！掴んでたら一緒に落ちるかも知れな」「つかれやーー！」

(うへ、つるむぞこいつ…)

アシュリーを睨んだその時、背後に剣を振りかぶる敵が見えた。アシュリーは気付いていない。

「アシュリー様っ！」

「！？」

アシュリーが斬られるところなんて、見たくない。

最悪だ。

自分のせい
で。

一瞬目の前が真っ暗になつた。が、次いで聞こえた悲鳴に我に返つた。

怒鳴るアシュリーの声が聞こえにくい。それ以上の大きな音が耳に容赦なく入つてきていた。風だ。

(も……落ちてゐる……！？)

一人は、もの凄い勢いで落ちていた。アシュリーは逃げる事も、手を離す事もせず、自ら飛び降りたのだ。正確にはしがみついている。結果、斬られるのは避けられたものの、今だ命の危機には変わりない。

גַּתְּנָהָרָתָן

心無しかアシュリーの声が弱々しくなつてゐる気がする。

(もしかして…)

「アシュリー様!?

「なに…」

「気を失つちや駄目です…起きて…」

「つるや…」

「起きて…」

必死にアシュリーに叫びまくる。アシュリーの掴む手が弱くなつてきたので、逆にファイファイが抱え込んだ。

(どうすんだよこれ!あたしじや何も出来ねえよ…)

なんとか出来るかも知れないのはアシュリーだ。そのアシュリーは今、意識を保つのに精一杯。

「アシュリー様しつかり!死にますよ!のまほじやー…」

「つるや…」

「アシュリー様あああ…」

「つ…」

落ちてゐる。もの凄い勢いで頭から落ちてゐる。城は天まで届く高さ…ではない。地面がみるみる近づいてくる。死ぬ。確實に。

「誰かーつーアシュリー様ーー…」

「つ…や…」

『誰かってなんなのよ…』

「へつ？」

（誰だ？なんだ？）

思わず落ちながら空を見つめる。

『貴女ねえ！この私がついてるのになつぱり忘れてるつてどうにつけ事よー』

「あ。」

（忘れてた。完全に。）

「怒るくらいなら助けてくれよー。アシュリー様氣絶しそうなんだけどー！」

『情けないわね…。助けてあげてもいいけど。』

「早く！死ぬから！」

『せつかちねえ…』

その言葉が聞こえた途端、急激に落下が止まつた。ぴたりと止まつたわけではないが、風の抵抗を感じない程、のんびり話しが出来る程に、ゆつくつとなつた。

（すげえ…最初からエウホラに頼れば良かつた…！）

思わず涙ぐみそうになつた。

『私のありがたさ、分かつた？』

『分かつた！もの凄く分かつた！あんたは神だ！』

嬉しげについでこしつかりとアシュリーを抱え直した。

『神じや なくて大精靈よ。頭悪いの? 貴女。』

「可愛くねえ…」

『なんですかって?』

「なんでもありません……アシュリー様! もう死ななくて済みましたよ!』

「うめえ。ほんとに。」

落下が止まり、アシュリーは徐々に意識がしつかりしてきたようだ。言葉がしつかりしてきた。

「大精靈エウホラ… お救い下さり、感謝する。」
(え、エウホラって偉いんだ…)

『今聞こえた助手の声は聞かなかつた事にしてあげる。アス。強くなる事ね。護りたければ。』

「…肝に銘じます。」

苦笑しながらそう答えたアシュリーは、フイフイが今まで見た事がない表情だった。

『じゃあね。後はあなたがなんとかしなさい。』

「言わぬくとも。」

（つていうか）の声、アシュリー様も聞こえてたんだ…）

もだり、ヒアシュリーが身じろぎした。何かと思って顔を合わせると、ぎくっと身を強ばらせた後、さつと視線を外してアシュリーが言った。

「…ひょっと腕緩めてくれる?」

「あ。すこません。」

落ちないように少し緩めると、ほっと息を漏らしてアシュリーは詠唱を始めた。

「??汝は我を護る翼。大地に降り立つその時まで、我らを護り給え??」

ふわり、と足下が軽くなつた。と同時に抵抗を感じ、ともすれば空に立てそうな気配がする。

「これ…」

「立つて。」

言われて、ゆくぐりと態勢を変えてみる。ぶよぶよしたマットに立つように不安定だったが、それでもなんとか立つてみると、意外にもしつかり立てた。

「すげえ…」

「ほり、もう地面に着く。」

「あ、ほんとですね！良かつた…今回ばかりは駄目かと思いました。」

「ほんとに…」

それから少しして、二人は無事に地面に降り立った。

その後、アシュリーとフイフィはもう一度城の最上階へ転移し、
サー・ジエス達と挟み撃ちにしてハーグヴェルの兵を叩きのめした。
しかし残った数人の魔術師が骸ごと転移して逃げてしまったのだ。
おそらくはハーグヴェルへ逃げ帰ったのだろう。

「…………

「どうしたんですか？」

アシュリーが消え失せた転移陣を睨みつけていた。訊くと、顔を
しかめて言った。

「……彼らは無事でいられるのかと思って。」

「彼ら？」

無事を祈る相手と言えば、クライストだろうか。

「ニル様達なら…」

「違う。ここにいたハーグヴェルの兵だ。」

「は？」

敵を案じるなんて、アシュリーはこんなにお人好しだったのか。
そう思つて思い切り見つめてしまった。

「…嫌な予感がする…」

(……またか…)

アシュリーの予感はとんでもなく当たっていそうで、怖い。

「じゃあ早く戻りましょ。」

「は?」

軽い言葉にアシュリーが睨んできた。

「だから、早くなんとかして、さあさと帰りましょ。」

フィフィだつてクライストの国民だ。自国が侵略されようといつに放つたらかしに出来るわけがない。自分が生まれ育つた国は、やっぱり好きだ。フォルクローデだつている。絶対に、助けたい。

「…………」

二人は田を合わせて、小さく頷いた。

「ウイルレイユ殿。」

振り返ると、ラナス国の大王に続き、兵、国民、とおもろくは全員が集まっていた。こうしてみると本当に小国なのだと思つ。クライストでは全員がこの場に集まるなんて事は出来ないだらつ。何せ、人口が多過ぎる。

「ウイルレイユ殿…そなたには…いや、クライストには、力をお貸し頂き感謝する。そなたの力がなければどうなつていたか…情けない事ではあるが、本当に救われた。」

アシュリーは一步前へ出て、躊躇いなく跪いた。それにまたざさめきが広がる。いつの間にかアシュリーとフィフィの後ろにはサー・ジェス達が戻ってきていた。ヴィーグとジルキスも無事なようだ。フィフィと田が合つと軽く手を振った。

(軽いやつり…)

だが、それが緊張を和らげているから助かる。

「ヴァグル陛下。」ちぢれ、お力を貸し頂き感謝する。おかげで一人も欠ける事なくすみました。」

「……ウイルレイコ殿…」

ラナス王は何か言おうとしてしばらくなみ、結局は首を振つて諦めた。

「…さて、では我々は…」

「今はここに留まつていては危険です。」

心を見透かしたようにアシュリーが言つて、ラナス王はため息を吐いた。

「正直なところ、我らではこの植物は手に負えん。そなたには策があるのだな？」

「あります。ですから今は避難して頂きたい。」

「国を出ると申すか…」

ざわざわと、不安と不満が入り交じった囁きが交わされる。アシュリーはただじっと待つた。

「我らが国を出れば、その隙に國土を奪われるやも知れぬな？」

「その可能性はあります。が、植物に浸食されているのはここだけではない。それに今この土地を占拠しても、植物に侵されるだけで、得るものはない。あまり心配されずともよろしいかと。」

「……万一、という事はある。」

王は国民の住む場所を確保する義務がある。故にラナス王はしぶつていた。そんなラナス王に、アシュリーはしばし考えを巡らせて、あまり気の進まない顔で言った。

「ご心配であれば、ここへ天魔を置きましょ。」

「何？」

（天魔ってなんだ？）

ラナス王の顔色が変わった。怒っているようにも見える。

「一匹いれば十分でしょ。この植物が消え去るまでの間です。如何ですか。」

「天魔だと……。」

まるで、おぞましい物を見るかのよつだつた。恐れているのが分かつた。

（そんなに怖いもんなのか……？）

ラナス王は苦悩していた。アシュリーはただ静かに答えを待つ。そして、大きな溜息は吐かれた。

「……契約は我が言葉で行わせて頂こう。それで良いか。」

「構いません。」

言つと、アシュリーが立ち上がつた。フィフィは黙つて様子を見る。

「ここへ転移陣を開いてもよろしいか。」

「…致し方あるまい。」

許可を得て、アシュリーは詠唱を始めた。するとウイスペルが耳飾りから飛び出し、アシュリーの正面へ飛んでいった。

（なんだなんだ？）

戸惑うフィフィは、見守るしかない。

「…汝は“うつるい”。我はアシュリー＝ウイルレイゴ。我と誓約を同じくする者へ道を繋げ。彼の者はゴンファソルシア＝ミシト。天が産み落とした命である…？」

「ゴンファ…？」

思わず声に出して呟いていた。何故今ゴンファをここへ呼び出すのだろう。戸惑う間にも陣は光り輝き、ウイスペルが陣の上をひらひらと飛び回っていた。

（あ…光りが…）

まだ。光りが呼吸しているかのように強弱を繰り返す。陣の輝

きが増していく。溢れる光りの中に、突如、人影が浮かび上がった。

(ユン!)

フィフィがユンファの姿を確認した途端、光りは砕け散つて消え失せた。そしてそこには、まだ幼い魔術師が、緊張した面持ちで立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876y/>

大魔術師と助手

2011年12月19日17時47分発行